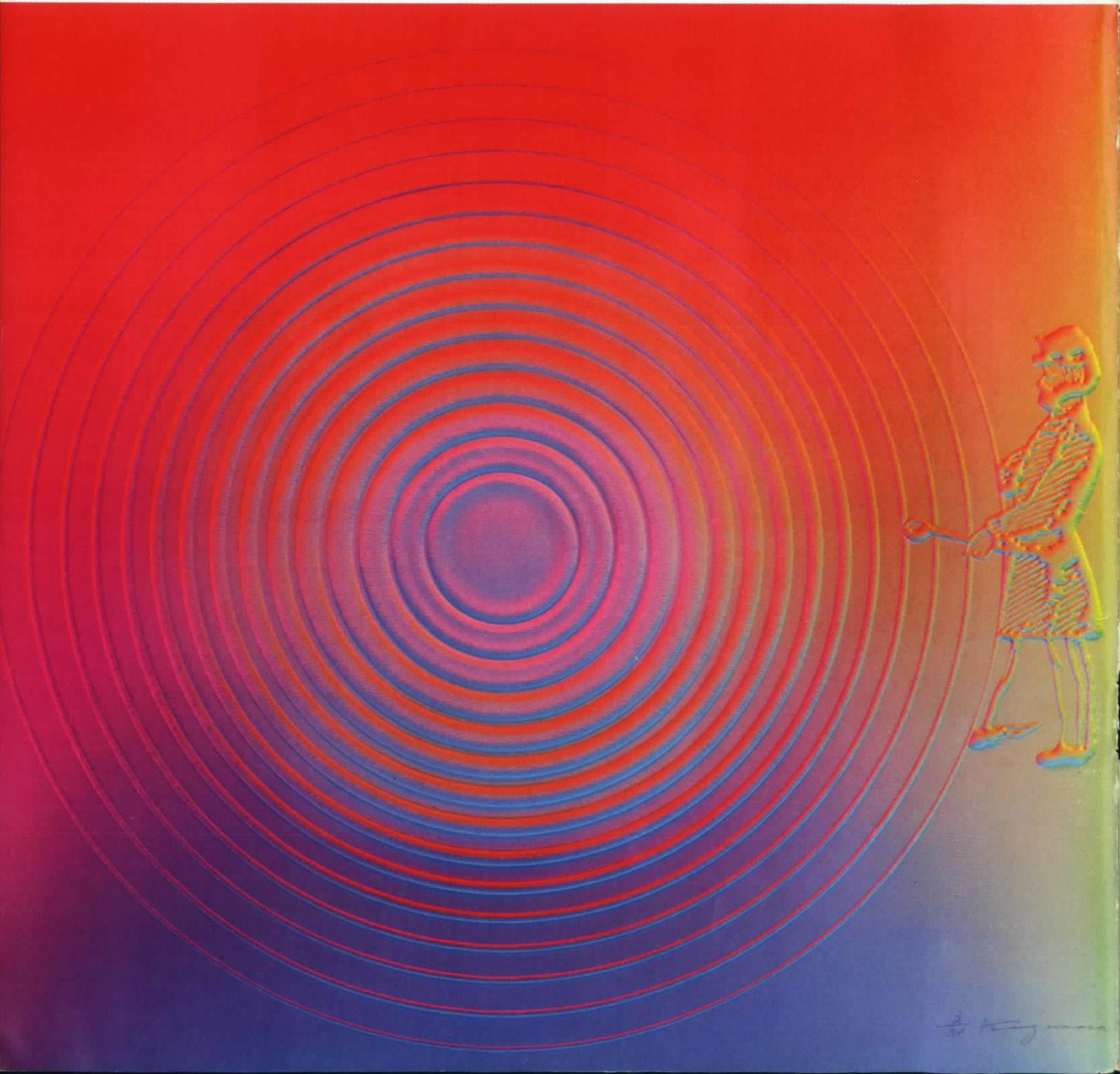


# 21世紀フォーラム

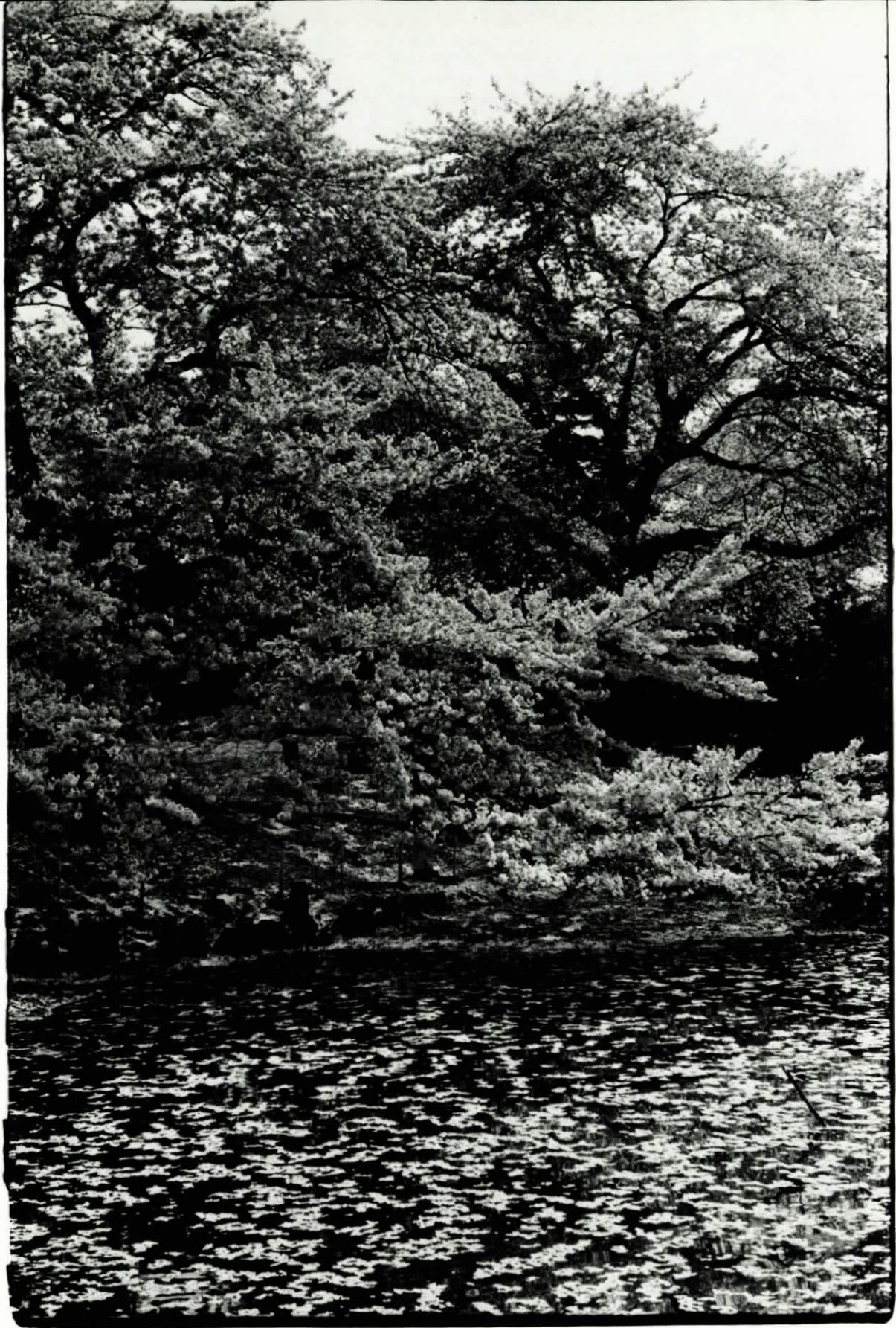
20+ONE

会報

# 4



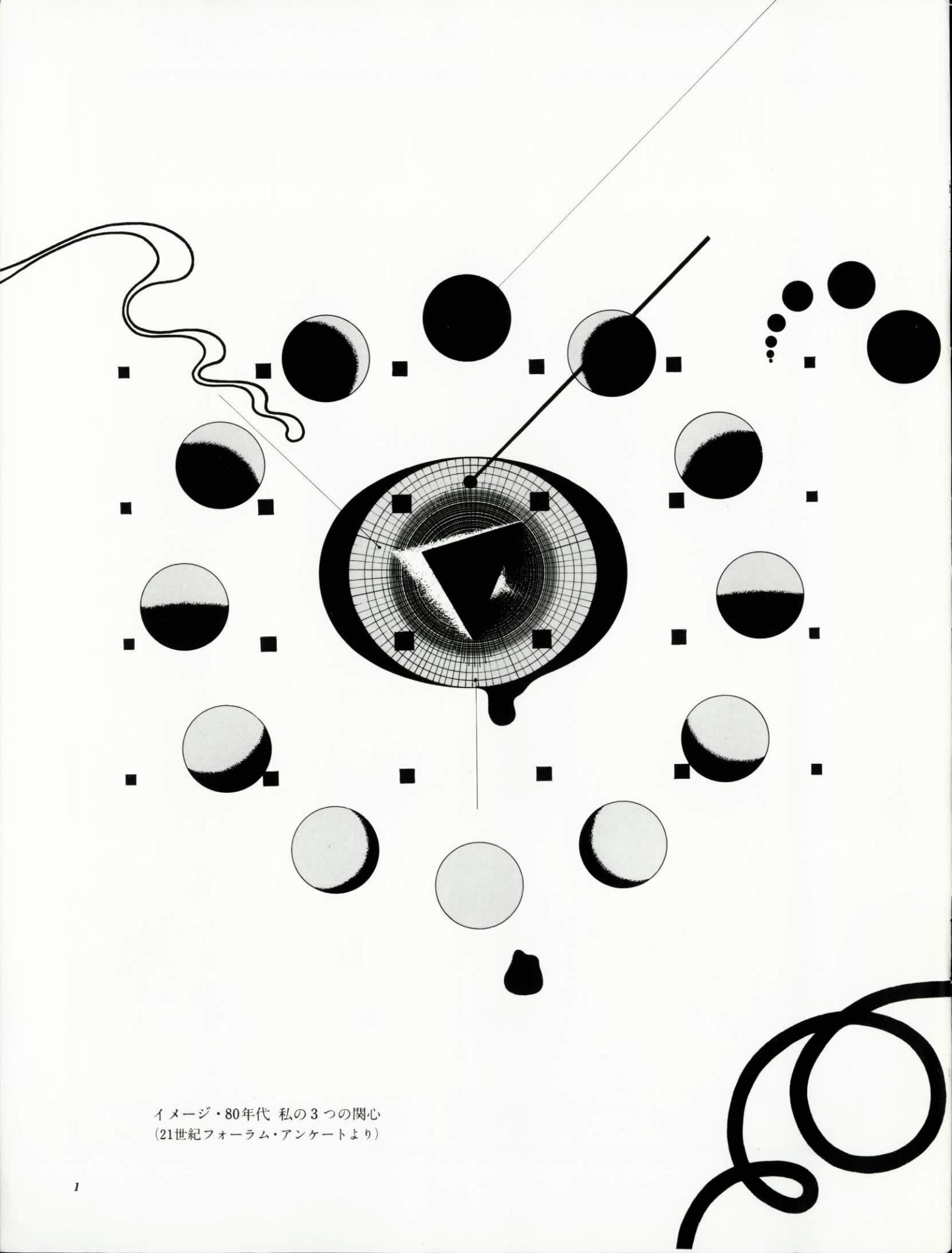
*[Handwritten signature]*



A POINT OF VIEW

## 時間

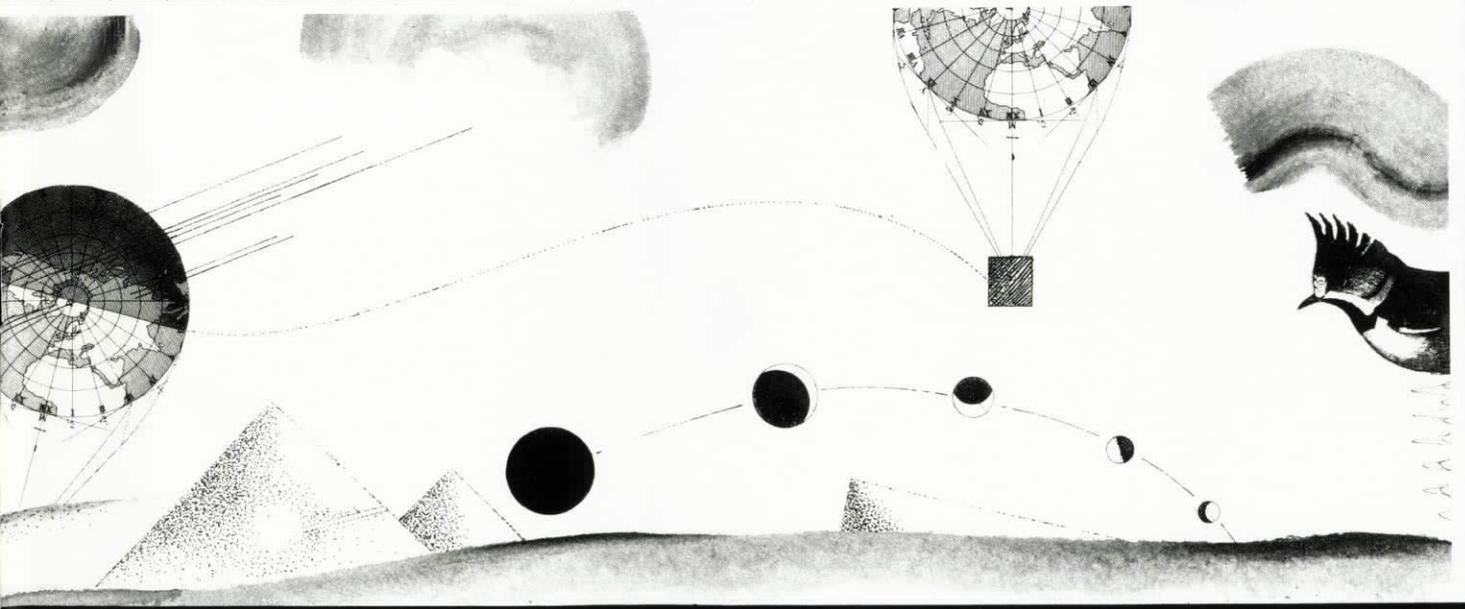
桑原甲子雄 ●都市論としての東京の一コマ。(馬事公苑)



イメージ・80年代 私の3つの関心  
(21世紀フォーラム・アンケートより)

【21世紀フォーラム アンケート】八〇年代・私の三つの関心 (到着順)

国際協力に積極的な戦略を	向坊 隆	4
欧米偏重の世界地図を清算するとき	加藤秀俊	5
世界を走る私の夢	村上兵衛	6
子供のための小さな願い	ロミ山田	7
世界地図が塗り変えられる	尾関通允	8
国の成熟へのプロセス	米山俊直	9
八〇年代論議の土性骨	林雄二郎	10
そのとき田舎はもつと生き生きしたものに	宮本常一	11
忘られた「昭和五十五年」	ロール・J・バロン	12
エネルギーを使いこなすのは人間だ	柳瀬睦男	13
時計の針は逆戻りしない	中村 貢	14
多様な価値観が時代を共にする	橋口 収	15
内面の充実した人生から	川喜田二郎	16
日本が生きていく構想は	稲葉秀三	17
「自然」とは「環境」とは	木元教子	18
基本が見えない不安の時代	生田豊朗	19
子供たちは何を考えているんだろう	富田純孝	20
政権交代と労組の責任	滝田 実	22
夢を何に托せるか	坪内ミキ子	23
日本海地域の復権を促すもの	加治 章	24
「山雨来らんと欲して風楼に満つ」	岡村和夫	25
身边雑記風八〇年代	高原須美子	26



# 中国望見

遠景と近景

（司会）

松本重治  
木元教子  
吉田実

28

●特集 ●いま部会ではこれから部会では

茅誠司部会

## 八〇年代

### 日本のエネルギー問題

■座談会■

茅誠司  
松根宗一  
深海博明  
富（司会）館孝夫

46

中山伊知郎部会

### 経済協力と社会的価値観

日印経済協力の場合

松本重治部会

### 青い眼に映った日本文化の「形と心」

■対談■

村上兵衛  
佐藤昌三

62

小松左京部会

### 大正時代文化研究

——第二のステップへ

小松左京

70

加藤芳郎部会

### 横綱大いに語る

■座談会■

三重ノ海  
加藤芳郎  
ロミ山田  
天地総子

72

●カラーグラビア 砂と共に

富山治夫

△ア・ポイント・オブ・ビュー ↓時間

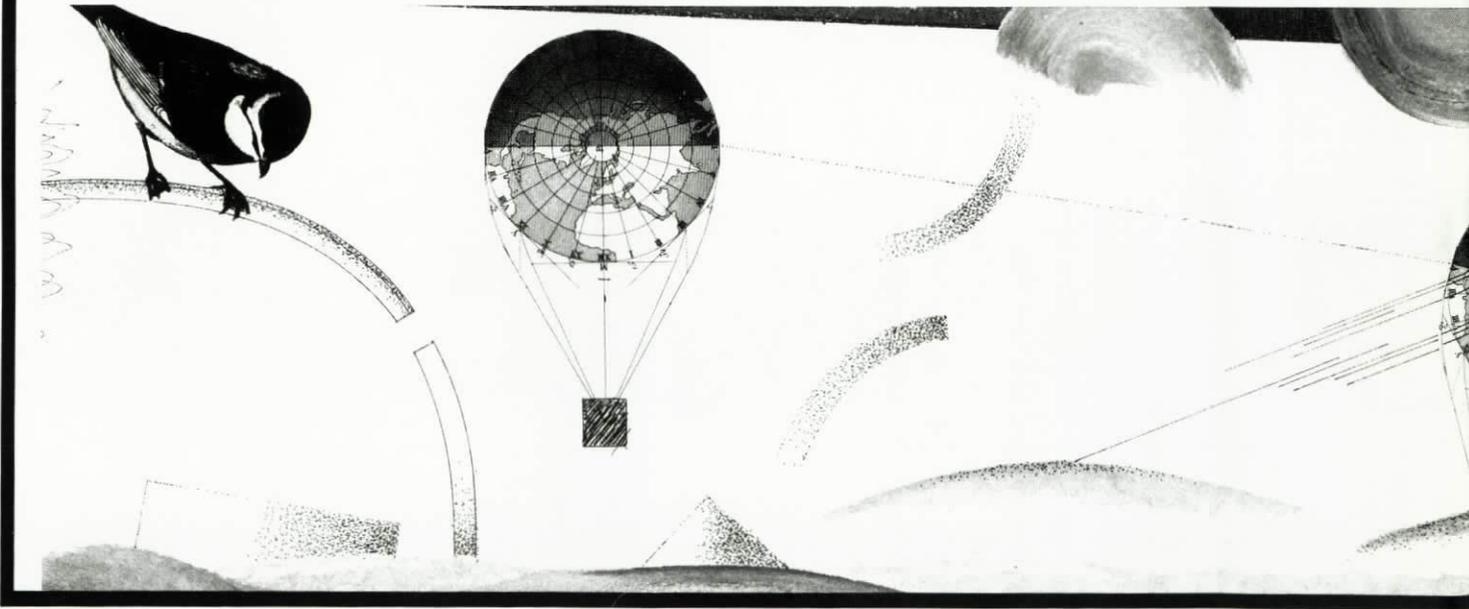
桑原甲子雄 / 須田二政 / 高梨豊 / 深瀬昌久

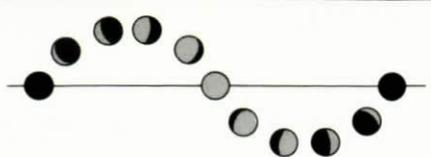
部会の歩み

21世紀フォーラム・部会メンバー

80

43





# 国際協力に積極的な戦略を

向坊隆むかいばう たかし

(東京大学総長・二十一世紀フォーラム発起人)



## 一、エネルギー問題

今後十年のわが国の直面する課題のうち、科学技術だけでなく、政治、経済をはじめ、社会全体で取り組まなければならない重要なものとして、まずエネルギー問題に深い関心を寄せざるを得ない。これについては、特に理由を述べる必要はないであろう。

## 二、生活水準向上のための努力目標

これまでの努力目標は、人によってさまざまであったが、全体として見た場合、それは、物質的な生活水準の向上、しかもそれを欧米先進国の水準に近づけることであったし、ある程度、目標に向っての前進が見られたといつてよいだろう。

しかし、その結果として、エネルギーや物資の多消費状態を来たして、今後不安を抱かざるを得なくなつたし、他方、環境問題や都市問題など、多くの社会問

題を生じている。

これからも、今までの方向で努力を続けようものかどうか、方向を変えようとするならば、何を目標にすべきか、これがこれからの大きな課題の一つと思われる。

また、工業をはじめ農業、サービス産業など、何れを見ても、今までの努力目標の大きな方向の一つは省力化であった。

これから、経済成長が鈍化し、他方に高学歴化や高齢化が進むと考えられる社会で、人手を省くことを相変らずの目標として行けるかどうか。

歴史を逆行させて、人手を使う方向に戻るとは極めて難しい。

人手を省くことを目標とせず、人を生かして使う方向、しかも、生き甲斐ある生活を送れるようにするにはどうすればよいのか。これも、発想の転換を要する難しい課題であろう。

## 三、国際協力の問題

これからわが国が生きて行くために、国際協力をうまく進めて行くことが大切なことはいままでもない。

しかし、世界にはイデオロギーの対立もあるし、利害関係が一致しない場合も多い。先進国と開発途上国との間には、依然として、経済力、ひいては生活水準の大きな格差がある。

このような状況を考えるとき、今までのわが国の国際協力のあり方を見直す必要がありそうに思われる。

国際協力といっても、競争、分担、協力、援助など、いろいろな場合があり、それは、分野や相手国によって違う。わが国の場合、貿易を除くと、とかく受身で対応して来たことが多いのではないかと。これからは、積極的な努力が必要で、そのための戦略を、総合的にも、また相手国によってきめ細かく立てることが必要になるのではないだろうか。

# 欧米偏重の世界地図を清算するとき

加藤 秀俊

(学習院大学法学部教授・加藤秀俊部会)



## 一、はつきりした世界地図をえがくこと

わたしたちのまわりには「国際化時代」とか「グローバルイズム」とかいったことがびしめきあっています。わたしたちの頭のなかに、ほんとうに正確な世界地図が描かれているかどうかは、大いに疑問です。つまり、「外国」ということばを使うとき、わたしたちは、結局のところ、まだ、ヨーロッパ、アメリカのことを指しているにすぎません。さまざまな国際会議も花盛りですが、アジア、アフリカ、中南米、太平洋諸地域からの参加者は、たいへんにすくないのが現状なのではないでしょうか。発展途上国をだいに、とみなす口ではいいです。しかし、じつさいに発展途上国を訪れ、それらの地域の実情を肌で感じ、それらの国ぐにの人たちと心をかよわせることをこころみる知識人があまりにもすくないとおもいます。欧米偏重の世界地図をわたしたちは清算し、正確な世界地図を心のなかにえ

がきたいとかんがえるのです。

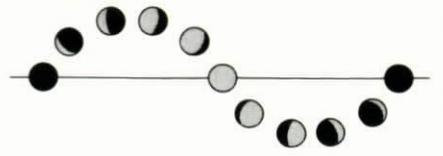
## 二、地域充足性の確立

いま東京にはこぼれてくる生鮮食品の平均輸送距離は四〇〇キロメートルだ、といわれています。食料品価格のなかに占める輸送費コストもさることながら、その輸送のためのエネルギー消費も莫大なものになっているにちがありません。もともと、日本という国は、ゆたかな水資源にめぐまれ、この国土のさまざまな地域は、それぞれに自己充足的であり、権力の構造も、地方分権的であったのです。それが、こんにちのような中央集権体制をとりはじめたのは、明治維新以後のことです。たかだかその歴史は一世紀あまりであるにすぎません。大平内閣は、地方の時代」をそのスローガンのひとつにかかげていますが、べつにあらたな時代がきたわけではなく、日本文化の本性に照らしてみれば、もともとのかたちにもどる、ということなのでしょう。東京、地

方」もふくめて、各地域の充足性を高めたいと思います。

## 三、文化的鎖国からの離脱

ベトナム難民が何万人も南シナ海を漂流しているのに、日本の国はそれらの人びとを受け入れることをしていません。歴史をふりかえってみると、日本民族は、もともと、おおらかに異民族をうけいれるという、うるわしい習慣をもっていました。このせまい島国のなかで、同一民族意識に酔いはじめたのは十六世紀の鎖国以来、いつのまにやら身についた、あたらしい習慣です。ましてや、これだけ相互依存性の高まった世界なので、わたしたちとしては、もっとひらけた気持ちで世界にむきあう必要があるかとおもいます。日本の「特殊事情」という、あの、ありきたりのことばに逃げこむことは、日本だけではなく、どこの国にもあるものなのです。



# 世界を走る私の夢

村上兵衛

(日本文化研究所専務理事・松本重治部会)



## 一、アメリカは「復活」するか

このところ、アメリカに行くたびに、日本人との格差が拡がりつつあるように思われてならない。むろん、アメリカ自身の潜在力は、今日といえども世界のナンバー・ワンであることは疑を容れない。が、その人間の勤労精神には、明らかにカゲリが見える。それは一介の旅行者にも、容易に看取されることである。

ただ、ホテルの食堂などで、いわゆる白人以上にマナーの正しい黒人の家族を多く見かけるようになったこと、あまりウダツのあがらない中年の友人が、アメリカは一見ダメになっているように見えるが、決して「魂」を失っていない、声なき大衆が今も大多数だ、と主張することなど、希望の灯が消えたとも思われな

い。  
多分、八〇年代はアメリカにとっても多難な年月ではあろうが、世界を相手にその「威信」をどこまで守り通せるか、やはり興味津々である。

## 二、ソ連に「革命」は起るか

七〇年代の後半、日本にやってきたソ連の若者たちが、心を許せる日本人に対して語るとは、ただひとつのようである。それは「ソ連には自由がない。権力しかない」ということである。ソ連に、いわゆる社会主義革命が起つてすでに五十余年を経て、いまだに「自由を許せない体制」とは何であろうかと、私には興味がある。

いわゆる共産圏において、革命（ソ連の用語でいえば反革命ということになるだろう）が起るとすればソ連しかない。チェコスロバキアにおける「プラハの春」が、一場の夢に過ぎなかったことは人知るところだし、その春を謳歌していた私の友人たちは、ほとんど故国を捨てて、世界に散りぢりばらばらになっている。

私のソ連に対する八〇年代の興味は、その国内において革命の「潜在力」がどれほど成長するであろうか——ということである。

## 三、アジアに「ミニ・ジャパン」は出現するか

一九七〇年代において、そういつては失礼だが、ミニ・ジャパンが三つ出現したように思われる。韓国、台湾、シンガポールである。前者は、日本の旧植民地として、臥薪嘗胆の歲月が永かったが、今日、「中級国家」としての道を、堅実に歩んでいる。また、シンガポールは、日本と同様、国土も資源もない国ながら、「人的資源」をみごとに動員して、前進しつつある。

アジアの八〇年代への私の興味は、この地域にさらにミニ・ジャパンが新たに出現するかどうか、という点にある。一九四〇年代の、日本の「大東亜戦争」には、さまざまな評価はあるが、もし今後十年のあいだに、中級国家として世界に飛び出してくる国があれば、面白いと思う。それはアラブ圏の国だろうか。それともインドネシア？ タイ？ マレーシアだろうか。

# 子供のための小さな願い

ロミ山田

(歌手・俳優・加藤芳郎部会)



新しい年を迎えて、毎年のように、今年こそは、日本にとって、我家にとってよい年であれと祈るのだが、現実はなかなか思うようにならず、歯がゆい思いをする。

一九八〇年は一つの区切りだし、これからの日本は、大きく良い方に変ってほしい。といっても、私はたんなる一つの職業を持った一主婦であるし、日本をどうのこうのとむずかしい意見など言えない。ただ私なりに、日本の一女性としての関心事、または希望をのべてみたいと思う。

## 一、都市の分散

大学を日本のすいている地に移してもいい。一つ希望をいうと、すぐ不可能になる理由が百も出てくるけれど、この際一方的に私の希望としてのべさせていただく。都心の広大な土地を売れば、安い所に建て、寮も作れるはずである。何故こうも東京に固まりすぎているのだ

ろう。

大学生は、みんな親もとを離れ、きびしい規律のもとで寮生活を経験すべきである。アメリカのスタンフォード大学など二キロ以内は酒屋さえない。

## 二、未成年と成年の区別をはっきりとさせる

日本ほどあいまいで、子供が天下をとっている国も珍しい。日本の法律に問題があるようで、未成年がお酒を飲んで夜中まで遊べるというのもおかしな話である。お酒を売っている所へは、未成年は入れないようにするべきである。未成年にお酒を飲ませた店は即時営業停止がいい。車の免許も年齢を引き上げること、少しは交通も楽になり、事故も少なくなり、子供の起した事故を親が負担することもなくなるだろう。

## 三、日本人がもっと国際性を持つこと

だんだん世界がせまくなり、毎年実に

多くの日本人が海外へ旅行をするのに、日本人の国際性は少しも育っていない。

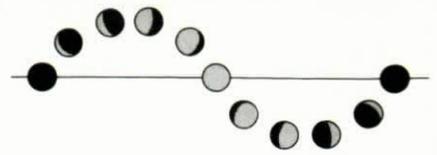
特に大人が駄目である。何のために外国とさわいで行っているのか。子供の時から井戸の中の蛙式に、受験勉強の世界しか知らないように育てられているため、これからの子供も心配である。

どうしたら、日本人に子供の時から、もっと国際性を身につけさせられるだろうか。えらい方々に考えていただきたい問題である。

以上三つをあげてみたが、むづかしい科学や医学、経済といったものからはなれて、これからの日本を背負っていく青少年のことに的がしぼられてしまった。

これも、一人の男の子を持つ母親として身につまされるからだろう。みんなごくあたり前の願いなのだが、なかなか実現しにくいものである。

八〇年代こそ、日本にとって、世界にとってよい年でありますように。



# 世界地図が塗り変えられる

おぜきみちのぶ  
尾関通允

(日本経済新聞記事審査委員・茅誠司部会)



① 世界の政治勢力地図ならびに経済勢力地図がどのように変化していくか。

② その変化の中で日本人(個々のではなく総体としての)の均衡感覚がどう推移していくか。

③ 技術革新がどんな展開を遂げるか。



① について。国際的な政治・経済の勢力地図の変化の態様は、第二次大戦の終了を境に大きく変わった。それまでは、直接の武力行使または武力を背景にした外交圧力が勢力地図の変化を引き起こした。戦後は、旧植民地の相次ぐ独立が第三世界勢力の台頭という形でまず政治勢力地図を変容させ、それが経済勢力地図の変化に発展している。OPEC(石油輸出国機構)の国際政治経済に及ぼす影響力の著しい増大は、そのことを象徴的に示すものである。専管水域二百海里時代もまたしかり。しかも、国際的な政治・経済勢力地図の変化は今後も激しく続き、それが日本民族の生存条件にも響いてくる。

② について。国際的な政治・経済勢力地図の激しい変化に対して、結果的には

日本人は巧妙に適応してきた。日本人に關しては、重大な出来事の突発に対してとかく過剰反応しがちであるとか極端から極端へと対応の振幅が大きいとか、そういった批判ないし評価が内外に少なくないように見受けられる。例えば第一次の石油ショックに対する反応をみるなら、それらの批判ないし評価も的外れとはいえない面がある。が、その後の経過は、少し時間をかけはしたが適応が概してうまくいったことを実証している。そして、そのことは、日本人独特の均衡感覚がそこに働いていることを示唆するものである。

問題は、しかし、より多く、今後にある。

国際社会を動かす政治・経済諸勢力の交错・対立あるいは離合・集散が複雑になるにつれて、日本人はよほど鋭敏かつ賢明に均衡感覚を働かせるのではないと、鳥とけもの間のこうもりになってしま

心配がある。



③ について、日本民族の生存条件に海外でも国内でも重大な制約が次から次へと発生している。物的資源が貧困で国土が狭い上に人口は多いので、制約の克服がむずかしいが、それがうまくいかなければ、日本民族はやがて減衰期を迎えることになる。それへの対抗に必要なものが②の均衡感覚とここでいう技術革新である。

例えば環境問題への対処、例えば資源・エネルギー問題への対処、例えばまた急速な高齢化社会への対処——など、そのいずれをとってみても、技術革新の展開なしに立ち向かうことは完全に不可能である。昭和四十年代半ばまでの日本経済の高成長は先進工業国からの革新技術の導入が大きな支えになった。八〇年代は自前の革新技術の展開が日本民族の将来を左右するほどの重みを持つに違いない。

# 国の成熟へのプロセス

よねやまとしな  
米山俊直

(京都市大学教養部助教授・加藤秀俊部会)



## 一、平和の維持

ソビエト軍のアフガン侵入で、モスクワ・オリンピックのボイコットという話も出ています。ただちに思い出すのは、蘆溝橋事件にはじまる日本軍の中国侵攻と、紀元二千六百年(昭和十五年)の東京オリンピック中止、その後の戦争への道のことです。ひよっとしたら、国というものが成熟するためには、まわりからコテンパンにやられる時機を経過しなければならぬのでしようか。アメリカが建国二百年を祝っていたころ、「アメリカ二百年、日本百年、ソビエト五十年、中国三十年、アフリカ諸国が十五年」という尺度を提出したことがあります。ソビエトはいま、日本の「いつかきた道」を経過中なのかもしれません。第一に平和の維持をあげんならんのは、やりきれないと思います。

※『放送朝日』一九七五年一月号、梅棹忠夫『地球時代の日本人』(中央公論社、一九七八)

## 二、遊びの開発

下河辺淳氏のいいかたを引用すれば、「紀元二千年(こちらは西暦です)の日本人口一億三千五百万人。明治以来ちやうど一億人増加。うち必要となる労働人口は三千五百万人。問題はのこりの一人をどう遊ばせるかである。」

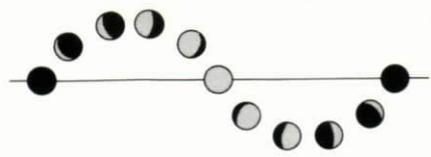
ほっとけば人は遊びを発見するのでしようか。安部公房の『砂の女』の主人公はそれを肯定しているようですが、他方「小人閑居シテ不善ヲナス」といいます。高齢化の進行することも必至となれば、この問題を真剣に考えてゆかねばなりません。

## 三、アフリカ

よくもわるくも、いまの世界でもっとも道德的、したがってしばしばタテマエ的に動いているのはアフリカ諸国ではないでしょうか。周恩来は、ひとときその

心をうまくとらえ、みごとに外交を展開してみせました。七〇年代にそれが後退し、キューバ兵の出没でアンゴラや万世一系だったエチオピアがソビエトの傘のうちに入りました。旧宗主国の力は復活しているかにもえますし、L L D C——つまり最低開発国の数はなおすくなくありません。八〇年代もアフリカは多難だろうと思います。でも、地球上にアフリカ大陸があり、アフリカ人がいることは、人類の希望であり、救いであると思います。

日本人の多くにとって、アフリカは遠く、なおタンケンの目標です。でも、このあいだ園田前外相が、キリマンジャロ開発計画の調印を終えてきたのも事実です。私もこのあいだ、北京の社会科学院で、「日本におけるアフリカ研究」という話をしてきました。アフリカとのリエゾンの役割は、八〇年代も続けてゆきたいと思っています。



# 八〇年代論議の土性骨

はやし ゆう じ ろう  
林雄一郎

(未来工学研究所副理事長・中山伊知郎部会)



- 哲学を持つこと
- 実践をすること
- 責任を果すこと

以上の三つは別々のことではなく、常に一体になっていなければいけません。例えば、八〇年代は文化の時代だという。八〇年代は国際化こそが要であるというところが、ということと語られるところを聞いていると、肝心の文化そのものについてのイメージがはっきりしていない。国際化ということといわれるところは、だから外国語に強くならなければならぬといったことが第一に取り上げられる。これでは本末転倒してはいはしまいか。要するに基本的な哲学が欠落しているのである。

◇  
こういう哲学不在のまま、徒らに小手先の技術的なことばかりが先行する。いわゆる専門家といわれる人たちの議論に

特にその傾向が強い。そして同時に、この種の論議に実践を伴わない口先だけの評論の何と多いことか。だから、この種の評論に共通しているのは無責任ということである。

昨秋、慶応大学が主催してダニエル・ベル教授等を招いてシンポジウムが開催された時、沢田教授がいわれたことが、「この種のシンポジウムでよくいわれるインターデイシプリナリということの意味を再検討してみる必要がある。これを単にさまざまな専門領域の学者だけを集めて議論することだけだったらあまり意味がないのではないか。その他にもうひとつ、さまざまな職種の人を集めて議論すべきではないか」という指摘は私には大いに共鳴してきた。

◇  
というのは、私自身、いまトヨタ財団という民間の助成財団でさまざまな助成活動、特に国際的な助成活動を実践してみ、それが政府ベースの仕事とどんな

に違うものか、あるいは大学や研究所で、専ら助成を受ける立場で仕事をする場合と同じようなことに対していかに違うものかということをやというほど体験してきた。

文化の振興とか、国際的な文化交流ということについてもいざ事にあたつてみると、冒頭に述べた、哲学も無く、無責任な、ゆき当りばつたりの実践ではそれはかえって有害ですらあるということをいろいろ見てきたものである。

◇  
八〇年代の論議は、むしろ論議として大いに結構であるが、私はそのどの場合でも前掲の三つがその土性骨となっていなければならないと思っている。それの伴わない、議論のための議論は時にはかえってためにならないこともあり得るのではないだろうか。

# そのとき田舎はもつと生き生きしたものに

## 宮本常一

(日本常民文化研究所理事・加藤秀俊部会)



① 昭和二十年には大阪府へ勤めて食料需給、とくに生鮮食料の需給に奔走して食料に深い関心をもつようになったのであるが、そのとき一つの国家が健全

に発達し、真に自立していくためには必要とする食料の七〇%以上は自給できるようにしてなければいけないと痛感した。爾来この考え方は変わっていない。国際分業論も結構であるが、それぞれの国が武器を持ち、武器は自衛のためであると言っているかぎり、食料もまた自衛に耐えるだけのものを持つべきではないかと思っ

ている。しかしいま食料の自給力はいちじるしく失われている。輸入によってまかなわれていくばかりでなく、生産にたずさわる人たちの年齢が高くなりすぎている。若い者の力が明日を作っていくのであって、高齢の者の中から、新しい明日は生れにくい。

② 文明というものは無数の無駄を人間に強要するものようである。たとえ

ば通勤に二時間三時間かけることは大きな無駄であり、その無駄をさせるために、電車・自動車を走らせ、そのためまた多くの人力を必要とする。あるいはまた大きなビルを設備するために照明から冷温換気あらゆる装置をしなければならぬ。そしてそうしたことのために人は引きず

りまわされ追いまわされているともいえるが、そうした世界からできるだけぬけ出して、自分で考え、自分で行動できる社会をとり戻していくようなことはできないものであろうか。せめてものを自由に考える場だけでも残しておきたいものである。壁に仕切られた中でなく、もつと広い世界である。そしてそういう世界がこれからもつと大切

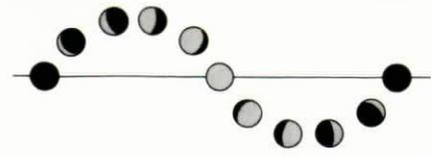
にされてよいのではないかと思う。八〇年代は人がもつと自由に物を考え、その実践できる時代であってほしいと思

う。③ 静かに、自由に物を考える場としての田舎の再構成はできないものか。い

ま国内の観光旅行者の数は延べにして三億人に達するといわれるが、その多くは通りすぎの客である。旅さきて人と交流する機会はきわめて少ない。

八〇年代は交流の時代であり、結合の時代であってほしいと思う。その場を作ることが必要である。それは単に国内だけの問題ではない。そして相手の必要とするものを与え合うことのできる世界を作りたい。そして田舎は老人たちだけの世界ではなく、若い者がそこで夢をのびし得るような世界でありたい。そのためにもつと多くの学問の場や実験の場が用意されなければならない。そのとき田舎はもつと生き生きしたものになるであ

ろう。そしてそのような働きかけは世界の田舎に向ってもなさるべきものであろうと思う。世界中の田舎へ働きかけるためには、まず日本の田舎がしっかりしていなければならぬのではないかと思う。



# 忘れられた「昭和五十五年」 ロベール・J・バロン

(上智大学経済学部教授・中山伊知郎部会)

なぜか、今年が「昭和五十五年」であるということを忘れてしまったらしい。

一億一千万人が、悉く右へならへの勢いで、「八〇年代の幕開け」ということが取って代った。

これは、尽きない「悩み」を共に嘆き合うという傾向にある日本人を満足させるいい機会である。国家的「甘えの構造」の実践である。また、出版社には、白紙をインクでぬりつぶすための恰好のトピックでもある。

21世紀フォーラムも、この誘惑には勝てなかったようであるので、私としても、会員の義務(義理)というべきであろうか?として、八〇年代に寄せる関心事を二つ、述べようと思う。

## 第一の関心事「新しきことなし」

別に目新しいことは起らないであろう。何か本当に新しいことがあるとすれば、自然界の災害であろうか。しかし、小松左京氏は、『日本沈没』の日時までは教えてくれなかった。西洋では、このような天変地異は、千年期の末に起ると信じられている。とすれば、あと二十年の辛

抱である。

その他の問題は、人間が作り出したものである。八〇年代に、人間の「利口さ」は、全く新しいものを考えだせるだろうか。否、であろう。せいぜい、人間の欲やねたみ、あるいは、正直さ、助け合い等にもからまった昔からある問題が、少し形を変えて出てくるだけであろう。この意味において、八〇年代にも、七〇年代に、あるいはもつとさかのぼって、百年前、二百年前に、行われたり、行われなかつたりしたことが、また、われわれの前に出てくるであろう。

## 第二の関心事「時間」

別に新しきことはいえ、時間「間」が、七〇年代よりは、切実な問題となり始めるのではないだろうか。人間の基本的二つの価値、時間と空間のうち、空間だけは、かなり客観的に見られている。しかし、時間に関しては、盲目的とはいかないまでも、寛容すべからず、近視眼的である。それに対するわれわれの一種のいいわけは、J・M・ケインズのことばである。「In the long run, we'll

be all dead」これは、実際的には、役に立たない。

長期的とはいえ、現在が基点であつてもう始まっているのである。あとではないのである。われわれは、あとで死ぬわけにはいかない。死の瞬間は、今なのである。

歴史の周期的繰り返しということに興味を持っている。データ不足ではあるが、西洋では、一六五〇年代から一七五〇年代にかけて、経済の上昇期があり、続いて一七五〇年から、一八五〇年代にかけて、下降期にあった。世界経済においては、一八五〇年代から一九五〇年代位までが、上昇期であった。この両者は類似していないだろうか(参照、Fernand Braudel)。とすれば、世界経済は周期的下降期に入っていることになる。答は時間のみが教えてくれるだろう。

同じような近視眼的見方は、日常よく見られる。どこにいかうか、何をしようかだけにこだわるレジヤは、短期的見方であり、愉快に、人生にプラスになる何かを与えてくれるようなレジヤを過るうと考えるのは、長期的見方である。

### 第三の関心事 「文化」

日本の文化への賛辞が高まるであろう。  
(外国にたびたび紹介されている生花、茶の湯、歌舞伎等のことではない。)主に経済界の相互作用を通して、日本は、西欧諸国に、異質ではあるが、現代の文化でもって、挑戦を投げかけてきた。急激な経済大国への成長という経験は、日本自身にとってもそうであろうが、西欧にとつて未曾有の驚きである。この挑戦は、

八〇年代になって、強まることはあつても、弱まることはないように思える。

しかし、一方では、この日本の経験を、世界が必要としているのである。マーケティングを求めつつ、急速に工業化している国々へ、道を開いてくれるからである。経済の相互依存がよく叫ばれているが、実態は幻想に近い。経済によって相互依存がもたらされるのではない。人々の間で、人々によつてもたらされるのである。私

この文化的挑戦をもつと身近な環境で考える好例がある。現代社会に期待されている女性の貢献に関し、どの程度、真剣に、建設的に考えられているだろうか。  
八〇年代への関心事を述べた今、急に昭和五十五年にまい戻ることにする。こちらの方がより現実であるから。次の・国民総動員問題提議 (national brain-storming)の時期を予想できる。多分昭和六十年代である。



## エネルギーを使いこなすのは人間だ

柳瀬睦男

(上智学院理事長・松本重治部会)

### (1)教育の問題

(2)エネルギー、特に、熱力学第二法則との関連において

### (3)学問全体の方法論の問題

(1)教育 先日、来年度予算案作成の件で、政府との予算復活折衝の過程をみておりましたが、国全体としてエネルギー問題に重点を置くのはよく分りますが、同時に、使う人間の育成をおろそかにしては、折角のエネルギーも何の役にも立たないと思います。ところで、

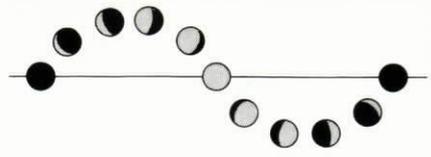
(2)のエネルギーの問題ですが、エネル

ギーの総量の保存をうたっている第一法則とともに、その有効性にかかわるエンタロピー増大の法則、つまり熱力学の第二法則と、その重要性があまりよく知られていないらしいのにびっくり致しました。

この点についての法則の理解と同時に、生物系、特に人間にあつては、非生物系とは逆に、エンタロピーを減少させ、低価値なエネルギー形態を、有効なエネルギー形態に変換する能力をもつことへの理解を徹底していただきたいと思いましたが。要路にある方々は、もう少し総合的

な確固たる知識体系と価値体系の上に、ものごとを判断し決定していただきたいものです。これは何も日本にかぎらず、地球的なスケールにおいて然りであろうと考えます。

そこで、  
(3)学問全体の方法論の問題になるのですが、八〇年代こそ、以上の様な切実な情勢からも、この問題に真剣に、しかも深くとり組むことが肝要であろうと思えます。



# 時計の針は逆戻りしない

なかむら みのる  
中村貢

(朝日イブニングニュース社社長・茅誠司部会)

不透明とか不確実とかいわれながら、実際の八〇年代は、イランとアフガンで波瀾万丈のスタートを切った。

日本の新聞にも安保理、拒否権、緊急総会などの大活字が久しぶりに躍った。トルーマン・ドクトリンに匹敵する新「封じ込め」政策、カーター流の瀬戸際政策、CIAの再強化など、米国からの大仰な報道も流れてきた。日本の中高年層のなかには、まるで時計の針が二、三十年も逆戻りしたような気持ちで、それらの活字をながめたものもいたことだろう。

しかし冷戦時代がそのままの姿でよみがえるわけではない。米国からの昔の歌の大合唱を聞きながら、次のようなことを考えた。

## 一、ソ連ははたして強いのだろうか

軍事面でソ連がどうやら対米優位に立ったらしいことは、たぶん本当だろう。だが政治、とくに国際政治面では芳ばしくないし、経済面となればさらにひよわい感じがぬぐえない。

アフガン侵攻にも「弱さ」がみえた。南進「石油」といったマスター・プランはあったかもしれないが、直接の動機はむ

しろアフガンの反ソゲリラ、イランのイスラム革命からの脅威だったろう。こんどのようなソ連の「電撃的な力の行使」に西側は幻惑されがちだが、実際には非軍事行動による目的達成にソ連が失敗した証拠ではないのか。

それに「ブレジネフ後の問題」もある。クレムリン内部情勢はすでにそこへ進み、タカ派が支配したとの説もあった。しかし従来のパターンにみるかぎり、ソ連の独裁的権力者の退陣後にはきまって集団指導型の数年が続く、やがてそのうちの一人に権力が集中してきた。ブレジネフ後「もその先例にたがわず、しばらくは集団型の、やや内向きで、外での冒険を避ける姿勢を続けるのではないか。アフガンの「ベトナム化」などは極力回避されることだろう。

## 二、米国の「アゲンムード」は本物か

これまで三度——第二次大戦後、朝鮮戦後、ベトナム戦後——米国の「ネバーアゲン」ムードが数年のうちに「アゲン」に変わってゆくのをわれわれは見た。こんどのはしかし、意外に長い歳月を要した。ベトナムとウォーターゲートからの

「反省と反動」が、前回とは比較にならないほど根深かったからだろう。

イランはしかし、ようやく米国に「真珠湾いらいの団結」をもたらした。アフガンは西側の再団結を求めた。けれども米国の古い歌の大合唱は世界大にはひろまりにくい。八〇年代にはこの種の情況がしばしば見られるのではなからうか。

## 三、国際秩序の再構築は可能か

戦後世界の国際秩序は、第二次大戦中の「戦勝予定国」が構築したものが、国連はやがて半身不随となり、国際通貨制度もついに変質した。それらを「平時」に、しかも憲章改正をとまなう再構築をするのは至難のわざ。結局はいままでのように現行制度の部分的修正か、その他の方便としての意志決定システムを併用することが、八〇年代に望みうる最善のことではないのか。

しかし併用方式が先進国首脳会議だけというのではこまる。中進工業国をまきこみ、第三世界を組みこんでの大小さまざまな、多数で多様な、重層型意志決定システムを開発し、それらを十分に併用してゆかねばならぬと思う。

# 多様な価値観が時代を共にする

橋口 収

(公正取引委員会委員長・茅誠司部会)



第一に、近代的主権国家の命運いかんということである。

近代的主権国家のほんとうの苦悩がはじまるのが、一九八〇年代だろう。

代議制民主主義、市場経済、言論・出版の自由等の仕組みをもつ近代国家は、

いずれも先進国家群に属し、その数は、全世界に多くないが、みなおなじような苦悩に直面しているのだ。いいかえれば、近代的主権国家は、その機能を十分に発揮しえなくなった、そのもどかしさ(重い国家)に、自己嫌悪におちいつているかにみえる。

低成長、慢性的インフレ、財政赤字、福祉の重圧、政治の統治能力の低下など、いずれも先進国体制に共通の病弊といわれながら、主権国家は、いずれも、その解決の処方箋を用意しえないでいる。八〇年代には、主権国家のもつべき本来の機能の回復と、かつての有用性への復帰とができるであろうか。

このことは、裏をかえせば、地方の時代が、どのくらい具体性をもってすすむかということと関連がある。国家が、有

能であることを立証すれば、それだけ地方の時代は遠のくのだ。

一九八〇年代は、近代的な主権国家にとって真の試練の時代となる。

第二に、価値観の「共時性」がどの程度定着するかということである。

一九七〇年代からすでに価値観の多様化・多元化はすすんでいるといわれるが、多数の価値観のあいだには、あきらかに上下の関係、序列の秩序があったと思う。そして、そのなかで、最高の地位を占めるものは、あきらかに「福祉」であった。しかも、その優位はかわっていない。

しかし、時代は、たしかにかわりつつある。福祉(それを可能にする経済成長)のほか、教育も、文化も、外交も、治安も、防衛も、対等の価値観を主張しているし、これらは、価値次元で同等の市民権をもつようになるのではないか。

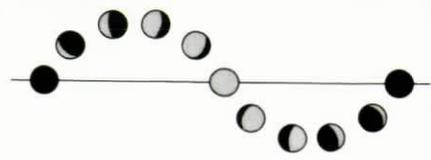
いいかえれば、ほんとうの価値観の多様化がすすみ、多くの価値観が、時代を共にする、ようになるかどうかということである。

国際政治をみてもそうである。大国も小国も、先進国も発展途上国も、共産圏も自由圏も第三世界も、あらゆる国々が、異質のもの(「価値観」)をもちながら、それらを相互に認めあつたうえで、時代を共にすることができようかということである。

第三に、「代替エネルギー」の供給がどの程度すすむかということである。

原子力利用をふくめた代替エネルギー資源が、どの程度活用できるようになるかは、われわれの国民生活の水準を維持するという物質的な観点からだけではなく、時代精神のうえにも大きな変化をもたらさざるを得ない。大量生産、大量供給、高速移動や巨大処理をベースとする経済や都市生活、そしてそれらを支持する思考方法や学問にも変化をもたらすかもしれないからである。

そして、先進諸国の国民の考えかたに、より健全で、より堅実なものがかうまれてくるかどうか、代替エネルギーの供給のありかたに密接にかかわってくる。



# 内面の充実した人生から

## 川喜田二郎

(筑波大学教授・松本重治部会)



### 一、創造性の開発と人生の充実

誰もが充実した全人的な人生を送りたいと願っている。これには、生活環境の改善も必須であるが、それは半分の必要事。他の半分は、ひとりひとりの内面に、充実した人生を創りだす力が培われねばならない。物の豊かさだけで充実した人生のやってこないことは、欧米と日本の過去半世紀で、あまりにもハッキリしたと思う。

内面の力で第一の必要事は、創造性の開発である。創造性が必要なのは、生きてゆくためのよい産物・果実を生む必要性があるからでもある。しかしこれは半分の理由である。他の半分の理由は、人間は創造性を充たされてこそ心が豊かになり、隣人とも環境とも血の通った連帯を築き得るからである。これが充たされない人間疎外がおこり、惨憺たる社会の解体を招くだろう。

しかし現実には、教育は創造性の開発どころか、その逆の道を歩んでいる。

### 二、参画と真の民主主義

創造性の培養が基盤となって、参画的な集団と組織の運営が、真剣に問われてゆくだろう。これは厳しい道である。まづ現実には、管理社会的発想と策謀・専制の悪徳が、深く滲み透っているばかりか、ある半面ではますます強化されつつあるからである。

この現実に向かうに、イデオロギー闘争だけでは全く有害無益であることは、これも最近半世紀が赤裸々に示したと思う。本道はイデオロギー闘争ではなくて、情報の正しい処理による集団・組織の参画的運営である。このために、情報処理の方法技術を、抜本的に改善・開発・訓練・普及せねばなるまい。つまり、権力ではなく情報によるマネジメントを開拓することである。

これによる創造的な集団や組織を創りあげないと、環境問題や資源問題まで行き詰まるだろう。もちろん、創造性開発の教育も圧殺されてしまう。少数の創造

者集団と大多数の非創造的群集に分化すれば、文明は自滅する。

### 三、科学・技術思想の大転換

分析的方向ばかりで創造的な総合のてきない、今までの科学・技術の発展方向は、既に至るところで破綻を示しつつある。具体的には、複雑な現実を総体として深く洞察できないので、判断力を失い、ひいては健全な対策を講ずる力を失っている。これが民衆の不信を買いつつある。この分析オンリーの傾向と結びついていのが、定量化のみを厳密な科学・技術と盲信する傾向、学問の細分化、専門家の狭量な自己主張、機械モデルの世界観・社会観、管理社会的発想、パワー・エリート思想などであろう。

八〇年代はこれらの破綻的傾向を乗り越える重なる否定ではない、有機的でない論的世界観・思想・方法・技術を模索してゆくだろう。それまでのつなぎの空白期に、反科学的潮流も抬頭しよう。

# 日本が生きていく構想は

稲葉秀三

(産業研究所理事長・茅誠司部会)



エネルギー問題  
国際政局の推移  
日本の社会的コンセンサスの形成

いろいろ申し上げたいこともあるが、私の三つの関心をだせというので簡単に私見を摘記してみるとこの三つになる。

私のえらんだ三つは実は相互に関連している。自分の仕事の面からは石油・エネルギーに日本はどう対処していくかを主題にしたところだが、石油というものは経済的商品であると同時に政治的商品だということを忘れてはならないとすると、この二つを結びつけないでは解答はできないと思うからである。

私は過去において日本のエネルギー政策の立案推進に協力してきたものだが、昭和三十年代の始めに、「エネルギーの中核を石炭、水力から石油にきりかえなかつたならば」今日の日本の経済、国民生活、社会活動はなりたっていないと考えている。しかし石油やエネルギーをと

りまく諸条件は二十年前、十年前と根本的といってもよいほど今では変っている。

だから、この条件の変化にいかにかうまく対応していくかということを経府と国民は真剣に考え対処していかなければ、日本の将来はありえない。この石油もエネルギーも、そのことだけの対処解決ではことがうまく解決できない。

◇  
世界がどうなるか。共産主義社会と自由主義社会との対立がどう進展していくか。日本はこれによって大きな影響をうけざるをえない。また最近のイランやアフガニスタンの政局の背景は予想よりももっと複雑であり、深刻なのである。これらと関連して日本はどう生きていくかということ構想し、実行していかなければならない。しかし関心度は外国と比べて低調のんびりしているように思う。

◇  
三つ目の日本のなかのコンセンサス形成がどうなっていくかについて、私はつ

ぎのようになっている。「日本は戦争の廃墟のなかから割合早く、うまく立上ることができた国である。これはひとえに高度成長のたまものだが、八〇年代という世代は、将来のやり方だけでは発展がうまくつづかず、転換、試練を余儀なくされる世代ではなからうか」と。

石油・エネルギー問題以外からも、つまり国内的ないろいろな条件の変化からも、こういう試練と転換とはさげがたいように思われる。

つまり世界の動きと国内の変化に、どのように日本として転換していくか即応していくかがもとめられている。そのための新しい社会的コンセンサスをつくりたいかねばならない。それがつくりえられるのか、えられないのかに私は大きな関心をもっている。私はつくりえられるようにがんばりたいと思っている。同時にこれは二十一世紀に日本が対処していくためにも必要なことなのである。



# 「自然」とは「環境」とは

## 木元教子

(放送キャスター・茅誠司部会)

八〇年代とは、いかなる意味においても、七〇年代、それ以前の六〇年代の継続です。この時、問題をとらえる視点とは、過去を振り返る目でもあるわけです。八〇年代における関心事を三つとのことですが、私は特に、環境問題を中心にして、こうした振り返る目について雑感を述べさせていただきます。

◇ 広義の環境問題の中には、二つの側面があると思います。一つは自然保護の問題、もう一つは生活環境保全の問題です。まず前者について。一口に「自然」と言い、「自然を守れ」と言います。しかし、守るべき「自然」とは、一体何なのでしょう。

もしも、地球上の諸事物のありのままの姿を「自然」と呼ぶならば、一生物種である私達人間の繁栄と、そのもたらしたものの（北米大陸におけるリョコウバトの乱獲による絶滅とか、北極海のサーモンの脳髓の中からの鉛の検出など……）まで、「自然」という概念の中に含めなければなりません。

しかし、私達の「自然」ということばの使用は、かなり恣意的です。つまり、

私達が一定の価値観をもって口にする「自然」とは、「私達にとって好ましい自然」という具合に書きかえられなければならぬものです。

◇ ては、「好ましい自然」とは何か。それは「私達」の立場によって異なってきます。例えば、イリオモテヤマネコを保護するために、西表島の開発を見あわせよと主張した。しかしそれは、西表島住民の生活向上への欲求と真正面から対立するものでした。

「自然」というものの想定が、もはや私達の政策オプションとなつていくこと、言いかえれば、「作られた遊園地」である現在、その設計図の描き方には、常に利害の調整が考えられなければならないのです。その時私達は、「旅行者」の目でものを眺めることを、厳に戒めるのは申すまでもないことです。

同じように、保全さるべき環境とは、私達にとって「生きやすい環境」を意味するのでしよう。しかし、そうした環境は決して単なる素朴な環境のことではありません。

例えば、ブラジルや中国などを旅行し

て、これは素朴でいい、などと言う。とんでもない話です。

また、原子力で発電した電気て本を読む人が、原子力はイカンと言う。しかし、何も持たない人々には、原子力は必至でもあるのです。もっと振り返れば、原始人には環境問題はなかった。しかし彼等は、より深刻な「餓死問題」をかかえていたというわけです。

もしも、石油を始めとする豊富なエネルギーの中にどっぷりつかつた私達が、現在の生活水準を維持しつつ、理想的な環境を実現しようとしたら、それはさらに多量のエネルギー消費に結びつくのは、自明の理です。ただ単に、補助金を出せウンヌンの問題ではないのです。

つまり、ひ弱な私達にはもはや決して止められないものを、私達は時として、止めたいと叫んでしまう。それはただ、「原子力ハ安全デス」「コノ農薬ハ安全デス」という、一種のなだめすかしの存在すら可能にしてしまうことになるのでしよう。

◇ 過去の環境問題へのアプローチは、いわば幸福な時代へのアプローチでした。

しかし、これから先の事情は厳しい。私達は私達の社会形態を含めての環境をどうとらえるのか。つまり、どういう価値

観を持つのか。そこには、可能なこと、不可能なことの選択が迫られるはずで、その時、私達は「自然」とか「環境」と

いったことばにどのような意味をこめるのか、論議はまずそこから始めなければ、と思うのですが…。



## 基本が見えない不安の時代

生田豊朗

(日本エネルギー経済研究所所長・茅誠司部会)

私は「エネルギー屋」ですから、まず

八〇年代のエネルギー問題から申しあげておくべきでしょう。八〇年代のエネルギー問題を考えると、どう計算してみてもエネルギー供給量が足りなくなってしまうのです。石油の生産はあまり増えそうにもないし、代替エネルギーの増加も充分ではなさそうです。だから、経済の長期波動のうちエネルギー供給の制約による下降局面に差しかかるのだ、と割り切ってしまうばそれまでですが、一方では、案外そうでもないかもしれない、というような気もするのです。

このようなわけで、私の第一の関心は、エネルギー供給制約に対する経済社会の弾力的な対応が果たして可能であるのか、可能であるとすればどのような形の対応になるのか、また不可能だとすれば経済社会がどのように歪んで行くのか、ということになります。

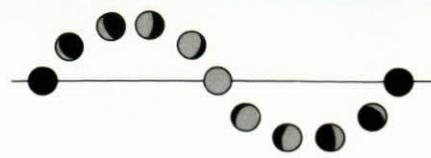
第二の関心は民主主義の運命です。七〇年代を通じて次第に進行してきたもの

の一つは、民主主義の弱さだと思います。それは、共産主義、社会主義、宗教民族主義などという名刺を冠した一種の全体主義に対して、抵抗力が弱く、無力とさえみえるようになってきました。第二次大戦において、別のタイプの全体主義と戦って勝利を収めた強い民主主義の面影は、もはやどこかへ消え去ってしまったようです。

私は民主主義と自由主義を愛するのですが、十年後、八〇年代が終ったときに、そこに民主主義がまだ残存しているのかどうか、いささか危惧の念を抱いています。また、無事に民主主義が生き残っているとすれば、それが現代の民主主義からどのように変型しているのかという点にも興味があります。

第三は文化のタイプについての関心です。七〇年代には、文化を構成する素子のうち、知的な素子が弱体化して、本能的な素子が強大になってきたように思います。これが果たして近代文化への一つのアンチテーゼにしか過ぎないのか、それとも文化そのものの質的な転換なのか。今のところ私には判断できません。しかし、八〇年代の十年間の経過をみれば、そのいずれかであるかは明らかになってくるでしょう。

以上の三つの関心は、つまり私にとって生きる喜びのある時代がひらけてくるのか、それとも生き難い時代をじっと我慢して行かなければならないようになるのか、という点に集中してくるようです。そして、この基本的な点がさっぱり分からないほど、八〇年代は予測の難しい、不安な時代だといってよさそうです。



# 子供たちは何を考えているんだろ

## 富田純孝

(NHKディレクター・加藤芳郎部会)



八〇年代に入って私の関心と言えはやはりどうしても石油の問題が第一です。

最近の中東産油国の厳しい状況を見ますと、わが国の前途は誠に暗たんたるものと言わなければなりません。

言うまでもなく石油が無くては日も夜も明けぬわが国です。それが産油国に振り回され(産油国にして見れば今までのルールが悪くて値段が安過ぎたと言っているわけで、基本的な点に見解の相違があるわけですからそれを理解しないといけません)度重なる値上げはもちろんのこと、必要量を手に入れることがますます難しくなると予想されます。例えば私達の食卓に上るトマト一個に

牛乳びん三本の石油を使うとか聞きますが、季節を無視したハウス栽培の野菜にしろ果物にしろ、まるで油づけの農業です。車のガソリンも一リットル一五〇円にもなり、いずれ一六〇円、一七〇円となる日も近いでしょう。お金さえ出せば

いつでもなんでも手に入ると言う恐らく世界一ぜいたくに慣らされ、日本人の九〇パーセントが自分は中流だと思っている……こんな生活をこの先続けて行くことは困難だと思えます。

間もなく四月には種々の公共料金が上がり、そして物価が上がります。インフレが進み……と言った悪循環から、やがては、物はあってもごく一部の人達

にしか買えない厳しい時代になるのではないのでしょうか。

更に、先般アフガニスタンに始まった新たな脅威は米ソの勢力の均衡を大きく揺さぶり、今後世界がどう変わって行くか全く予測のつかぬ不安があります。これから日本はどう生き延びて行くか、実に難しい八〇年代と考えます。

◇

次に私の大きな関心は教育の問題です。昨年たびたび耳にした事件に小・中学生の自殺がありました。こうした、わけも無くなるとも理解に苦しむ動機から死を選ぶと言ふことは誠に異状と言ふ外ありません。日頃私達の回りには無秩序に





声高に様々な誘惑や無遠慮な行いや暴力などが押し寄せ渦巻いていますが、親達は家庭と言う小さな「かさ」で子供達を十分にガードすることなど出来ず、ただただ戸惑うばかり、多感な子供達の苦しみや悩みにあまりにも無力です。

教育現場の先生方もいろいろ努力はさされていると思いますが、子を持つ親の身勝手な注文かも知れませんが、本当に子供に愛情を持ってやっておられるかどうか不安がつのり、誠に歯がゆいかぎりです。

もうひとつ大きな問題となっている子供の「落ちこぼれ」も、大人達の責任が大きいと思います。

ところで最近強く感じたのですが、今の子供達の中に動物を可愛いがることを知らない子供が多いと言うことです。私達が子供の頃は「野良犬」でも「捨て猫」でも可哀想にと思って接したのですが、今の子はわけもなく虐めます。注意をしても、なぜそれがいけないのか分からぬ風で、誠に恐ろしい限りです。

そう言えば、以前教室の二階の窓から

子犬を投げ捨てた小学校の先生の例もありましたが、つまるところ自分以外はどうでも良いと言った考えの表れでしょうか。考えて見ますと、今の子供達は幼稚園に入る時から競争競争の連続です。人を押しのけても一歩でも二歩でも前へ出るように教えられているわけですから、人のことを思いやったり動物達に暖かい目を向けたりする余裕などないのかも知れません。

今は一般に教育の意識が高まって、だれもが高校、大学に進学するのは誠に結構ですが、真の教育の目的を忘れて人を出し抜くことにのみきゅうきゅうとし、しかもペーパーテストだけでランク付けされたり将来の可能性すら棒づけされてしまう今のやり方は好ましいとは思えません。

将来、今の子供達が大人になった時日本はどんな国になるのでしょうか。これからは人種や宗教や生き方考え方の異なる世界の人々と手を携えて生きて行かなければならない時代と思いますが、改めるべきは早急に改めて行かないと大変

なことになると痛感しています。

◇

もうひとつ大きな関心と言えば、それは私の商売が八〇年代にテレビはどうなるかと言うことです。技術革新が進んで文字放送の実用化や放送衛星の利用も近いと思いますが、私達番組制作者にとってはどんな番組を作ったら良いかと考えます。

昨年南極大陸からのナマ中継が大きな話題となりましたが、それからわずか一年余、今やお年寄りが観光旅行に出かける世の中です。極めてテンポの早い八〇年代のテレビは、どんなものを放送したら良いでしょうか、人々の期待に答えられる番組はどんなものか悩みます。

先日週刊誌のアンケート記事に八〇年代に無くなるもののひとつに紅白歌合戦があげられていましたが、テレビも歌も送り手も受け手も果してどう変わって行くか、先読みは誠に難しいことですが大変興味深い課題です。



# 政権交代と労組の責任

滝田実

(アジア社会問題研究所理事長・中山伊知郎部会)

内外情勢が刻々と変化するなかで私が関心を寄せる足もとの問題は次の三点である。

第一点は、八〇年代に自民党の単独政権は崩壊するだろうということである。

どのような経路で崩壊するか、それは「昨日の友は今日の敵」といった不可解な政界であるだけに予測はできないが、私は自民党の単独政権は自壊作用を起して倒れるというより、むしろ積極的意味で政権の座から退かせるべきであるという気持ちがつよい。

この政権交代論について、よくいわれることは政権の受け皿がないという説がある。野党第一党の社会党が現状のようでは政権担当能力がないし、野党連合は暗中模索の域を出ず、自民政権は金権体質だが現在の野党に政権が移った場合、政局不安が経済社会の混乱を招来する、それならば自民政権の方が国民にとつてまだましだという政局安定説がある。つまり政権交代によってとり返しのつかない事態を招くなどというのである。しかしそうした危惧はなくはないが、政権交代による政界の浄化と行政の刷新は必要であり、これ以上自民政権を温

存することはよくないのではないか。もちろん、エネルギー問題、高齢化社会の到来、インフレ、総合安全保障といった重要施策は一日も遅滞は許されないが、政党の再編成や政策課題については道自ら通ずるではないだろうか。

第二点は、第一点との関連で、健全な労働組合の社会的責任はいよいよ重要さを増すだろうという点である。

いま世界は石油問題とエネルギー対策で一触即発の状況下にある。東西問題も軍事行動を伴って予断は許さない。いつ、どこで、何が起るか分からない。が、そうした時代に、労働組合の政治、経済、社会に及ぼす影響と役割は、近代工業国家にとって余りにも大きく、インフレ、失業、経済成長などの経済と生活にとって最重要課題をかかえているとき、労働組合のもつ「力」がプラスに働くか、マイナスに働くか、国内の安定度を左右する。

今後、外的要因によるいわゆる外圧が大きいにしても、国内に社会的不公正がなければ国民生活は多少窮屈でも国家としては安定度は保てる。その調節弁的な役割をもつのが労働運動である。反面、

労働運動が自己主張だけに走れば、政治も経済も大混乱する。このことは昨今のアメリカ、イギリス、フランス、イタリアなどと日本を比較すれば容易に理解できることである。

健全な労働組合の存立は革新政党の体質をつくる中核体であるだけに、新しい政権交代時代に新しい役割を演ずる。新政権を支える柱になるか、それとも政権を動揺させる地獄になるか、その鍵は労組が握っているといっても過言ではないだろう。

第三点は、国際協調の問題である。

日本の対外協力とか援助とかはいぜんとしてかんばんしくない。一部では目に見えない成果も関係者の努力であげてはいるものの一連の動きを見ていると、何かの外圧が加わるか、問題が起きるか、さもなければ政治家の思いつきかの場合が多い。そこには自主性にもとづく判断ではなく、他動的であり、一時的泥縄発想によるものが多い。いわば「後手」の対策に終始し、心のこもったものが少ない。たとえば貿易摩擦、国民感情の悪化、発展途上国の援助や難民対策など、すべてが後手に回った対策ばかりである。

こうした対外政策について、もっと政策立案の調査研究機関を設けるべきではないかと思う。

それには現在の各種機関の総見直しを、整理をし、政策に結びつく生きた調査研究の必要性を痛感する。

とくに社会問題を重視することが大切であると思う。



## 夢を何に托せるか 坪内ミキ子

(俳優・加藤芳郎部会)

### 一、自分の事

これを第一に挙げますことをお許し下さい。この八〇年代への突入は私の四十台への突入なものですから、果して不惑の年を迎える準備が出来ているのだろうかと思いがかりなのです。

まさしく「中年」のこの十年間、女にとって最も心揺れ動く時ではないかと思えます。若さへの未練、老いへの不安。特に私のように何の進歩もなく何の蓄積もない者にとって、精神は未熟のまま、肉体だけは枯れていく苛立ちをどうしたらいいのかと悩みます。

家庭を持ち、子供を育てようやく人間としての眼が開き、これからが人生への第一歩と思っているのですから、分別臭い中年のレッテルを貼られたくないのです。夢も華もある中年でいたい、どうしてもそれを世間様にアピールする事が出来るか……とりあえず、「年」で「年」を決め

ないで！と叫ぶことにします。

### 二、子供達の将来

子供を生んで育ててみて、わが子供だけが子供ではないと強く感じていますから、自分の子供だけがこの先、生きのびてくればとは決して思いません。

次代を托す小さな社会人の進むこの十年、果して平和であるのでしょうか。戦争を知らない世代がリーダーシップをとるようになる時、戦争への恐れも否定もなくなってしまうのでしょうか。狂っているとしたか思えない今の受験戦争をくぐりぬけて来る子供達が、他人を思いやり振り返る余裕があるのでしょいか。突き落し追い抜くテクニクしか会得して来ない小さな魂が大きな包容力を持つようになるのでしょうか。何でも他人のせいにし、ひとに頼って生活する習性が大人になって立派に脱皮出来るのでしょうか。今十歳の子が成人に達するこの十年間

の人間づくりこそ一番大切な気がします。

### 三、夢・ロマン

働けど儉約すれど、追いつかない諸物価の高騰。石油はこの先どうなるんだろう。兎小屋から庭つきのマイホームへ昇格出来るだろうかー現実的な問題ばかりで頭がいっぱいになってしまふ昨今、私達の夢はどこかへ消えてしまったのではないのでしょうか。生活の足しにならない夢は持つても仕方がないのでしょいか。ロマンって一体何なのだろう、私も忘れてしまいました。八〇年代において甦えらせてもらえるのでしょうか。

UFOののって宇宙人がやって来て、地球人と友好条約を結び、お友達になりたいわアと彼等の星へ招待してくれないかしら。そこでは光熱費、燃料、食料全部タダ、広い三階建の白亜の殿堂よりどりみどり……嗚呼、また現実的、何に夢をもてばいいのか教えて下さい。



# 日本海地域の復権を促すもの 加治章

(NHK新潟放送局・加藤芳郎部会)

八〇年代のスタートを新潟で迎え、地元新潟の問題から二つ、自分の仕事から一つを選んでみた。

## 一、日本も産油国？

「越後の七不思議」の中に、燃土<sup>もくろつち</sup>、燃水<sup>もくみづ</sup>、火井<sup>くわせい</sup>(天然ガス)の三つの地下エネルギー資源が入っている。新潟県は、現在でも石油、天然ガスの生産は全国のおよそ八割強を占めており、日本一のエネルギー供給県である。

新潟沖の日本海での石油、天然ガスの開発を始めとして、県内各地で開発が進められており、毎年、小規模ながら、石油や天然ガスが出たというニュースが伝えられている。事実、昨年の暮にも、かなり大きな規模の新しい天然ガスが見つかっている。また、ある村では、村全体が天然ガスを自給しているところさえある。

一方、地下エネルギーの開発とは別に、二つの原発の建設計画も、東京電力と東北電力で進められている。安全性の問題など、まだまだ難行するだろうが、もし、

出来れば大エネルギーとなる。いずれにしても、八〇年代の新潟県は、エネルギー供給県としての役割をどう果すか大いに注目されるのである。

## 二、つながる日本海と太平洋

わが国三番目の新幹線「上越新幹線」の工事が昭和五十六年秋の開通を目ざして進められている。過去、日本の交通網は、鉄道にしる道路にしる、「縦」が優先で、「横」は二の次であった(日本の地形にもよるが)。ところが、わが国三番目の新幹線が、「横」になったのである(政治的な理由もあるが)。この日本横断線は、首都東京と新潟をわずか二時間たらずで結ぼうというのである。

これまで裏日本などとよばれ、ともすれば暗いイメージを持たれた日本海側の地域と表日本とよばれる太平洋側を短時間でつなぐこの「横の線」の果たす役割は何なのか。そしてその地域とそこに住む人を変えることが出来るのか。また、変わると思えば、どう変わるのか。変わる、いいのか悪いのかなど、日本海

側の発展とのつながりを、同じ様に工事が行われている「関越自動車道」と併せて注目して行きたい。

## 三、放休日の誕生

今日、放送は四六時中、休むことなく流され、受け手に様々な影響をおよぼしている。最近、この影響を拒否しようという空気も出てはいるが、まだ多くの人は当然のように受けいれている。しかし、この巨大な怪物を見直す時が来ている。

その方法はいろいろあると思うが、一段として一年に一日か二日、NHKも民放も全ての放送を休む日「放休日」を作ったらどうか。新聞という「休刊日」である。つまり、一日中放送が止まることによって、日頃、生活の中に、どのくらい放送が入り込んでいるかがわかると思う。そして、それは、放送の送り手と受け手が共に放送を見直すよいチャンスになるし、今後の放送のあり方、マスコミの真の発展、進歩につながって行くことになろう。「放休日」の誕生を楽しみにしているのである。

# 「山雨来らんと欲して風楼に満つ」

おかむらかず  
岡村和夫

(NHK解説委員・茅誠司部会)



- (一) 平和は維持されるか
- (二) 原発推進の合意は得られるか
- (三) 連合の時代に入るのか

## 一、平和は維持されるか

第二次大戦後の武力紛争は、大小およそ六〇回ということだが、幸い米ソの直接衝突は起きなかった。

しかし、昨年来のアフガニスタンに対するソビエトの軍事介入で、八〇年代はにわかに険しい雲行きになってきた。

ソビエトは、五六年のハンガリー、六年のチェコと前科二犯だが、これまでは、東欧共産圏のいわば縄張りの中のことだった。

アフガニスタンは第三世界であり、中東産油地帯の周辺だけに、アメリカの反応も激しく、成り行きが気になる。

八〇年代初頭の世界は、周恩来ではないが、「山雨来らんと欲して風楼に満つ」だ。

冷戦への逆行、ましてや熱い戦争が起これないことを願望したい。

## 二、原発推進の合意は得られるか

NHKが昨年十月行なった世論調査では、「八〇年代に、日本経済が停滞するよきな石油危機に見舞われるか」という質問に、六九%の人が「そう思う」と答えている。

今や国民の常識となった、きびしい石油情勢の下で、原子力発電は、八〇年代に代替エネルギーの主座として、国民の合意を得られるだろうか。

オーストリア国民は、一昨年十一月の国民投票で、すでに完成している「ツペンテンドルフ原発」の稼働に、〇・九%の僅差でノーといひ、一方スイス国民は、昨年二月、「ゲスゲン原発」に対し、二・四%の差でゴーサインを出した。結果は正反対だが、両国とも賛否はほぼ半ば。

わが国には、国民投票の制度はないが、野党第一党の社会党は、「原発建設は当面凍結する」という態度を変えず、国論はまだ大きく分かれている。

一日も早い合意の形成を希望する。

## 三、連合の時代に入るのか

十年前、一九七〇年元旦の朝日新聞で、政党幹部を含む百人の識者のうち、七十人までが、七〇年代中に、自民党単独政権は崩壊すると答えている。

大方の予想に反し、自民党政権はまだ続いているが、衆参両院とも、ギリギリの伯仲状態に追い込まれ、また、昨年末の党内抗争は、あとマッチ一本で分裂しかねない「もろさ」を示した。

野党も変ってきた。七〇年代には、「連合」は言葉だけだったが、昨年十一月の「公民」の一月の「社公」二つの政権構想の合意で、七月の参議院選挙では、社会・中道の選挙協力の可能性が高まってきた。

自民党が参議院選挙に勝つためには、二十六ある一人区で独占に近い成績を必要とするが、社公民が協力した九年前、昭和四十六年には、八つの一人区を失った悪夢のような前例もある。

八〇年代は、どうやら「連合の時代」に入ると思うのだが……。



# 身辺雑記風八〇年代

## 高原須美子

(評論家・茅誠司部会)

大の高所からではなく、身辺雑記的に私の身の回りの関心事をとりあげたいと思う。

一、地方の時代の行方―わが家にとって、八〇年代には地方都市飯田(長野県)への移住計画がいよいよ本格化する。飯田は、定住圏構想のモデル地区となっており、まさに地方の時代の実践都市といえる。国土庁の話では、中央の計画によってモデル地区がどう変るかなのでなく、今度の構想では、地元自身がどう変えて行くかが大切だとのこと。地元の人たちがどういうまちづくりをするか楽しみである。一方、八〇年代に大都市は一層住みにくさを加え、実体は、第二のニューヨークになりかねない。八〇年代の終わりには、それまでに飯田の敷地の一隈にたてたお茶室でお茶を楽しみながら、『東京砂漠』で苦勞する人々に同情の眼を注いでいるということになるかもしれない。(あるいは地方の時代など影がうすくなり、私はそのお先棒をかついたおっちゃんこちよいに過ぎないことが判明しているのだろうか。)

二、主婦の生き甲斐―三〇歳代、四〇歳代の私の友人あるいは娘の友だちの母親たちをみていると、自由時間をもて余し、何かしたいがすることがみつからないという欲求不満におちいつている。女のライフ・サイクルで、育児期間より、それより先の自由時間が長いというのは、日本では史上はじめての事態であり、主婦たちは、その時間をどうすごしてよいのかお手本がない。暗中模索しているが、場合によっては、自由時間の大半を子供中心に生きる教育ママが増えるとか、職場に進出して労働市場で中高年男性と競合するとか、社会経済問題にもなりかねない。主婦が自由時間をどう生きるかは、社会全体の大問題であると同時に、その一人である個人の問題でもある。私自身は、仕事のほかに、義父の跡をついで、お茶の道に入りたいと思っているが、八〇年代に実際に移れるかどうか。八〇年代の終わりには、お茶道具を前にして、充実した気分になりたいものである。

三、弱い老人への対策―八〇年代には、高齢化がますます進むが、それと同時に、ねたきりなど『弱い老人』も増加する。現に、約四二万人というねたきり老人は、九〇年代には八四万人へと倍増するといふ。私の母は、半ねたきりになって五年後に、完全なねたきりとなり、それから二年半になる。ねたきり老人は、本人だけの問題でなく、それを介護する家族全体、介護にふり回される次の世代の問題でもある。ねたきり老人の介護は、家族の手に余るものだが、現在では、ほとんど家族の手、なかでも主婦の手にまかされている。『日本型福祉社会』は、増えるねたきり老人の問題を家族の負担で解決しようとならっているような気がして心配である。『強い老人』には自助の努力で頑張ってもらい、『弱い老人』に手厚く社会の手を伸ばすという形でないかと高齢化社会はのり切れないだろう。八〇年代の終わりに、相変らずねたきりの母をかかえ、自分自身も老齢に接近し、くたびれ果てているかもしれない。地方の時代の夢も捨て、生きがいどころではなくなつて……。



A POINT OF VIEW

時間

高梨 豊

# 中国望見

遠景と近景



『上海時代に  
至る三つの因縁』

吉田 きょうは、まず松本先生と中国とのかかわりを存分に聞かせていただきました。と思います。先生の上海時代は確か一九三二年に始まっていますね。木元さん

〔司会〕

松本重治

（国際文化会館理事長・松本重治部会）

木元教子

（放送キャスター・茅誠司部会）

吉田実

（朝日新聞社編集委員）

や私などが生まれたころ、中国大陸で通信社の特派員として大変な時期を精いっぱい過ごされたわけですが、きょうは、もっとさかのぼって、そもそもの因縁から一つ。

松本 ぼくが、中国に関心を持ったのは、いろいろの因縁があったのです。第一の因縁といえば、父の訓えでした。私

の祖父は、大阪の財界人だったが身代限りをしまして、私が五つのときに父母と神戸の小さい借家に入って、私の父も月給取りをしなきゃならんわけでした。それで父がアメリカで留学中のとき知り合った武藤山治さんの鐘淵紡績の社長の秘書になりました。父は恐らく神戸で初めてのタイプライターをたいた人じゃなかったかと思うのです。父は一年ほどアメリカにいたので、武藤山治社長が書かれた手紙を外国に出すときは、父がタイプライターで縦のものを横にしたというわけで、えらい機械ができたなあともんなでびっくりしたものだっただけというはなしてました。

吉田 ハイカラで、時代の先端を――。

松本 ええ、そうですね。だけど父のハイカラには異色があった。滞米中でも始終、漢籍の本を手にしていたし、また鐘紡の月給取りになってからも、取り引き先の中国人の豪商呉錦堂という人と友好を深め、その中国人を非常に尊敬していました。私が大学を出て東大法学部の大学

院学生でいたときに大震災にぶつかつた。研究室は焼けるし、東京の佐久間町にあつたぼく自身の家も焼かれて、全部だめになつて、しょうがないからアメリカへでも行こうと父に相談したら、自分も若いとき行つたんだからお前も行ってこいというわけです。

わたしはイェール大学に行つたんですが、そのときに父が珍しく手紙をくれましてね。一生涯に三通ぐらいしか手紙を書いたことのないくらい筆不精の父が、アメリカ人と友達になることは非常に結構だと。けれども、中国からの留学生ともできるだけ友達になるように努めたらどうかと書いてきた。それでわたしは、中国の留学生とできるだけ友達になることに努めたんです。

そのころ中国から來てる留学生は全部「対華二箇条要求」の影響を受けて反日なんです。日本からの留学生なんていうのは遊ばへんという風潮だつた。でも、ぼくだけは率直にものを言うから、じゃあ特別につき合つてやろうということになつた。その一人が、前の南開大学の総長をしていた何廉君です。つい二、三年ほど前までつき合つていた友人の一人です。とにかく中国人とつき合うことに、わたし自身も非常に興味を感じてました。

吉田 それが中国に因縁を持つようになられた始まりですね。

松本 もう一つは、私が米留学時代に お世話になつた政治学者であり歴史学者

であるチャールズ・A・ピアードという先生が「日米間で一番問題になる点は、中国にたいする姿勢が日本とアメリカとは違うんだ。これがガンにならないければいいが、日米戦争を招く危険性がある。どっちにとつてもバカげた話なんだから、そういうことはやめたほうがいい」と言われていたので、わたしは、そのときから日米関係は日中関係だということを書き続けてきたわけです。

そのときに同盟通信社の社長をしていた岩永裕吉さんが音頭をとつて、一九二九年に太平洋問題調査会の国際会議が京都でありまして、これは日中だけでなくアメリカ、イギリスなど太平洋に關係のある諸国の民間代表が参加したんですが、日本が満州問題で武力行使をするなんていうことはできれば避けたいという気持ちから、日中双方の有志グループが日中委員会みたいなものをつくりましてね、そのときの議長が南開大学の張伯苓です。で、彼がぼくを書記長にした。これが三番目に、ぼくが中国との因縁を結んだいきさつです。

吉田 それから四つ目が、上海時代になるわけでしょうか。  
松本 そうです。

で	聞	いた	対	日	批判
“	ふる	さと	”	中	国

吉田 木元さんは抽出しをたくさん持つておられるようですが、中国にかかわる

抽出しはまた格別なものがあるんではないかと勝手に想像してましたね。松本 木元さんは去年九月ですか、中国に行かれたのは、その前にも何遍か……。木元 戦後は去年が初めてです。ずっと中国で育ちましたから、あそこがふるさとなんです。

松本 ああ、失礼しましたね。北京ですか。

木元 いいえ。中国といいますが、満州なんです。吉林ですから。

松本 吉林というのは、いい町だね。

木元 きれいなところですしねえ。

松本 うん、京都みたいに静かな……。吉林では、お幾つになるまで？

木元 小学校五年ですから一一歳までおりました。ですから、やはりいまでもふるさとなんです。陽の沈み方にしても、陽の昇り方にしても、虹のできぐあいにしても……。

松本 川があつて、自然がきれいなねえ。吉林はねえ。

吉田 私は台湾ですつと育つたんですが、東北の思い出で強く残っているのは特派員時代にハルビンや大慶油田を見学に行った時のことです。生まれて初めてあんなに大きな夕陽が沈むのを見た。あれを見て「赤い夕陽」という子どものころにおぼえた昔の軍歌を思い出しました。当時は大慶から石油を運ぶ列車がどんどん出て行くんです。ちょうど狂乱物価の直後で、それがみんな日本に輸出される石油だと。それを聞いて昔といまとのコ

ントラストを非常に感じました。

ところで、木元さんは昨年九月、松本先生が一〇月の下旬に本当に久しぶりに訪中されたんですね。どうですか、木元さんが戦後初めて「ふるさと」に帰られた印象は。

木元 わたしがいたころは、日本が支配していた、いわばいい思いをしていた時代ですから、子供心にもそれが当然だという受け止め方をしていました。ところが、大きくなってきて、それは違うんじゃないか。わたしたちは侵略者だったんだから、その侵略者にたいするいろんな思いが当時のわたしたちと同世代の子供たち、あるいはその母親にあったのではないか。それがいま、どんなふうに残っているかも知りたかった。

それと、わたし自身、中国を知っていると、これは全く言えないと思っていました。というのは、日本人が住みいい家に住み、食べやすいものを食べ、ときどきご馳走になることはあつたにしても、それは儀礼的なものでしたからね。あの人たちの日常生活はどうなっていたのか、私には語れる資格はないという思いがありました。それが昨年の視察団に参加して、一番触れてきたかったものなんですね。松本 どうでしたか。

木元 モンゴル自治区まで入って、パオに泊り、そこでお母さんと話せたんです。日本人と余り変わらないモンゴル系の顔で、壁に飾ってある額に鶴の絵なんかがある。「あ、これ同じだ」という気

持からとても親しくお話できるようになつたときに、満蒙開拓団の話も出ました。

あるお父さんが「当時なぜ日本人が来るのか不思議だつたけれども、ロシア人が来るのとは本質的に違うと思った。顔が同じだから、もしかしたら日本人は自分たちの仲間だろう。『侵略する』という言葉はいやだけれども、もう日本にいられなくなったから、自分たちのところに戻ってきたんだ。そう思いたかった」とつていうんですね。そして、そのころは子供だったから、なるべく日本人の子供と仲よくしようとしたけれども、親はやはり日本人に雇われている労働者にしすぎなかった、その隔りは残っているという。でも、まあ恨まないというふうな、わたしたちがよく聞く言葉で迎えてくださいましたけれども。

吉田 現在の日本にたいしては――。

木元 ええ、それなんです。いま日本人が着飾って生活の差が歴然とありますね。そういう日本人の姿をどう思うか、どうかがつたら、二七歳になる未婚の女性が「いまのあなたたちのほうが好きじゃない」と。つまり「わたしたちは戦勝国であり、あなたたちは敗戦国だ。その戦いに負けた国がなぜこんなに繁栄しているのかわからない。なぜそういう繁栄ができるのか、いまのほうがくやしい」と。これも事実だろうと思いました。

ただし「それがいいとは思わない。わたしたちには、わたしたちなりのやり方がある。日本の訪問団の人々はいい生活

をしているとは口には出さないが、しかし体から匂ってくる。その態度がいやだ」と、これはもうはつきり言われました。

ことしから中国が外貨獲得のために、観光にかなり力を入れますね。そうすると日本人はもつと行くでしょう。「そのときに、わたしたちが恐れるのは、そういう日本人たちにわたしたちが侵されてしまうこと、それに、逆の立場での反感がもつとつものではないかということころに怖さがある」と言われましたね。

東南アジア各国で日本の男の方がいろんなよくない観光旅行をしているんですけど、それと同じ気持でもし中国に行ったら、どえらいことになるということ、ひしひしと感じさせられたんです。おとし仲間が行つたときには、そんな話はい出来なかつたんで、それだけのが言えるようになったんでしようねえ。

松本 木元さんは、小学校のときから中国の学校に行かれたの？

木元 いいえ、日本人学校なんです。中国語の時間はありましたけど、忘れてしまっていました。ただ、ふつと言葉が出てくる。あれは不思議でした。

吉田 中国語でお話になるんですか。

木元 とてもとても。ご挨拶程度ですが、それでもちよつと言葉を交わせると急に親しくなるんですね。

松本 それはそう。

吉田 松本先生は一九三二年、木元さんや私が生まれたころ、さっきのようなかわりをお持ちになりながら、本番の上



海に行かれてさまざまな体験をされた。国際関係、日中関係でも非常に大きな役割を果たされたわけですね。今度の訪中にしても『万朝報』なんかには「日米中三国外交界の白幕」とか（笑い）、「感傷旅行か大平首相の密使か」とか（笑い）書かれているんですが、四一年ぶりに行かれていろんな新発見もされたことでしょうかね。

## 廖会長と後継者づくりの糸口をつける

松本 いや、ぼくは今度の旅行では二人ぐらいの中国人と会っただけなんです。一緒に行った息子と嫁が人民公社や工場、地下鉄、地下壕なんかを見たんで、ぼくは昼寝しておって、お話にならないですよ（笑い）。

吉田 しかし、会いたい方にお会いになりましたね。華国鋒さんが欧州に行っているときに、鄧小平さんとも廖承志さんともお会いになっている。

松本 廖さんとは三回ね。二時間ずつぐらいです。

吉田 どんなお話があったんですか。

松本 第一回のは、お互い年だもんでね——廖承志さんも七—じやないかな。それで胆のうを切っちゃった。その後心臓が悪くて、自分ほうまいものを食いついで、いまは蕎麦しか食えなくなつた。太りすぎて心臓が悪いという話をしてくれた。ぼくもアメリカで胆のうを切った

んですよ。その後ぼくはわりあい健康で、水割りも飲めるようになったし、食べ物なんでも差し支えない。二〇年来、不整脈だったんだけど、これも、パイプを吸って、酒を飲んでいるうちにだんだん治ってきちゃった（笑い）。

そんなことから、廖承志さんに、お互い胆のうを切ったのも心臓の悪いのも一緒だが、まああんまり怒ったり何かしなければ、心臓もよくなるよってね、大笑いしたことから始めて、同病相憐みながら話し合っただけですよ。

ちょうどその前、有澤廣巳、衛藤藩吉、安藤彦太郎などの先生方が、日中人文科学会科学友好協会の代表団として来ておられましたよね。ぼく自身も、民間人による日中交流をやりたいという考えを持っていったんで、一般的なことは有澤さんたちが学者同士の交換をやるだろう。

だからぼくは、廖承志さんと話したとき「両方とも年だから、後継者をお互いつくろうじゃありませんか」と言っただけです。これは両国共同で育て上げなければ、日中関係における廖承志さんの後継者なんてできっこないよと。

吉田 なるほど、日中双方の喜びも痛みも、長所も欠点も、よくわかった上で協力しあえる後継者づくりですか。

松本 そうしたら廖承志さんが「そうだねえ、わたしもいまの仕事で一生懸命で、後継者を本当に育てるということを真剣に考えたことはなかったねえ」という話から、「国際文化会館と中日友好協会と

で人物を選んで、若い人でも中年の人でも結構だから、それをお互いに世話し合いながら育てましょうや」「大賛成だ」というわけですよ。そういう観点から人物交流をやるについては、これは有澤さんにも考えられなかったわけね。

廖承志さんも非常に話がはずんでくれるね、もう、かみしも脱いで話しましようというんですよ。「かみしも脱いで」なんていう言葉を、中国人が言うんですよ。廖承志さんだけは通訳が要らなかつたです。そこで、じゃあもう一回やろうということになって、「今度は君に人民大会堂に来てもらつたけれども、次はわたしがあなたのホテルに行くから」というわけです。

吉田 第二回は北京飯店の先生のお部屋ですか。

松本 いや、特別の会議室で、また二時間ほどやりました。

吉田 そのときは何人ぐらいで？

松本 こっちは五人ですからね。向こうは孫平化と、それから肖向前がいたと思う。それに文選——それで、そういう話を続けましてね、人物交流というのは人を選んでやればいい結果を生むだろうという、ぼくの二〇年の体験での話をした。廖承志さんも「本気で自分も考える」と言ってくれました。ところが「日本へ人を選んで送るにしても、これは人選が大変だね」と言う。ぼくも国際文化会館の後継者のことは一五年がかりで考えてきたけれども、中国の人については、ま

が具体的に……。

とにかく廖承志さんという人は、ほかの中日友好協会の幹部とは段が違うんですね。人の幅というか。非常な政治家ですよね。それで鄧小平と特に仲がいい。

恐らく日中関係以外にも、鄧小平の外交には、ほとんど廖承志がアドバイスしているんじゃないかと思えます。

吉田 そう、華僑問題、台湾問題、それに広範な統一戦線の活動など、いろいろありますね。

松本 それで「ぼくのほうは民間の団体、あなたのほうは政府の外郭団体みたいなもので相当の独立性は持っているけれども、やはり鄧小平なり実力者のオーケーがなければできないだろうから、鄧小平にどうしても会わせてほしい」と言ったわけです。そうしたら、廖承志さんは、多くの訪中の正式の招待者なんですが、それはなかなかうんともノーとも言わない。六日間、北京滞在の予定のうち五日目だけに一日ブランクにしてあるんですよ。恐らくこれは鄧小平に会わせてくれるんじゃないかという期待から、会うために頼んでいたところが四日目の晩一時ごろ、孫平化さんの代わりに話をしてくれていた葉さんという人が、「あした午前10時に人民大講堂に来てください」と。ほっとしたですよ。

それで、ぼくらが先に行っているところへね、鄧小平がやってくるんじゃないかと思っていたところが、玄関まで出迎えてくれたんですね、鄧小平自身か。

木元 大歓迎——。

松本 うれしいんです。あとで気がついたらね。

木元 どのくらいの時間、お会いになったんですか。

松本 一時間。——これが会っていると木の写真です。

木元 なんかないぶん気さくにお話になっていらつしやる。

松本 ええ、全く世界一流の間で、あいうものかなと思う。なんにも威張らないしね。通訳をとおしていきなりぼくに「松本さんはお年を聞いていたのより、会ってみると非常に若い」と言うんですね。「まあそういうことを言う人もあるけれども、あなたこそお目にかかって見る感じは非常に若いじゃないですか」って、ぼくはまた逆にやったら、鄧小平も「やっぱりそう言われてみるとうれいもんですね」と。

木元 正直な方ですねえ。

文化・人物交流の
二重の重要性

松本 ええ。きわめてざつとばらんに話が始まったんですが、例のごとく鄧小平が大演説をぶち始めたわけですよ。「現代化の四つなんていうのがあるけれども、それは方法論であって、本来の自分の目的は「貧乏」から中国人民をなんとかして解放したい。それがわたしの念願だ」という。これは全くそのとおりだと思っ

て、感心して聞いてたんです。

さらに話が続いて、「わたしが対外的に、日本その他個々の国との問題を考えるときも、国連のような機関で第三国を交えて会談するときも、地球大のものを基本的な考えざるをえない。中国もほかの国々の動向に影響を受けるし、中国のやることも地球大に影響を与えるということを本当に感じているから、そういうことを考えながらやっついていく」ということを言われました。

ちょうど大平さんが鄧小平に紹介状をくれたんですが、その最後に、もしも暇があれば二三月ごろ、もう一遍中国に行きたいと書いてあった。そうしたら「大平総理にはもう四遍会ったが、五遍目の会見も大歓迎する。その気持をあなた必ず伝えてくれ」ということを二遍も言うんですよ。それは必ずお伝えしますと。そこまで三〇分ぐらいですね。

吉田 松本先生からは、今度どうおっしゃったんですか。

松本 ぼくは「国と国との関係を区別してみると、政治関係、経済関係、それから一般的に文化関係の三つに分けられる。政治、経済の関係はみんな大事にして考えもするし話もするが、文化関係はご挨拶が多くて真剣に考えない。ところが、ぼくの考えでは、我田引水のようにだけれども、文化関係というものを本当に考えればそれ自体に非常に意味がある。同時に、文化関係を通じて相互理解が増進すれば、政治関係および経済関係の協力

すれば、政治関係および経済関係の協力



がいつそう進むのではないか。その意味で、文化関係には二重の重要性があるのだ。その核心は人物の交流だ。それにはいい人を選ぶことが一番大事だ」ということを話したわけです。

そして、これは廖承志さんといままで話してきたところ原則的には同意してくれた、鄧小平さんからオーケーしてくれ、と非常にありがたいと言ったら、すぐ「廖君、どうだい。それでいいかね」「やります」「それじゃ廖さんとどんどん話を進めてくれ」という運びになったわけです。

「わたしも、あなたがそれだけ言ってくれば北京に来た値打ちがありました。まことに感謝します。ただ一つ、蛇足ではあるけれども、ジエネレーション・ギャップの問題が、中国にあると思います。どうお考えですか」と尋ねた。魏京生と傅月華の二人の名前を具体的に言及しなかった。鄧小平は「林彪と四人組の二つは中国の建設について攪乱者だった。孔子を引用すれば、学びて優秀ならば必ず出世する」とある。ところが林彪と四人組は、攪乱すればするほど、成績を上げて出世できるという間違った考えを持っている。最近問題になった若い二人も攪乱者である。攪乱者にたいしては、社会主義的民主主義の法律秩序に従ってこれを嚴重に処断する」と言ったです。二回、くりかえして、社会主義的民主主義の法律秩序ということをやったです。そのあと、副総理の大平首相にたいす

る歓迎の言葉を伝えることを約束し、お礼を述べて別れた。ちょうど一時間ぐらいでしたね。

## 女性が見た中国社会のオモテ・ウラ

木元 いまのお話うかがって思うんですけど、文化面の交流はこの地区に行ってもかなり飢えている感じがしましたね。

松本 ああ、そうですね。

木元 内蒙古自治区で小学校、中学校、大学——向こうでいう初級中学、高級中学、そして内蒙古大学へ行きましたが、驚いたことに外国語としてレッスンを受けているのは英語と日本語だけなんです。ある程度の年齢になるとロシア語を話す方がいますけど、いまはロシア語はやっていない。で、なぜ日本語と英語だけなんですかって聞いたら、わたしたちが素直に学びたいと思う技術なり科学なりがそこにあるからだ。ほんとに中学の初歩の段階からやっていますね。内蒙古自治区には大連からも先生が来て、実に盛んです。日本語の発音の仕方がモンゴル語に似てるし、それに顔つきも似ていて覚えが早いと。

それで、特に優秀な子供たちの日本語を聞かせてくれましたが、これはすばらしいものでね。わたしが元アナウンサーをしていたということは向こうでわかっていますから、ぜひ授業を持ってくれと言

われまして中学、高校、大学で教えて参りました。内蒙古大学では「実はこういう交流がほしいんだ」とはつきりおっしゃるんです。

ちょうど日本語科のレッスンは九月から始まる時期だったので、一年分のテキストを全部録音してほしいと言われましてね、わたしもこんなことでお役に立つならと思って、きちんと吹き込んで参りました。そうしたら、「わたしたちの国は貧しいものだから、あなたにさしあげるお礼がない」ということで名誉教授にしていた。ほんとに楽しかったです。

名所旧跡を見て回るのも、もちろん中国を知ろうと大仕事ですけどね、いま生きている人たちが望んでいるものをわたしたちがしてさしあげる、そういうことについていっばいあるんですね。それに気がつかなければいけないんじゃないかと思いました。

松本 そう。そうだろうねえ。

木元 それから討論会もしたんですけど、日本はいわゆる戦争放棄をしている国ではあるが自衛隊というものがあるっていうことは、薄々知ってるんです。向こうは地方のどんな小さな中学でも完璧な、地上の建物よりもりっぱな地下壕を持っている。北京の百貨店の地下なんかと同じように、ほんとに五分もたないうちに地上の人間がみんな地下に入れるような地下壕がどこにもあって、学校ならそこ



松本重治氏

で授業ができる。「なんでこんなことが必要なんですか。あなたたちは常に戦争の恐怖にさらされて、これが当たり前だという感じなんですか」って質問をしましたら、「あなたの方の考えは間違っている」と。

いわゆる聖戦論なんですね。正義のためには戦さも辞せずと。究極的な平和のために軍隊があり、そのために地下壕がある。わたしたちはその考えが正しいと思っていると。あそこまで行ってこんな話をしようとは思いませんでしたが、でも、ことはそこまで話せるようになってきたというんです。

松本 話をする自由が前よりもっと出てきたようですね。  
木元 ほんとに。前は見せてもらえなかった地下壕の秘密の入り口とか、トラックが走る地下通路、武器弾薬庫、食糧の貯蔵所なんか、今度ははつきり教えてくれました。友好国として手の内を見せてくれたという感じがとても強かったんです。

それと内蒙古大学で、下放によって自分たちがいかに損害をこうむったかという話と一緒に、しかし下放は悪いとはかりは言えない部分もあると言われましたね。西ドイツでも一年社会事業をしろ、そうして戻ったときに復帰できる制度がある。それと似たような言い方なんです。いったん自分が自分の体を使って生きることがどういうことか、それを知って学校に入ってきた子のほうがよく勉強する

んだと。

今度、高校から大学へストレートに入るようになるかもしれません。そういう子はもちろん優秀だけど、一回土を踏んできた二四、五の人たちのほうがバイタリティもあるし、ものつかり方もはつきりしている。下放は悪い面ばかりじゃないというんですね。

松本 学校のことについては、下放のあと復帰できたかもしれないけれども、社会人になった年齢までいくと職がなかなかないということ、このあいだみんな言っていましたね。下放は命令でやったんだが、復帰は誰も構ってくれんぞ。

木元 とてもありますね、それは。わたくし、もう一つ女の立場からぜひ触れたいのは、ちょうど去年の九月公布、ことし二月施行の産児制限法なんです。大変に厳しいこの人口抑制政策にどんな反応があるのか、女と女の立場で聞いてみます。

二人目の子供を生むと両親の給料から罰金として一〇%ずつ差し引く。一方、避妊手術をして子供は一人にするという手術証明を出せば、その子の一六歳までの教育費は全て国が負担して、しかも親の年金は五%増になるという極端な政策ですね。今度、結婚年齢まで規制されて、省による違いはあっても男性は二七、八歳以上、女性は二三歳以上じゃないといけません。もちろん自由結婚したって家が与えられるわけじゃない。

「わたしは自分の中国は好きだけれども、

このことにかんしては、人間の女として悲しい」と言う二五歳の人に出会ったんです。「日本では中絶する自由、生まない自由ということを言っていると聞いた。けれども、わたしたちは生む自由を奪われてしまった」。この言葉を聞いたとき、ドキッとなりましたね。生む自由をここで奪われたら、せっかく生きてきた女としてこんな悲しいことはないだろうって、その人と一緒に涙ぐんだんです。

市民の、いわゆる庶民の底辺のレベルにそういう感情があることを、国がいくら人口抑制政策で制限しようと思っても、どこまで抑えきれぬかという不安は感じましたね。大事なことでなくてですけど、それはちょっとつらかったです、わたしも。

松本 なるほどねえ。——そういうことも含めて、ぼくが木元さんにお聞きしたいのは、中共のやった革命が四人組もすんで鄧小平、華国鋒の時代になつたいま、一〇〇点満点としてその革命の成功度に何点つけられるか。ぼくの知ってる中国通の人は、二〇点ぐらいしかやれんと言わう。ぼくは五〇点はやってもいいんじゃないかと言ったんだけど、どうですか。

木元 わたくしも、そう高くは点はつけられないように思いましたね。上の流れがどんなに変わっても、あるいは自分たちがどんなに虐げられ優遇されても、自分たちは変わらないというものがあるんです。それは僻地のほうへ行けば行くほど、そういうしぶとさ、根強さ、忍耐強



吉田実氏



木元教子氏

中国の人々が持つ  
ている不動の視点

さというか、何か無言の強さみたいなものをとても感じましたね。  
松本 それは革命前の伝統が残っているんですか。  
木元 わたくし、それはおんなじだと思います。昔接した中国のあの人たちが、いまそうやってしぶとく生きている人たちとは全く変わっていないように思いました。ことは九月に参りますが、毎年行きたいです、これからは。  
松本 木元さんはお若いから、三〇年ぐらい中国を見ていただきたいなあ。  
木元 ええ、わたしも好きですから。がんばって行きます。

吉田 どんなに上が変わってもと木元さん言われたけど、日本人の中国にたいする気持、関心というものも大変なものだと思う。さまざまな政治的変動があっても、ずうっと、変わらずに層の厚いものでありつづけたような気がしますね。見方はいろいろに分かれるんですが、それは非常に確かなものとして私自身の中にも生きつづけてきました。  
ところで、ぶくは文革時代との比較で、変わった面と変わらない面をお話してみたいと思っておつたんですが、中国人というの、相手に一生懸命サービスしてくれる、徹頭徹尾つくしてくる側面と、それから中国は世界の中心だという考え

方、これがやはり度しがたくあるなあという感じを、文革の初期には、とくに強く体験しました。その一つのあらわれだとも思うんですが、当時、本屋とか学校の図書館を覗いたけれども、赤い毛語録ばかりだった。ほかの本がどこに行ったのか、消えちゃっている。  
松本 それは何年ごろですか。  
吉田 六六年です。しかし、同時に、中国は動いている、新しい何かが始まったんだという感慨を覚えましたね。  
ところが七二年から七五年までの特派員時代、そのときは特にアメリカの外からの封じ込め政策が破綻していく過程にに応じて中国が手を打つ、そのうまさが出てきた時期であると同時に、開化政策にたいする四人組の鎖國的な指向が反面にあった。そのころ、本屋に入ってみますとね、毛語録だけだった状況からは脱出して、儒法闘争史に類する本が主流を占めていた。感じとしてはやっぱりモノトーンなんですね。

松本 なるほどねえ。  
吉田 それが今度行ったときは、これはずいぶん本屋が変わったなあ。北京の新華書店なんかに入りますと、二階には農業、工業、科学技術にかんする本がずらりと並んでまして、日本の『トヨタの秘密』なんていう本まで飾ってある。  
松本 はっはっは。  
吉田 一階にはこれまでなかったような長篇歴史小説とか若手の新しい小説、こ

ういうものにかなり人が群っている。もつと行列のできるところに割り込んでみますと、これが「数学の解析問題」「語学の基礎知識」「高級化学問題の分析」とかいった問題集がずいぶんある。たぶん学校の先生らしい人が、それを一人て何十冊と買って行く。学習用の参考資料にするんでしようね。ところが、数学や語学の本を一冊ずつ買っている人もかなりいる。そこで行列の中の一人に「先生ですか」って聞きましたら、「いや、父親です」と。お父さんが列に並んで子供の参考書を買っていく。これは文革時代には考えられなかったことです。中国ちゅうのはほんと変わったなと思いましたね。上海の外語学院に行ったときも、大学の二年生になったばかりの学生が日常会話の域をとおくにとり超して、日本の政治の問題、文化の問題などを、流暢な日本語で聞いてくる。入学前からテレビやラジオの日本語講座はもちろん、家庭教師にもついていたというんです。

だから、中国というのは、政策の転換をやることによって、いろんな資質を表わす、そういう民族であるなあと感じましたね。  
松本 うん、うん。  
吉田 もう一つ。これは変わらない例ですがね、文革の潮流が残っていた特派員時代の経験で、中国人というのはいまどいなあと感じさせられたことがありましたね。北京で二か月ばかり宿舍がなくて、新喬飯店に家族と一緒にいたころ、よく

私の運転をしてくれた七、八歳先輩の中国人がいたんです。これがなかなかおもしろい人で、わたしが北京の自動車の流れを見ておつて、「中国っていうのは公害がなくて、すがすがしい」と言いましたら、「いやあ、聞くところによると、日本の工業力は大変なものです。それに比べると、われわれの工業は大層遅れています。本当に」と。

また、当時は北京の街角のあちこちに毛主席語録の看板がありました。それで「中国の人たちはこの毛語録で心を一つにして頑張っているんですね」と言ったら、反問された。「吉田さん、田中首相はどのくらい日本人たちに支持されますか」。あのころは国交正常化の前後で人気は高かった。それでも「せいぜい六割です」と答えると、「いや、中国でもそうですよ」とその運転手さんがいったんです。

松本 ほう、そうですか。

吉田 中国にもいろんな人間がいるということを――。

松本 へえ、えらいもんだねえ。

吉田 その運転手さんの、ああいう状況のもとでの毛さんにたいする見方、日本にたいする見方、あるいはわたしとの接し方。これは人間対人間のおつき合いが中国の人とのあいだにはできるんだなと、いまでも非常にそのことが心に残っています。だから、中国の人っていうのは文革の時代からぐうっと変わったように見える側面と、いやいや、中国という国は

こんなもんですよということを、時代が変わっても自分でちゃんと見てる人もいるのかなという感じはあります。

先生はもつと波長の長い比較をお持ちと思うんですが、上海時代に見られた中国と、今度行ってごらんになった中国とを、どういうふうにお考えですか。

庶民がこうべを上げ胸を張っている
------------------

松本 やつぱり一般庶民が自信を持つてるといふ感じは前と違う。上海時代のころは、役人とか金持とかが一人前以上に威張っていたわけでしょう。一般庶民は、こうべを垂れて余り元気がなかったですね。当時、上海のほうが北京より元気は元気があったけど、そしてその点はいまも上海のほうがもつと元気だと思ふけれども、北京の庶民がみんなまつすぐこうべを上げて胸を張って歩いている。これは新しい現象じゃないかなあと思ふ。

吉田 特に、先生が行かれたときは、民族として凌辱されているさなからですかね。

松本 そうなんだ。

吉田 確かに中国の変わり方というのは大きいと。しかし、昔見た中国と変わりが無いというさっきの木元さんの意見が一面わかるような気がするの、中国の長い歴史的な社会構造をみると、皇帝、宰相、ひと握りの知識階級がいて、そのあとはすべて農民層だったという形態、これはどんなに王朝が変わっても動かな

かったわけですね。

ところが、じゃあこの民族として独立した新中国が、依然として指導者と特定な幹部だけの舵取りでいいんだらうか。

それを、労働者や農民、兵士という本當に中国を底辺で支える人たちが主人公になる国につくり変えんといかんというのが、ぼくは、毛さんの一つの挑戦だったという思いが強くするんです。

ただ、最近、中国から来た人といろいろ話をしておつたときに、毛さんはこう言っていたということを書きました。「わたしは二つの仕事をした。一つは新しい中国の建設であり、一つは文革だった。新中国の誕生にはみんなが賛成してくれた。ところが、今度の文革についてはいろいろ意見があるようだ。だからこれは七・三だった」と。

松本 なるほどねえ。

吉田 さっき先生は五〇点ぐらいやつてもいいじゃないかと言われ、木元さんは「そう高い点は……」と言われて、また、七・三が三・七じゃないかという考え方も出ていますね。いまの現象はむしろその逆だ。

理屈っぽくなって恐縮なんです、文革のモチーフは、人民大衆が主人公になる中国にすべきだと。そのためには生産関係をもつと変えていく、つまり階級闘争を重視していかなくてはならない。それが官僚主義批判、修正主義批判として現われた。ただし、それが途中で空回りしてしまったということは確かにあった

気がします。

**木元** このあいだ私が参りました時は、日本の総選挙の直前だったのですが、ちょうどテレビで総選挙番組を持っていたので、中国のいわゆる近代化には、この人民大衆の政治参加も必要なのではないかという思いで、自由時間の時に、北京、山西省の大同、内蒙古の包頭など、街の中をキョロキョロ見てあるいたんです。というのは、昨年から全人代で、改正選挙法が採択されて、挙手による公開選挙から、まあ今の日本のように無記名による自分で書いて投票する選挙にかわったんです。その投票いわゆる「民主選挙」のポスターがその頃から、初めて見られるということだったんです。ありましたね、赤い地の紙に黒の字で。居民委員会（革命委員会）近くてお話を伺ったんですが、これがいわゆる全人代表を選ぶ地域選挙なのですが、今までは、上からの指定された候補、しかも七人選ぶのなら七人だけしか候補者として名前が出されていないというようなくらいだったのが、ことしから候補者数より三、四人多い。各団体が推薦しているっていうんですね。だからことしからは、ささほど、吉田さんがおっしゃったように、民衆が主人公になる中国という意識をはっきり持てるようになったと言っていました。

でも、十三年間も全国規模の選挙がないわけですし、「階級闘争・勝利」という壁文字の横でポスターだけは高らかに「民主選挙」をうたいあげても、人民は

ややとまどいがちの感がありました。華国鋒さんも、鄧小平さんも、文革によって空回りしてしまったものをとりもどそうと呼びかけているようですね。例えば、全人代でも「あらゆる単位で選挙をやる。民衆が幹部を評価するために」なんて言っていますね。若い人達はかなり反応がいいようでした。自分達の意見を取り入れて国は近代化の道を進むのだというように語っていました。でも、これが今後どのように定着してゆくか……。

**吉田** 鄧さんというのは——林彪・四人組が攪乱したと言うのは階級闘争ばかりに偏って、生産とか科学実験という重要な要素をネグってしまった。元来、毛さんは「階級闘争、生産闘争、科学実験」と言っていたけれども、実務を知らない四人組がやって、空回りに終わってしまった。だから、いま一番重要なのは、進んだ生産関係と遅れた生産力というものを現在の中国のあるがままの姿として見るべきだ、と言っているんですね。

ですから、政治闘争など余りゴタゴタやらないで、もっと生産力を高めて中国自体のパイを大きくする、そこで貧乏から大衆を解放していく。これが何にも増して重要だという考え方がいまの指導者に非常に強くあるという感じはします。それが鄧小平さんのさまざまな発言になって出てきているんじゃないでしょうか。

ただ、中国を見ている日本人のなかにも、文革時代と比べながら、なんだ中国も普通の国になってしまったなと感じる

人がかなりいる。他方、中国の近代化に期待を寄せる人たちの間にも、現在の指導部は少し自由化したといってもすぐ抑えつけてしまう。そういう動きにどうも釈然としないものを感じている人たちもいるんですが……。

## 断面的背景に 歴史的な展望を

**松本** 非常に複雑だと思いますがね、華国鋒と鄧小平のほかに、谷牧一派の行政官出身のテクノクラートには、マイナスマもあるけれども、ある程度いい点数をやらなきゃならない時代がくるんじゃないか。

それはたとえば上海北方の宝山の製鉄所コンビナートを作るについても、新日鉄はインフラストラクチャーを余り重視しなかった。鉱石を持つてくるんでも、大きな船をつける港がない。水も、鉄道も、電力も足りない。だから、生産計画と同時にインフラストラクチャーを並進していかなければいけないんじゃないか。それはやっぱり、谷牧一派の一つの新しい計画順序というものの正しい見方じゃないでしょうか。調整期っていいですね、いまは。

**吉田** いま、先生のいわれたのは武漢製鉄所のことではないでしょうか。宝山の場合もいろいろと難問はあるようですが、武漢の経験はかなり生かしているように思います。ところで、近代化との関連で、

今度の旅行中「明治維新」という話をずいぶん聞いたのも一つの驚きでした。中国の指導者たちの間には、日本近代の〇〇年を見直そうとする姿勢が感じられましたね。戦後の日本だけじゃ足りない、といった……。

松本 それはそうだ。

吉田 明治維新から日本の近代史を勉強し直そうという考えが、インテリのあいだにかなり出ていると思う。ただ、いまだに近代化を果たした国はヨーロッパでせいぜい人口数千万ですよ。日本は一億、アメリカは二億ちよつとですね。だから一〇億を近代化するというのはいったいどういふことなんだと。この国を預かる政治家は、「四つの近代化」と併行して、政治、思想面での近代化にも力を入れんといかん。しかも、しっかりとバランスをとりながら。その機関車の役割を実質的に背負っているのが鄧小平さんだと思ふんですが、先生お会いになつてどうお感じになりましたか。

松本 まあ、そうね。——やつぱり周恩来がもう一〇年生きていてはしかなかったねえ。そうすると、鄧小平に欠けているものを、周恩来なら持つてたんじゃないでしょうか。

吉田 中国の一般庶民の鄧小平さんに対する評価は三つある。一つは実務能力がある、一つは私心がなく公平だ、一つは誰にでも率直にものを言う。この三番目が長所であり、かつ欠点でもあるということになりますかね。非常にむずかしい

問題だと思ふんですが、先生の言われるところはわかるような気がします。

最近、中国の人と会う機会が大変に多くなつていろんな人物評を聞くんですが、そのなかにこんなことをいう人がいた。「毛さんは鄧小平を右寄り指向の人間だとは言うとしたけれども、その独特な能力は決して否定はしなかつた。周さんもそれはよくわかつておられた」と。

松本 そうだろうね。

吉田 ぼくは最近の日中関係を見てまして、松本先生しかり、松下幸之助さん、武見太郎先生しかり。ほかにも何人かの大先輩がおられますが、明治のロマンを持ち、日本の近代化に貢献し、日本のそれぞれの峰に立っている人たちが中国に眼をこらしておられるということは非常に有難いことだと思ふんです。

と同時に、いろんな人がすごい勢いで中国に行くようになった。いまの中国を日本人の眼で見て、横にスパ一つと切る見方が紙面にもどんどん出るようになった。それは、わかりやすく、かつ同じ人間だという親しみやすい中国というものを感じさせる。それは日中がよりよく知り合う過程で欠かせぬものを確かに持っているけれども、そういう見方だけで今後の日中を見ていつていいのかわるか。そういうことを、しきりに感じているんです。

松本 それは吉田さんのおっしゃるとおりなんであって、一断面を分析してそれを見ることも大事だ。と同時に、断面の

背景と将来性の両方を歴史的に考えることも大事だね。これは絶対に大事だね。

吉田 そこから、中国をよく知つておられる松本先生と、日本をよく知つておられる廖承志会長との話のなかで後継者の養成の重要性ということが生まれてきた。歴史の大きな流れのなかでそういう人間をつくっていくことが本場に必要時期だと思ふんですけども、中国研究者に限らず、これからの日本と中国とのかわりのなかで、どういう資質を持った日本人が求められてくるんでしょう。それは同時に、日本と他のアジア諸国、さらには第三世界の人々との関係についてもいえることですが……。

松本 やつぱり中国人にたいしては温かさを持つてね。欠点もあるだろう、国民性の違いもあるだろう、しかし長い目でそれを温かく包んでいくような気持を日本人が持つていくことでしよう。具体的な生産計画なんかで中国側の考えとは違いが出てくるだろうけど、それを話していってわかつてやり、教えることは教えてあげるべきだと思ふんです。時々出てくるに違いない不一致を乗り越えていくだけの、日中双方の指導者が必要だということを感じがしますね。

まあ三〇年見て、それでもう一遍中国を顧みてみる必要があるでしょうね。三〇年たてば、将来性がいちおうはつきり出てくるんじゃないでしょうか。

# 砂と共に

撮影 富山治夫



砂漠の中のガソリンスタンド看板



砂漠の中の廃墟に

自然に従順な

人間の

生きざまを見る

砂漠の中の緑に

やすらぎと

不思議な

生命力の強さを見る

風に吹かれた砂が

地平線に

不透明な層を形造るとき

永遠の時間に包まれる





# 部会 の 歩 み

部会テーマ

21世紀における  
日本人の生き方



松本重治部会

部会テーマ

世界の中の日本



中山伊知郎部会

部会テーマ

明日のエネルギー



茅誠司部会

部会テーマ

村の将来を考える



加藤秀俊部会

部会テーマ

大正時代文化研究



小松左京部会

部会テーマ

日本のサーバイバル



加藤芳郎部会

## 松本重治部会

●第1回(77年10月24日)

21世紀における日本人の生き方

松本重治、本間長世、前田陽一、榎文彦、村上兵衛、柳瀬睦男

●第2回(78年5月11日)

価値観の革命と日本人の可能性(ヘスピーカー)

川喜田二郎

前田陽一、榎文彦、村上兵衛

●第3回(78年9月19日)

世界国家と日本の文化(ヘスピーカー)中

村元

川喜田二郎、本間長世、前田陽一

●第4回(79年6月5日)

21世紀における日本の政治文化的役割

(ヘスピーカー)武者小路公秀

川喜田二郎、本間長世、前田陽一、村上兵衛

●第5回(79年11月12日)

日本の教育と世界の変化(ヘスピーカー)

永井道雄

松本重治、前田陽一、榎文彦、村上兵衛

柳瀬睦男

## 中山伊知郎部会

●第1回(77年11月26日)

世界の中の日本

中山伊知郎、江藤淳、大来佐武郎、滝田実、中根千枝、林雄二郎、松山幸雄、ロベール・バロン

●第2回(78年4月15日)

国際化時代とその問題点

中山伊知郎、大来佐武郎、篠原三代平、滝田実、堤清一、中根千枝、林雄二郎、松山幸雄

●第3回(78年10月21日)

国際社会における中国そして日本(ヘスピーカー)

秋岡家栄

中山伊知郎、篠原三代平、滝田実、中根千枝、林雄二郎

●第4回(78年12月15日)

『日本型ビジネスの研究』をめぐって

(ヘスピーカー)ロベール・バロン

中山伊知郎、大来佐武郎、林雄二郎、松山幸雄

●第5回(79年4月10日)

国際化社会と日本の知識人(ヘスピーカー)

江藤淳

中山伊知郎、滝田実、林雄二郎、ロベール・バロン

●第6回(79年10月11日)

日本・第二の開国(ヘスピーカー)小金芳弘

滝田実、中根千枝、松山幸雄、木元教子、富舘孝夫

## 茅誠司部会

●第1回(77年11月28日)

明日のエネルギー—省エネルギーを考える

茅誠司、生田豊朗、村田浩

●第2回(78年5月10日)

エネルギー危機と石油の将来見通し(ヘスピーカー)富舘孝夫

茅誠司、有澤廣巳、大熊由紀子、尾関通九、金森久雄、木元教子、三枝佐枝子、高原須美子、中村真、橋口収、深海博明、松根宗一

●第3回(78年9月25日)

大陽エネルギー利用の現状と展望(ヘスピーカー)角南平、吉田方明

茅誠司、生田豊朗、大熊由紀子、尾関通九、金森久雄、木元教子、五代利矢子、高原須美子、富舘孝夫、中村真、橋口収、深海博明、松根宗一、村田浩

●第4回(78年11月30日)

バイオマスの未来(ヘスピーカー)須之部淑男

茅誠司、生田豊朗、尾関通九、金森久雄、五代利矢子、高原須美子、富舘孝夫、永井陽之助、中村真、橋口収、深海博明、松根宗一、村田浩

●第5回(79年2月16日)

大分見学部会

茅誠司、尾関通九、木元教子、五代利矢子、三枝佐枝子、高原須美子、深海博明、松根宗一、滝田実、松山幸雄、乙部順子

●第6回(79年5月15日)

原子力エネルギーについて(ヘスピーカー)村田浩

茅誠司、尾関通九、木元教子、三枝佐枝子、高原須美子、富舘孝夫、永井陽之助、中村真、橋口収、深海博明、松根宗一

●第7回(79年7月6日)

北陸見学部会

茅誠司、尾関通九、五代利矢子、高原須美子、中村真、深海博明、松山幸雄、乙

美子、中村真、深海博明、松山幸雄、乙

部順子、大山のぶ代、天地総子

●第8回(79年10月25日)

核融合について(ヘスピーカー)内田岱一郎

茅誠司、尾関通允、金森久雄、高原須美子、中村真、永井陽之助、橋口収、深海博明

●第9回(80年2月26日)

長期エネルギー需給暫定見通しにおける新エネルギー開発の位置づけ(ヘスピーカー)山中正美

新エネルギー開発の現状(ヘスピーカー)本間琢也

茅誠司、有澤廣巳、尾関通允、金森久雄、木元教子、五代利矢子、永井陽之助、橋口収、深海博明、村田浩、林雄二郎、ロベール・バロン、墓目良

## 加藤芳郎部会

●第1回(77年10月20日)

日本のサーバイバル

加藤芳郎、青空うれし、青空はるお、天地総子、大山のぶ代、大和田獏、加治章、小島功、田崎潤、檀ふみ、水沢アキ、三橋達也

●第2回(77年12月22日)

日本のサーバイバル

加藤芳郎、青空はるお、大和田獏、加治章、田崎潤、坪内ミキ子

●第3回(78年5月18日)

科学技術はどこまですすむか(ヘスピーカー)提佳辰

加藤芳郎、青空はるお、天地総子、大山のぶ代、加治章、砂川啓介、鈴木義司、坪内ミキ子、三橋達也、ロミ山田

●第4回(79年2月8日)

二〇〇〇年のエネルギー(ヘスピーカー)向坂正男

加藤芳郎、青空はるお、大山のぶ代、坪内ミキ子、三橋達也、ロミ山田

●第5回(79年4月5日)

日本人の将来と人間の問題(ヘスピーカー)向坊隆

加藤芳郎、青空はるお、天地総子、大山のぶ代、大和田獏、砂川啓介、鈴木義司、檀ふみ、坪内ミキ子、墓目良、岡江久美子、富田純孝、川野一宇

●第6回(79年10月18日)

生残りの戦略—日本の安全保障(ヘスピーカー)桃井真

青空はるお、砂川啓介、檀ふみ、水沢アキ、三橋達也、ロミ山田、富田純孝、川野一宇

●第7回(80年2月21日)

米・イラン問題と日本の影響(ヘスピーカー)深海博明

加藤芳郎、青空うれし、天地総子、大山のぶ代、大和田獏、川野一宇、砂川啓介、檀ふみ、坪内ミキ子、富田純孝、墓目良、水沢アキ、三橋達也、ロミ山田、渡辺文雄

以上の各部会については、詳しくは、部会記録、現地見学会記録、会報等に掲載してあります。

## 加藤秀俊部会

21世紀の日本を考える時、現在もつとむりのこされている「村」に焦点をあて、その歴史と、フィールド研究によって、根っこの部分を明らかにする。

山村・農村・漁村のいくつかを調査地点として選り研究が進められている。

- 1、岩手県沢内村長瀬・和佐内・七内川
- 2、宮崎県諸塚村
- 3、新潟県佐渡・宿根木
- 4、広島県戸内町松原
- 5、和歌山県・太地
- 6、沖縄県伊良部島・佐良浜

## 小松左京部会

なぜ大正か

大正遺制について

大正時代の経済について

大正通史のとらえ方

大正人のインタビュー

田代茂樹(元東洋レレヨン会長) 西堀栄三郎(元南極越冬隊長) 田河水泡(漫画家) 牛原虚彦(芸術映画開拓者) 西春彦(外交官) 有末精三(元陸軍参謀) 三宅正一(農民運動家) 孝橋謙二(富士見町教会) 真下善一・吉田新一(下谷っ子)等

# 八〇年代日本の エネルギー問題

茅誠司 かや せい じ  
（東京大学名誉教授・茅誠司部長）

松根宗一 まつね そういち  
（大同特殊鋼相談役・茅誠司部長）

深海博明 ふかみ ひろあき  
（慶応義塾大学教授・茅誠司部長）

【司会】  
富舘孝夫 とみ たか お  
（日本エネルギー経済研究所研究部長・茅誠司部長）

## 八五年に二つの焦点

**富舘** たまたま今日の出席は、茅部会の中でも一番長老のお二人と、一番若い二人（笑い）というわけで、私が司会をさせて頂きます。編集部からの注文は、過去二年半の茅部会の活動を振り返りながら、八〇年代日本のエネルギー問題の行方を占うという、これも大変幅広いものでありまして、肩の荷が重いところですが、どうかよろしくお願い致します。茅先生から最初に……。

**茅** 現地部会と称して、九州と北陸へ二度参りましたね。事前にいろいろ勉強して、ある程度理解を持って出かけたわけですが、実際現地へ行ってみると、たと

えば地熱発電の場合でも、考えていたより違った困難がそこにはたくさんある。

私が一番印象深く思ったのは、北陸現地部会のとときで、地域住民の合意形成という問題はこれから解決しなくてはならない一番大きな問題ではないかと思いました。そういうことを実際に感じてみて大変勉強になりました。

われわれ、大分専門の違った方が多いわけですが、会合をこうして重ねていく中に、だんだん落ちつくべきところへ皆さんの関心も集ってきたのではないかという感じです。

**松根** まことに怠け者でして、私は部会に出席する機会も少ないのですが、いま茅さんのいわれた「地方巡業」（笑い）です

か、私も行ってみて、かなり知っているつもりでも新たに発見することが多く、その意味でこうした現地部会の意義は大きいと思います。最初に大分に行ったのは昨年……。

**深海** 二月ですね。ちょうど一年になります。

**松根** 雪に遭いましたね。あの当時からくらべると、この一年間、石油を中心とした日本のエネルギー問題はそれこそ様変わりしたわけです。問題も増え、むずかしくなった。その意味ではこの茅部会、大構えに構える必要はないけれども、東京でもう少し開く機会を多くして、特に日本をめぐる国際情勢、国際紛争の性格とかそれに対する各国の対応、エネルギー



「問題への影響等々のことについて、専門家を呼んでヒアリングしたり情報を分析する会合をもつ必要があるのではないのでしょうか。」

たとえば、一九八五年というのは一つの危機の年だと思うのですが、それを予測するには現在のイラン問題やアフガニスタン問題の帰趨、そのことの政治的・軍事的波及、たとえば石油ルート確保

をどう考えるかというような問題があります。

また、米国、カナダ、メキシコ三国のエネルギー同盟などの話もあります。昨年夏、カナダに参りましたときは、カナダあたりはむしろ日本と共同してやりたいというような姿勢がありました。その後の国際情勢の中でそれがどう変わったか。まあ、問題はいろいろありますが、主としてエネルギーの国際環境にしばらくは注目したいと思います。

**深海** 第二回目の部会以来、現地見学も含めて精動させて頂いています。私がこの部会がユニークだと思うのはいくつか理由があります。一つは皆さんそれぞれ有識者の方々でありながら、石油・エネルギー問題については、良き意味でのアマチュアリズムを発揮しておられる。そこが魅力で、そういう広い立場の人々が集って議論する中に非常におもしろいポイントなり、つい見逃しがちなポイントを教えられることが多い。

二つ目には、これまでの茅部会をふり返りますと第三回以来、新・代替エネルギー問題を中心に論議されてきたと思うのですが、その面での自然科学的、工学的、技術的側面の知識の供給という点で、とくに私のような社会科学畑の人間にとっては大変勉強になった。

そして三つ目には、茅先生も最初におっしゃった現地部会、現地調査をあげることができると思っています。これについてはまた後で論議されると思いますが、私

も富舘さんもそうだと思いますが、国際会議や外国の現場に出かけることは多いのですが、国内の現場を見、しかもそこでそのナマの声を聞く機会というのは意外に少ない。とかく「セオリー・ウイズアウト・プラクティス」になりがちですが、その点についても大いに啓発されています。

そして四つ目に、これは最初に述べたことと関係しますが、一緒に旅行したり、夜酒を飲むというような「場」で、普通の研究会では得られない、思わぬヒントなり方向づけを得ることがあって、これも捨てがたい魅力となっています。

こう見えますと、茅先生から冒頭、この茅部会の皆さんの関心の方向が二応定まりつつあるというお話がありました。部会メンバーのそれぞれが幅広い立場からの判断なり意見を出すことができるといふ点からいえば、一つには、総合的な判断とか戦略論を打ち出すのにこの部会は非常に役立つのではないかと同時に、目先どうするかというような具体的な戦術論についてもそれぞれの立場から提言していくことが可能だと思っております。

## 日本の省エネルギー 技術を見直す

**茅** この間、NHKテレビの「石油・知られざる技術帝国」を息子と二人で見ている、感嘆したんですよ。石油を掘る技術の進展のありさま、それがいかに近代



茅誠司氏

科学と結びついているか、いろいろ教えられました。極限的なというか、現在どこまでエネルギー技術が行き着いているかということも大変いいテーマではないですか。

それからいま松根さんのいわれた世界的情勢の変化というものも、われわれ新聞を読んでいて、どこまで真実を伝えていけるのかな、と思うことがあります。そういう問題について総合的に話を聞くことも必要じゃないでしょうか。

**松根** 日本にできることとできないことがありますね。これは間違っているかも知れないが、私は先ほど申し上げたように、八五年前後というのが一つの非常に危ない時期だと思っている。それまでに日本ができることは何かといえ、やはり「油の節約」ということでしよう。

これは日本の技術の問題としてもやれる面が非常にあり、国民性からみてもその能力が日本人にはある。同じ車や冷蔵庫や掃除機を作っても、日本人はより効率的なものを作る能力がある。先日も「ニューヨーク・タイムズ」でしたか、「日本人にもっと見習え」という記事が出ていました。

それから備蓄の問題などは、これは日本だけで考えなくて、われわれの仲間というか、太平洋経済圏の諸国と協力し合っ、いざ困ったときはお互いに助け合えるような備蓄体制を作る。私は食糧についてもそういう体制が考えられていいと思う。

**富舘** 確かに日本人というのは、暮しの中の工夫というのは昔から進んでいますね。電気コタツなどもその一つ……。

**松根** 優秀ですよ。いまできる冷蔵庫などは昔にくらべて電力が半分位じゃないですかね。テレビなどもそうだね。

そういう意味で、この間から私がメーカーや電力会社にやかましくいつているのは、原子力発電所の稼働率があまりにも低いじゃないかということ。そのぶん、結局、油を余計に使っているわけですね。もつと故障を少なくするか、検査を合理的にするとかの方法が考えられていいはず。故障が少くなれば、新しい発電所の敷地を見つれることだつて楽になるし、もちろん何千万トンという油の節約になる。

**茅** 新エネルギーがいろいろやられてはいますが、エネルギー量という点では、いま松根さんのいわれた原子力発電所の稼働率を高めることに匹敵するものはほとんどないわけですからね。そういう意味で、いま一番問題なのは稼働率でしょうね。

**松根** ひとつにはお役所もよくない。ちよつと故障があると止める。そして止め

ておく期間がまた長いのです。最近の日本の原子力発電の稼働率を比較して見ても米国の七五％に比べ日本は五〇％という実績です。もつと電力会社もメーカーもお役所も一生懸命努力しなければいけないと督促しておるのです。とくに原子力発電は石油発電よりもはるかに発電原価は安いのです。料金低下にも重大な影響があるわけですね。

## 幅広い国際戦略を

**深海** 八五年までに何ができるか、という視点でいいますと、茅先生がおっしゃるように、新・代替エネルギーつまりハードの面では、量的にも価格的にも戦力を期待することはむずかしい。将来に向けてどう優先順位をつけていくかが差し当たっての大きな課題と思われまます。そうなる、どうしてもこれまでお話のあったソフトの面、たとえば富舘さんも最近主張されているように、われわれの生活の仕方とか成長率自体の構造のほうに目を向けていかざるを得ないのではないか。いわゆる「ぜい肉を切る」というものですね。

それからもう一つ、省エネルギーという場合、価格メカニズムをあくまでも中心として実現していくべきだと考えます。が現実には非常にむずかしい。相対的に石油価格だけが高くなるメカニズムができればいいのですが、現在のシステムで

は便乗値上げとかいろいろ出てくる。また寒冷地の低所得層などに対しては何らかの保障的な措置を考えないといけない。こういう価格メカニズムと「政策」との間で、そういう細かい現実的な配慮が必要だと思ふのです。

**富館** ご専門の国際経済の面ではいかがですか……松根さんから備蓄の話も出ましたが。

**深海** 松根さんのご提案はよくわかる。わかるんですが、どうも現在の国際的な政治経済の動きを見ていると、全体として国益追求というか「内向き」ですね。

特に私が懸念していますのは、日本がいま産油国などに働きかけるとき、どうしても北の視点で論議されるのですが、これだけ石油価格が高くなつてくると、ポール・アドマンの「大破局」じゃありませんが、非産油発展途上国で債務不履行、破産状態が起こつて、備蓄以前にそういう面からの不安が出てきはないか……。カラカスのOPEC総会では、ご承知のように、OPEC基金の増額をわずかが行なつた。そういう救済措置のようなものも考えざるを得ないのではないでしょうか。その点、アジアではどうか、



松根宗一氏

富館さんにかがたいのですが……。  
**富館** 東南アジアの国々は、中国も含めて、これからエネルギーを使って経済建設をすすめていこうという時期ですね。しかもそのエネルギーの大部分は石油です。そういうとき日本に求められているのは、経済計画とあわせてどういうエネルギー政策を作つていったらいいか、そのソフトウエアですね。

それから先ほども話の出た日本の省エネルギー技術、それから東南アジアの国に合った新エネルギー源の開発——たとえばバイオマスとか——ですね。この三つの分野で協力をすすめることが、彼らのニーズに合致することだと思ふのです。

**松根** 石油などもこれから日本が開発して輸入するでしょう。石炭輸入等については東洋諸国と共同して開発を考えることも必要だと思ふます。それは八五年に間に合うとか、間に合わないとかの問題じゃなくて、今後の発展途上国問題を考える一つのものの考え方としてですね。

**深海** それは結構です。ただ、そこで問題が二つある。一つはアジアの中でも、最貧国と呼ばれる国々は、石油が使えないからいわゆる「ノン・コマーシャル・エネルギー」（非商業エネルギー）つまりマキとか、動物・植物の廃棄物を使うわけですね。そうすると、たとえば乱伐がすすんで「砂漠化」が起るとか、土地の肥沃度が落ちて食糧生産にひびくとか、そういう影響が出てくる。中進工業国に

とつては石油価格の高騰は直接響きますが、最貧国にとつては間接的な形で、しかしより包括的な形で影響が出てくる。松根さんが先ほどいわれた食糧戦略ともからんでくる問題ですね。

それからもう一つは、何といつても石油そのものをどう安定的に確保するかですね。その点でOPECの国々に対してどういうふうにするにアプロウチしていくか。OPECの生産制限なり石油温存政策を「与件」として考えるのではなく、それ自体を変えていくという発想がないとほんとうの問題解決にはつなげられない。

ですから先進国、産油国、中進国、それにいまの非産油最貧国まで含めて、幅広い国際戦略が必要とされるようになるのではないのでしょうか。

**松根** いまお話の中東、イスラムについての一つの考え方は、パレスチナの国を作るといふことが彼らの一番の、しかも共通した旗印だと思ふのです。これは国連でも方向づけが決まっているわけだし、日本としても、それをどう具体的に促進できるかについて、腰の入った議論をやる時期だと思ふのです。私もときどきPLO（パレスチナ解放機構）の連中とも会うのですが、それが一番彼らの賛同を得る道です。「油乙い」とかなんとかいつたつて、それは商社のやるべき仕事であつて、政治家のやるべき仕事は時代の流れを的確に見抜いて方向づけ、かつ具体化していく仕事じゃないでしょうか。



富舘 孝夫氏

また今後の石油価格の問題ですが、今のようにOPEC諸国がバラバラに値上げ

を勝手にやることは、そう長くは許されないのではありませんか。その標準は代替エネルギーの価格——たとえば原子力、石炭液化との比較です。これも八五年頃までにはほぼ見当がつくのではないのでしょうか。また各産油の価格決定も、物価の高騰率とドル価格変動が基準になるというふうな考え方がそろそろ起りつつあります。一九八五年頃までには形が出ると思われます。

## 「谷間」の戦略

**富舘** これまで主として八五年ぐらいまでの今後数年間の問題をお話しいただいたわけですが、もう五年、十年伸ばして中期的な展望という点ではいかがでしょうか。たとえばエネルギーの供給ということと考えると、先ほど原子力の稼働率の問題が松根さんから出されましたが、原子力発電とかLNGとか、そういう在来型の大規模・代替エネルギーの趨勢を見ていますと、どちらかという目標値

がだんだん下がってきて、悲観的な見通しはかなり強いわけですね。これに対して、あと十年程度で、技術的にも資源的にも比較的問題が少く、供給をふやせるのは石炭しかないように思えるのですが、実はこれがなかなか嫌われ者でして、なかなか取り組んでもらえない……。中期的な展望という点で、いかがでしょうか。

**茅** 水素はそれ自身をつくるためにエネルギーが必要なのですが、かなり大規模なものができる状態だと聞いています。増殖炉なども、廃棄物処理についての合意ができれば、大体十年先には稼働できるのではないのでしょうか。

**深海** エネルギーの「質」という問題があるように思うんですね。というのは、現在の原子力発電でも増殖炉でも大体電力ですよね。そうした非常に質の高い電力を、粗末な、というか効率の低い、給湯とかそういうものに消費している。そうではなくてそれぞれの質に応じた供給の仕組み、そういうものがこれからは必要になってくるのではないのでしょうか。

あと考えられるのは、もっと超長期になると茅先生のいわれた水素ですが、そういう意味では二次エネルギーだけでなく水素経済へ電力を使って転換していく方向も考えられますね。

**松根** これからは重質油などはどんどん軽質化して、使い切った勘定でいくべきじゃないでしょうか。

**深海** エネルギーの質の程度と需要構造

とを考慮した供給システムを、十年先、十五年先には実現していくことだと思うのです。

**松根** それと、やはり私は原子力というものは一〇〇パーセント稼働できるようにもっていく、そのための努力が必要だと思っております。新経済社会七カ年計画の最終年（一九八五年）には少なくとも稼働率が八〇パーセントぐらいになっていく必要がある。止めてみたって、それだけ時間がかかるだけで、施設は何も変らないわけだからね（笑）。

**富舘** 増殖炉の廃棄物処理の現状はどうなのですか……。

**茅** たとえばわずかな廃棄物でも、それをガラスなりコンクリートの中へ封じこめちゃって、三千メートル以上の上、なるべく流れの少ない海底へ持って行って捨てるということに対して、なかなか漁業者の納得を得られない。でも、少しずつは動き出すと思いますよ。

**深海** 稼働すればするほど出てくるわけですから、むしろかいですね。

**茅** ことに高レベルのものの処理技術は、世界のどの国でもできていないようですよ。

**松根** あれなども茅さんと話しているんですが、たとえば一万年放射能があるとすれば、一万年持つハイレベルの貯蔵庫を作ろうとするからむずかしいわけで、三百年なら三百年に限ってそこまでは完全にもつ、三百年たったらまたそれを新しいものに格納していくというように、

段階的なものの考え方をしていくしかないと思うんです。むしろそういうふうにより具体的に考えて研究していかないと、原子力というのはなかなかやれませんね。  
**富舘** 三百年といわず、百年か二百年たてば、人間はだいぶ知恵がたかましますからね(笑い)。

**深海** 結局、現在の問題は、石油から次のエネルギーに移る谷間の問題であって、過渡期の戦略論だと思うのですね。過渡期であれば需要の面、供給の面、それどころからさまざまなアプローチを試みられてしかるべきで、いまお話のあった、百年、二百年で区切って考えていくのも一つの方法だし、また、いま一つは、これは富舘さんも主張されていることですが、どこまで生活パターンを変えられるか、という需要面の変化もあり得ると思うのです。従来の生活水準を落とすことができない、あるいは生活パターンを変えることができないという前提で、困難だ、困難だといっているところがある。

**富舘** 発想の転換ですね。  
**茅** 新経済社会七カ年計画などというものも、ある意味では財政のワクということにとらわれすぎている。借金をゼロにし



深海博明氏

なければならぬという理屈はないわけで、成長する中で借金を払える見通しがあればそれを背負っていても一向に構わないわけですね。

**富舘** 特にエネルギーの開発などというのは、後々の世代にかかわる問題ですからね。

**茅** いわば「先行投資」でしょう。大蔵省の発想というか、何が健全財政であるかということについて、もう少しワクにとらわれない議論を望みたいですね。

**富舘** それとこういふ問題もあります。たとえば政府の新しい暫定見通しをみると、ソーラー・エナジーが圧倒的に多い。ところがいまソーラー・ハウスを買える世帯といたら、物すごい高給取りじゃないと実際買えません、結構高いから。その辺で、もし本当にソーラー・エナジーを普及させようとするのなら、ソーラー・ハウスにしたら税制上の特典をつけるとか何らかの財政措置をつけるということだつて考えられる。一種の誘導政策ですね。そういうお金の使い方は生きてくると思うのです。

**深海** 大分の見学会などで感じたことの一つは、技術者とか、ソーラー・システムを普及させたいと考える人達の頭の中には一種の理想主義があつて、給湯だけじゃなく、冷暖房全部パッケージになったものを、という考え方が強過ぎるよう思うのです。ところが実験段階ではともかく、実用として冷房まで入れるというのはなかなか大変なようですね。

そう考えると、一挙に完全な冷暖房システムを、と考えるより、とりあえず給湯と部分的な暖房に使うとか、段階的な利用というものの考え方が必要ではないかと思えますね。

**松根** しかしソーラーなどは割合伸びるんじゃないでしょうか。この間、土光さん(敏夫経団連会長)のところもやっただけ。そうしたらこんな古い家はだめだつて(笑い)。

ただ、こういうものをやるときには、民間にうんと責任もたせてやるのが大事だね。政府がやる場合でもね。そうすると、その努力を今度は商業化のときにもっと自由に使えます。あるいはパテンを全部自由に使わせるとかね。そういうやり方をすれば、私はソーラーというのは伸びると思えますね。

## 現地部会の教訓

**富舘** ところで冒頭茅先生からお話のあった現地部会ですが、地域社会の発展とエネルギー問題、パブリック・アクセス・プラントの問題等々それぞれ関連し合っているわけですが、その点についてご感想なりご意見を……。

**茅** 他の機会にも話したのですが、私、国鉄の理事をやっておりました、そこで議論になったことですが、例の新幹線の問題で、上越新幹線と東北新幹線が交わる大宮から少し先がなかなか承知しない。

自分達には直接的な利益がない、むしろ騒音公害がふえるばかりだと。そこでどういう対応策が考えられたかというところ、新幹線から枝を出して、そこへ電車を走らせる。そして大宮までの通勤を便利にする。そのための費用が何百億円かかるというので、国鉄の連中、考えこんだんですよ。

**松根** やることになったんですか。

**茅** ええ、やらざるを得ないと。これなどは地域の合意形成をめぐる一つの例示だと思ふのです。

**松根** 発電所の場合でも、それを電気の原価に入れるという考え方が間違っているんです。コストという問題を考えたら、今後どこまでも高い補償料を払えるわけではないですからね。だから、そのためにどれくらい高くなったかを明示して、それ以上は認められないぐらいのことをはっきりさせないと、これは成り立ちませんねえ。

**深海** 回り回ってツケがくるという問題と、個別のエゴイズムの問題と、そこをもう少し考えてみる必要がありますね。それと私が現地部会で感じたことの一つは、われわれは地元を一つという目で見ますが、細かく見てみると、県のレベル、市のレベル、直接地元のレベルと、それぞれ反応というか求めているところがちがう。たとえば金沢で感じたことは、知事さんや県のレベルでは、三千人の雇用確保と北陸新幹線とができれば原子力発電所はやりやすいという。一方、敦賀市で

あれば、そういうマクロのメリットのほかに、原子力発電所があるんだから電力料金をその地域だけ割り引いてほしいというような要求がある。地元は地元でまた別の要求がある。そういうことを考えますと、合意形成と一口にいいますが、どのレベルを対象に何をどうするか、細かく論議する必要があります。

それからもう一つは、ケース・スタディをやってみると、たとえば敦賀の板倉日本原子力発電所所長のように、地元と十年以上ものつき合いがあつて信頼関係ができて上がっている。ハードの信頼より、人間性を合わせた形での信頼関係のほうがより説得力がある、そういう感想も現地部会でえた点です。

## 使う側も 参加する時代

**富嶺** 先日、料金値上げ申請問題で電力会社幹部の方々と意見交換したとき出た話ですが、いまは九電力が大規模な発電所を作り、電気を供給しているわけですが、これからはもう少し考え方を變えて、村とか町で、たとえば小さな水力発電や農作物を利用したバイオマス発電でもいい、そういうものを自分たちでやってみて脱穀機を動かしたり、電灯をつけてみたりしてはどうか。それがいかに高くついて、大変なものかがわかる。そのための技術やノウハウの提供は惜しまないというわけです。これは何も「大変さ」

を押しつけるためにそういうわけではなく、使う側もある程度エネルギー供給政策の中に参加する時代になってきた、ということの象徴的な表現ではないかと思うのです。

**深海** 同様な意味で、先ほど私の申し上げた「質」の問題があると思うのです。すなわち、電力でなくてもいい部門にゼいたく電力を使っているという問題がある。そしてもう一つは、常時電力が不足しているわけではなくて、ピーク時の需要に予備率をプラスし供給することが主要課題となっている。能力の平均稼働率は年々低下している。ピーク時の需要を削減するために、その季節・時間帯の料金をうんと高くするような料金制を採用することも必要でしょう。もちろんそれだけで問題が全部解決するわけでもないし新しい発電所が要らなくなるわけでもないが、こうした努力が需給の両面から問題解決を容易にするために必要だと思います。

**松根** 発電所立地の問題を解決するのに島を作つたらどうだと私はいっているんです。日本では石炭がらを捨てるのに困っていますでしょう。それを国土計画にもとづいて、十年なり二十年なりかけて、石炭がらをそこへ運んで島を作る。ちょうどニューコウベイアイランドのように。いまある陸地だけが土地じゃないということですよ。

それと、石炭を運ぶのに油で運ぶとはどういうわけだと私はいっているんです。

原子力船を使えというのです。ずっと安  
いし、積み地の問題もむずかしくないし  
ね。つまり海のトランスポーターシヨ  
をもっと合理的なものに組みかえる方法  
があると思う。島とか原子力船とか、そ  
ういう思い切った手を打っていかないと  
いまの発電所立地というのは行き詰まり  
ますね。

## 茅部会の八〇年代

**富館** これまでのお話の中で、今後の茅  
部会として取り組むべきテーマも随所に  
出されてきたようですが、最後にまとめ  
の意味で皆さんからご発言を……。

**茅** ずいぶんたくさん宿題が出たね(笑  
い)。八五年を一つのメドにした国際情  
勢や、エネルギーの需給の総点検といっ  
た問題がひとつ、それからこれまで討議  
してきたようなエネルギーの種類全般に  
ついての時間的なメドづけとそれにどう  
いう作戦を立てていくかという問題がひ  
とつ、それとパブリック・アクセプタン  
スの問題がひとつ……。

われわれ四人でもこれだけですから、  
部会メンバー全員でテーマを出し合った  
ら、それこそ大変なエネルギーになるね  
(笑い)。

**深海** パブリック・アクセプタンスの間  
題で過去の経験で感じますことは——こ  
れは国際情勢の見方の問題でもそうす  
が——なぜ合意形成ができないか、その

理由の一つは、専門家の責任だという意  
見がありますね。つまりAの人は安全だ  
といい、Bの人は不安があるといい、C  
の人はまた全然違うことをいう。これ  
は合意形成といっても覚束なくなるのは  
当然で、「どう評価するか」についての  
合意形成が先だという見方もある……。

**茅** 同様に「聞く」側の知識や経験もそ  
こにかかわってくる。地域社会の合意形  
成については五、六年前、日本総合研究  
所ですぐれたレポートが出たことがあり  
ますが、そういったものをもとに、新し  
い視点を加えて、一度それだけでヒヤリ  
ングする必要がありますね。

**富館** エネルギーについては八五年——  
八五年だけとはかぎりませんが——に向  
けて、優先度とタイミングをいくつかに  
わけて具体策を練る必要がありますね。

**松根** 私が八五年というのは何も油の節  
約の問題だけではなく、富館さんが先ほ  
どちょっと出された石炭の問題、それに  
石炭液化の問題にしても割合早いと思う  
んですよ。そこで何年後にこうするとい  
う計画がはっきりしてくると、国民の不  
安も少くなるし、産油国政策など対外的  
な面でも一つのメドづけができてくる……。

**富館** いまはそれがはっきりしないから  
計画もおお、おかしくなる。

**松根** ずるずると延びのがこわいです。  
間に合う、合わないの問題じゃないので  
す。

**深海** この部会というのやはり、最初

にもふれましたように二正面作戦だと思  
うのです。一つは総合的判断というか、  
戦略を考えたり、そのためのアイデアを  
出す場である。そこでは富館さんもおっ  
しゃるとおり、時間との組み合わせで一  
定のウエイトづけが考えられる。いずれ  
もリード・タイムが長くなっていますか  
ら……。

**松根** 選択ということが必要になります  
ね。

**深海** 少くともその判断を下せるだけの  
戦略とか基準のようなものを立てる必要  
がある。もう一つは松根さんが強調され  
るように、具体的に一九八〇年代を乗り  
切る、あるいは八五年を乗り切る具体的  
な戦術論ですね。その意味で私が最近注  
目しているのは、ソ連のアフガン侵攻に  
対するアメリカの対ソ報復措置として、  
食糧問題について、いわゆる石油開発関  
連機材の輸出停止ということを打ち出し  
ていますね。そうなるとソ連が石油問題  
でますます追い込まれてそのハネ返りが、  
八五年に近い時点でどうなるか、少く  
もそのあたりまでを視野に入れて対米外  
交を行うべきだと思うのですね。

**松根** 私が八五年までの問題で一番注目  
しているのはサウジアラビアです。アメ  
リカがこれに対してどういう手を打って  
いるのか。日本としてはそこをはっきり  
つかんていないと困るんだな。ただやみ  
くもに備蓄をふやしても……(笑い)。

**富館** 国際情勢の討議が早くも始まった  
ようですが、今回はこれぐらいで。

# 経済協力と社会的価値観

## 日印経済協力の場合

中根千枝

(東京大学教授・東洋文化研究所・中山伊知郎部会)



### 極端なコントラスト

世界におけるさまざまな国のなかでも、日本とインドほど、生活全般のリズム、ものをみせている例はないと思われる。このことは、一般に日印相互の理解が十分でないために、一層両者の距離を大きいものにしていく。したがって、実際に日本人がインドで仕事をするということは容易ではなく、さまざまな予期しない問題に遭遇し、それらを取りこえるためにその衝に当たる日本人は相当なエネルギーと時間を費やすことになる。英国人や東

南アジアの人々であったら、殆んど問題にならないようなことでも日本人にとっては大変な苦勞の種となったりするのである。

しかし、反対に、インド人が日本にきて仕事をする場合はどうであろうかと考えてみると、インド人も同様に日本の社会についてはよく知っていないわけであるが、日本人がインドで苦勞するほど苦勞しないのではないかと思う。それは、インドの社会というものが驚くほどの多様性をもっているのに対して、日本の社会は驚くほどの均質性をもっているためと思われる。インド人にとっては、日本は

もう一つの異なる社会であるのに対して日本人にとっては、インドは全く異なる社会となるから、異質の人々になれている前者の方が基本的な適応は容易であるに違いない。事実、私の限られた範囲でも、在日のインド人たちに、在印の日本人にみられるようなひどい驚き、困惑、偏見を見いだすことができない。こうしてみると、日印の対応において、小さな島の均質な文化の中に育ち、仕事をする事になれてきた日本人の方が、どうしても *initial stage* においては大きいといわざるを得ない。

日印の文化がそれぞれ違うということ他に、日本の文化、社会が世界のなかでもきわめて特殊なもの——それは均質であるということ自体にも大きく関連しているのであるが——であるために、インドの固有性と一層強いコントラストを示すものといえよう。往々にして日本人は自分たちの特殊性を棚上げして、インドは最もむずかしい国だと思っているし、また実際にインドになじめないでいる駐在員も多い。しかし、このことは、必ずしも日本人がインド人と共に仕事をすることが最も困難であるということではない。むしろ、大変うまくいっている例が少なくないのである。

## 注意深さがプラスに

数年前 私はシンガポール、マレーシア、タイ、インドにおける日本との合弁会社や日本の技術指導が行なわれている現地の諸会社の実態を比較調査したことがあるが、これらのなかで、日本人と現地側がうまくいっている度合<sup>1</sup>において、インドのケースが最も高かったことは、私自身発見であった。この理由としては、さまざまな要因が考えられるが、その一つは、両者がおたがいに相手をよく知らなかったために、双方から非常に注意深いアプローチがなされたことである。日本側にとっては、さまざまな試行錯誤がくり返され、それまでには他の諸国であ

つたらみられないような担当者の努力と時間が払われている。インド側にとつては、日本人の専門家と接するということは、一つ一つが新しい経験であり、技術指導そのもののみでなく、専門家のごときの反応に対してきわめて注意深い思慮が払われている。たとえば、どのようなときに日本人専門家は満足するような顔をするとか、機嫌が悪くなるとか、アルタネイティブを出すことよりも、最初にきめた方針をどこまでも貫ぬいてやろうとする傾向がどの人にも強いとか。私は彼ら

■本稿は七九年十一月、インドのニューデリーで開かれた日印調査委員会・合同会議における中根教授の講演要旨をまとめたものである。

「日印調査委員会」は日印両国間の交流を目的として設置されたもので（日本委員会委員長・法眼晋作氏）、一九七八年十月東京で開かれた日印両委員会の合同会議で、両国の経済関係促進のために日印両委員会が協力して調査研究プロジェクトに取り組むことを決定。日本委員会としては経済協力の円滑な遂行に深いかかわりのある「もの考え方」のちが<sup>2</sup>について、小規模なケース・スタディをもとに調査研究し、同時にインド側においても同一テーマについて調査した上で、合同会議において双方の調査結果を共同討議することとなった。

日本委員会は、①ヴィザガパタム鉄鉱石積出港建設、②インド旭硝子株式会社の経営移転、③東洋エンジニアリング株式会社の肥料工場建設、④シチズン時計株式会社の技術移転の四ケースをとりあげ、それぞれ調査レポートを作成するとともに、

から、日本の技術者たちについての観察や感想をきいているうちに、それは丁度、インドの農民が自分たちの大切な牛について語っているような感じがしたものである。日本の技術者のなかには、よく英語の話せない者もあり、言語による交流が十分ないため、一層インド人の相手に対する観察、思いやりがこまやかになるようであった。こうして具体的な技術指導をお互いに信頼関係が生まれ、大変成功している例が、とくに日本人が技術者である場合には多くみられるので

に、こうした経済協力の背景にある「日本とインドのもの考え方」について中根教授のコメントを求め、あわせてニューデリーの合同会議で発表することとなった。

中根教授の講演要旨は本稿に掲載したとおりであるが、「世界の中の日本」をテーマとする中山部会は、過去日本の国際化について、六回の部会を重ねてきたが、八〇年代に予想される本格的な国際投資時代を前に、日本とその社会的価値観・社会構造が「極端なコントラスト」（中根氏）を見せるインドとの経済協力問題の解明は、今後の経済摩擦問題を考える上で、さまざまな示唆を与えてくれるものと考えられる。中根教授および日印調査委員会・日本委員会のご好意を得て本稿を掲載する所以である。

なお文中、脚注(1)（56ページ）にある「諸報告」とは先の四つのケース・スタディについての報告を指し、ここでは割愛した。また見出し等は編集部がつけたものである。

（編集部）

ある。

もう一つの点は、インドにおいては、東南アジア諸国などに比較して、高等教育を受けた層が厚く、質のよいマネジャー、訓練が効を奏する技術者が必要に応じて得られること、また余剰労働人口が多いために、比較的質のよい労働者を得ることができるといふ好条件に恵まれていることである。もちろん、地方差もあつて、たとえば、諸報告のなかでインド旭硝子の場合、「工場周辺から採用したワーカーが多く、その七〇%が文盲で近代的工業の労働者としては出発点の教育水準が低すぎた」とあるが、この会社のあるビハール州のランチ周辺は、インドでもいわゆる tribal area と称される地区でヒンドゥ社会の周辺的位置にあるもので、全体のなかではむしろ例外的におくれた地域である。これに対して、南インド、バングロールにあるシチズン工場では、報告にもあるように非常に質のよい労働者がえられていた。私自身もこの工場を見学したことがあるが、一つ一つの工程においてもその質のよさがうかがわれたし、日本人技術者からもそのことを立証する意見もきかれたのである。

インド全体としてみると、やはり、現段階では質のよい技術者ならびにその候補生、労働者は充分得られるということができ、このことは何といつても、日本人の技術指導にとって仕事のしやすい対象であるということができる。ニューデリーやカルカッタの日本の駐在員などが

らは、往々にして、インド人のマイナス面がよくきかれるものであるが、工場に実際に技術指導に当たっている日本人技術者のインドのカウンターパートに対する評価は非常に高く、この点は私自身実際に現場を訪れてはじめて知ったことであつた。これに対して、日本人の駐在員で上部のポストが占められている都市のオフィスでは、インド人が従業員として日本のシステムにおいて従属的な位置づけにあり、技術者の場合のように一つの仕事を媒介として日本人とインド人が一対一で対応するというシチュエーションがないために、日本人のインド人観も異なるものと解釈できるのである。

とにかく、技術指導を主体とした在印の合弁企業の場合、現地に人材がえられるということは、日本側がインド側を尊重することにのみならず、他の開発途上国でみられるような、日本人のやり方を一方的におしつけるというような危険性を防ぐことにもなっている。東南アジア諸国では、日本式のおしつけに対する苦情が現地従業員から相当きかれたのに対し、インドではそれが殆んどなかったということはこのためであると思う。また前述したように、日印の文化的距離が大きく、両者が接触になれていないために、両者のアプローチが注意深くなっていることが却ってプラスに働く点も指摘できるのである。たとえば、シンガポールでは、中国系が大多数を占めているために、日本人と文化的近親性があるということが却ってわざわざ

いし、日本人側が現地人との接触において、どちらかというところ *careless* になっており、現地の従業員から日本人スタッフに対する苦情が最も多くきかれたことなど、インドのケースと対照的である。

## インド的 職務分担主義

以上のように、日印協力というものなかでは、技術者、労働者、個々人の対応という側面では、基本的に問題となるような要素は殆んどないと考察できる。しかし、集団における個人の位置づけ、全体のシステムの運用のあり方となると、日印の違いは極めて大きくクローズアップされてくる。これは、それぞれの伝統的な社会的価値観、社会構造を反映するものであり、実際の仕事の運び方を規制してくるものである。そして、これは日印ともに容易に譲歩できないものであるところ、困難があり、とくにインドで仕事をする日本人を悩ますものである。

第一に指摘できることは、日本の集団主義とインドのカースト制に象徴的にあらわれている職務分担主義とでもいうものである。近代的な工場のシステムでは、どの国においても基本的に共通なシステムがとられており、上下の権限、職務分担はあるものの、実際の運用面 (operational system) においては相当の差が出てくるものである。日本式においては、一つの仕事を達成するということが目標になり、

その目標に向かって参加する全員が一丸となつて仕事をすすめていくというものである。もちろん、各人がそれぞれの職務を遂行するが、必要とあれば、臨機応変に職務分担、役割分担の壁を破つて協力するというのが常識となつてゐる。したがつて、各人は隣接する部署の仕事に対して相当 familiar であり、必要とあれば、それを行なうことが容易な体制にある。このことは、各人が自己の役割をもつてゐると同時に、その仕事の達成に必要な他の人々の役割、仕事に対して相当な知識をもつてゐるばかりでなく、関心が高く、いざとなつたら代行する用意が常にあるということが出来る。

これに対して、インド方式は、各部署の役割、仕事内容が厳密に規定されており、それぞれ各人はきまつた仕事を常に担当するという事により全体が機能するようになつてゐる。このように、各人が各々の守備範囲を守ることが基本盤となつてゐるシステムでは、たとえ隣接している者の仕事ができるとしても、自分のきめられた仕事以外のことをするということは、論理的に考えても全体のシステムに対する妨害となる。これはカースト制の基本理念に *hierarchy* されてゐるもので、この社会組織に伝統的にのつとてきたインド人たちにとっては、その行動様式、考え方の基本となつてゐるもので、新しい技術をとり入れた近代的な職場においても当然生きつづけられているものである。

この日本式とインド式の両者を比較してみると、前者は目標達成へのスピードにおいてすぐれ、後者は長期的なコンスタントな生産を維持していくという組織としてすぐれているといえよう。とくに日本の場合には、その高度成長が、不十分な資本で金利の高い借入金に依存するということが常態化してゐたことと、民間の同種の企業間の、世界にも類例をみないような国内競争という条件のもとに行われてきたために、目標達成、工期短縮のための努力が何よりも優先されたために、日本式スタイルが一層拍車をかけられて、今日の企業人、技術者、労働者の性格を形成したものと見えよう。このよ

うな社会的・文化的土壌に育成され、それが当然のこと、あるべき姿と信じて疑わない日本人が、インドで技術指導あるいはその他の協力の仕事に当たるといふことは——それもインドに関する社会的知識をもたずに——当然さまざま問題に直面することになる。

両者の違いは、その背後にある価値観というか哲学につながるものであり、実際には、仕事のやり方、優先順位の決定 (priority) などにおいて、きわだつた対照を示すものである。実際、四報告もにこの点にふれており興味深いものがある。

「日本人技術者がインド人の訓練上頭を痛めたのは、日本と同じように、労働者が自分の持場だけでなく、前と後の工程につねに気をつけて、工場全体の効率が上がるように仕事をするのであった。しかし、このようなインド人ワーカーの訓練は一種の意識革命で短期間で改善することは無理であつた」(インド旭硝子)。「自分の持場がうまくいってさえいれれば他の所の原因で、全体の生産が上がらなくても、ほとんど関心を示さない。たとえ関心があつて口に出しても、手は出さない。全員で協力して、一つの事柄に向つて努力するという傾向がみられない」(シチズン時計)。「インドの組織形態は……個人の役割りと責任区分が細分されている。……各人は与えられたことさえ充分に果しておれば、一応その任務・責任は果したことになる。しかしながら決められた procedure のものでも、いわゆる routine 作業、例えば、ファイリング、倉庫管理業務などは極めて忠実にとり行なう」(東洋エンジニアリング)。

また、インド的職務の細分化は従業員を多くする一因でもあると旭硝子は報告している。すなわち、「日本では溶接作業は溶接工一人ですませるが、インドでは溶接工具の運搬人二人と溶接の前処理作業をする *helper* 一人が必要で、計四人も雇用せねばならない」という。同様な指摘は、私自身コーチンの日印合弁企業で電球の工場を見学したときにも日本のマネジャーからなされたところであつた。彼によれば、工員に仕事が終わつたあと、ガラスのかけらが散らばつてゐる自分の使用する機械のまわりの床を掃除するようにとどんなに説得しても、それはスイ

パーの仕事であって、自分の仕事ではない、といいはり、一年間頑張ったが、とうとう負けました、とのことであった。

日本の工場作業のあり方は、各々の作業そのものだけでなく、その場が一つのコミュニティといった意味合いももっているため、人としてのあり方、仕事をする姿勢というものが問われやすい。したがって、わが社の工員はかくあるべきものといった、たんなる技術担当者、労働提供者といったもの以上のものを含むのが常である。従って、一つの機械を担当する工員は、その機械の掃除はいうまでもなく、その仕事によって散らかった床をきれいにするということは当然のこととされている。インドの場合は職種別の観念が極度に発達しているので、旋盤工などが床を清掃するということは誰も考えない所である。旭硝子の報告によると、長年の教育の結果工員が自分たちの手で床を清掃するようになった、とあるが、これはさぞインドの工員にとっては大変なことであつたらうと推察される。これは技術指導（移転）というものが単なる技術面にとどまらず、社会的価値観というか社会生活の信条にもかかわってくる問題であるということを象徴的に示している例である。

## 帰属意識と

## 雇用システム

同様なことは、日印の職場に対する観

念の違いにもあらわれている。東洋エン지니어リングの報告にもあるように、日本人から見ると、インド人たちは「会社への帰属性が極めて薄い」。旭硝子の報告には、「ワーカーのみならず上級スタッフも会社に対する忠誠心、所属意識が乏しい。ワーカーにしろ上級スタッフにしろ、個人あるいは家族の生活中心の行動をし、会社の仕事は副次的とみなしていた。したがって、日本人のモーレッツ社員意識やモラルの高揚を要求しても、生活や社会基盤が全く異なるため、一朝一夕にはいかなかった」とある。

この日印の対比は、世界的にみると、むしろインドの方が普通で、日本人のように会社を自分の社会生活のなかで最も重要な場とみなし、日常生活において何よりも優先して考える例は他にあるだろうかと思う。したがって、この点では、日本側がインド側に順応すべきであることはいうまでもない。日本人のマネジャーや技術指導者は、どの国に行ってもこうした日本的なあり方を求めやすいのであるが、インドに限らず、東南アジア諸国その他の国々ではそれは無理なことである。

これは、日本の雇用というものが一度就職すると定年までその会社にとどまることを会社の方も従業員の方も当然のことと考えており、また大多数の従業員が実際定年までとどまるという事実を前提として生まれるあり方といえよう。このようなケース（個人はめつたに会社を変

わらない）がどの分野においても普通であるという近代社会は極めて稀なものであろう。日本人としては、この日本のあり方はきわめて特殊ケースであるという認識をもって海外で仕事をすべきである。日本人にとって会社が変わるということは、社会人として、何か欠陥があるか、そうでなくとも不自然なことという常識がある。そして、実際、長年つとめていた会社から他社に移るということは、たとえ収入が増えたとしても、さまざまな社会的マイナス——人間関係の上で——を負わされるものである。

シンガポールで合弁企業を視察したとき、日本人スタッフとローカルの従業員から期せずして興味深い指摘をえた。それは、前者から「彼らの気持はわからない。一度やめておきなながら、しばらくたってまた雇ってくれなんて平気でいつてくるんですよ！」ということであり、一方、中国系従業員は、私に「日本の会社は一度やめると、もう二度と雇ってくれないんですよ。どうしてなんでしょね」ときくのであった。

また、インド旭硝子の話であるが、すぐれた従業員を選抜して何人か日本の旭硝子の工場に研修に出した。これは日本人に代わって将来インド旭硝子を背負っていく要員とする意図で行なわれ、日本人の気持としては、こうした恩恵的な取扱いに感謝し、選ばれたことに誇りをもって、長くインド旭硝子で働いてくれるに違いない、ということであった。し

かし、彼らのうち何人かはこの日本側の期待に反して、帰国後一年を経ないで他のより多く給料を出す会社に移ってしまったのである。これは日本の会社にとっては大きな驚きであった。同様なことは、他の合弁会社にも少なからずあり、多くの会社では、これにこりて、研修後は何年間も他の会社に移らないことという条件をつけるようになった。これに対して従業員側は個人の自由を認めないと相当な不満をもっていることを私は実際にインドで少なからず耳にしたところである。

長年勤務の優秀な従業員をもちたい、というのは、日本のあらゆる会社の願いであり、海外の現地従業員にも殆んど例外なく適用されているが、これは大きなマイナスとなるものである。長年勤続ということが重要な要素になっているため、賃金も年功に大きく規制されてくる。従って、このシステムでは高給をもって優秀な社員を迎えることはむずかしくなるのである。そのために、優秀な社員を子飼いのなかから育てていかなければならない。しかし、転職ということがきわめてノーマルであるインドその他の国々では、これは容易にできることではない。下手をすると優秀な社員は他にひきぬかれ、どこへも行けないような社員ばかりをかかえこむということになりかねない。他に競争者がなく、供給が需要を大幅に上まわっているという条件ならば、日本の方式でもやっているとあろうが、そうでなければ海外（日本人以外）には向

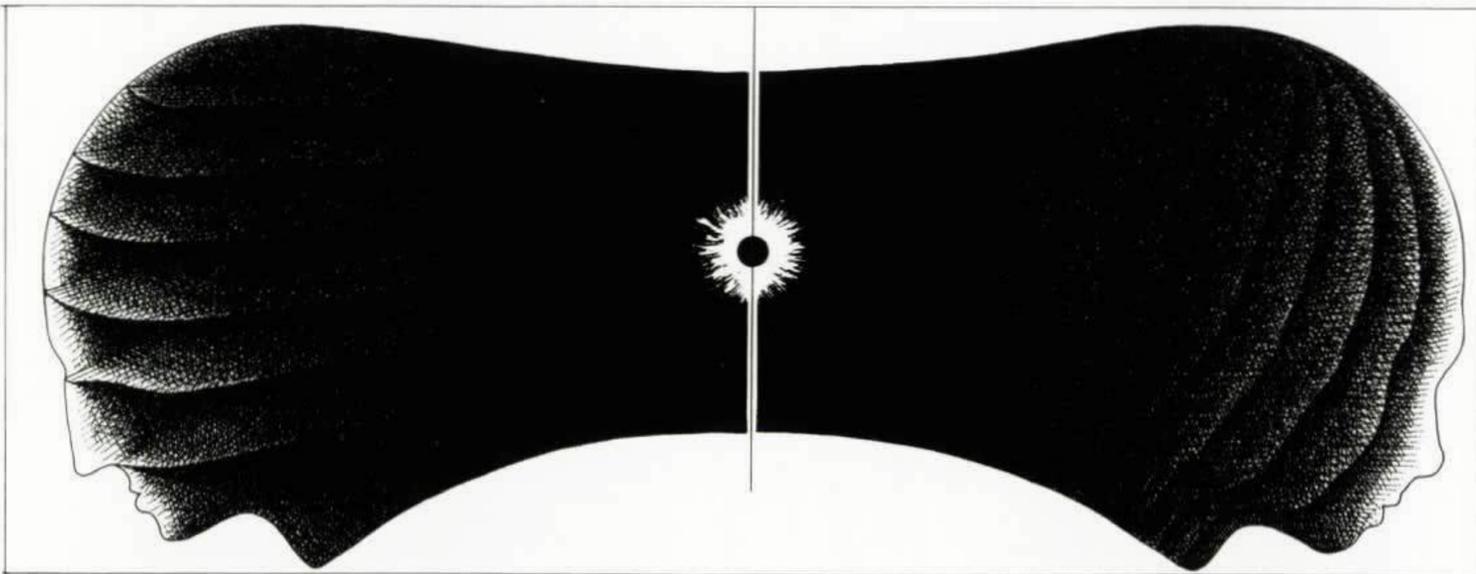
かないシステムなのである。

## 「遅れ」に 寛容な理由

以上のように、雇用システムならびにそれを支えている社会のあり方が非常に

異なる場合は、労務管理はその従業員と同じ社会の出身者にまかせるべきであろう。日本の進出企業で日本人スタッフから労務管理の苦勞はよくきかされる所である。ストライキの回避に極力努力したという旭硝子では、現地人の労務管理は現地にまかせる方針を早くからとったと記していることにも注目したい。日本人従業員が大多数を占める日本にある外国の会社の殆んどが、日本方式を採用し、労務管理には日本人を当てているが、これと同様なことが日本の海外企業の場合にいえると思う。したがって、以上の問題は「郷に入っては郷に従え」で日本側の譲歩すべき問題であり、また、インドの方が日本よりも特殊でないともみることができるのである。

最後に、これら四報告を読んでとくに注目されるのは、インド側が日本側からみて「project」の作成における理論的討論 process そのものには非常に興味を示し、時間をかけるが、project implementation についてはあまり興味を示さない」ということである。「これに対して、日本人はどちらかといえば、現場重視である」(東洋エンジニアリングの報告に最も詳しく出ている)。このことは前述のインドにおける強い職種別意識にも関連している。計画作成に当たる者と現場で実際働く者(技術者、労働者)が全く別の範疇の者となってそれぞれが自己完結的な世界を作っているためである。これに対して日本の場合には、これらすべての者が同じ会



社の同じプロジェクトにとりくんでいる仲間としての意識が職種の違いより強く働くこと、関心がより implementation に向けられていることが指摘できる。また、日本では一般に、現場担当者の強み（自信、誇り）というものがあり、より教育水準の高い技術者が経験豊かな現場の人に遠慮する事態さえみられるほどである。このようなことは、プロ意識、職制が何よりも優先されるインドではありえないことであろう。このように、日印ではその operational system が大変違うことが指摘できるのである。

短期的にみると、日本のシステムは目的達成へのスピードを早めることができ、インドのシステムは「遅れ」を招きやすいということができる。このためか、インド人は「遅れ」に対して寛容である。実際、これら四報告が同様に強く訴えていることは、日本人には耐えられないような工期の遅れを来す諸要因が、インド側にあることである。そのなかには、政府の政策、開発の哲学によるもの、インド全体のマーケットのあり方にも基づく発注決定のシステムによるもの（これらについては、インド鉄鉱石輸出プロジェクトにおいて詳しく述べられている）などがあるが、工場作業のプロセス自体にみられることが指摘される（シチズン時計の報告に具体例があげられていて興味深い）。諸報告はいずれもこの点に触れ、なせもつと隣接している部署の者たちが気をきかせて動かないか（いかにも日本

的見方である）といっていないながら、結局そうした日本的やり方に対するインド人たちの抵抗——これはインド人個人によるというよりは、インドの伝統的価値観を反映する社会構造に根ざすものである——を認めざるをえない結果となっている。

## インドにはインド式の工業化がある

これらの貴重な経験をとおしてもいえることであるが、ここで重要なことは、日本式をインドに適用させようとするのではなく、インド自体の構造を前提として、どうしたらより生産性を高めるかという方途を考えることである。インドにはインドのやり方があってしかるべきである。それがうまく近代的な場で機能すれば、日本方式にはない長所もあるに違いない。実際、日本でも、西欧の技術を取り入れたとはいえ、一見西欧方式からみると後進的と思われたような日本式のやり方で工業化をなしたいたのであるから、インドにはインドの工業化の方法がある筈である。社会とは驚くほど保守的な性格をもっているものである。

日印間の協力において、これら諸報告にあらわれた限り（これら四社の経験は決して特殊なものではなく、むしろ、日印の仕事の上で起りうる典型的な問題がよくもられている）経験をとおして両者の理解は深まり、質のよい協力が可能であ

ることを示唆している。それと同時に、日本側がどうしても日本式のやり方をパターンとして、それにインド側を近づけようとする意図が強すぎる（善意であるにせよ）ことが指摘できる。そのために実際にその衝に当たった日本人スタッフは大変な苦労をしたに違いない。これからは、むしろ、インドの基本的やり方といったものを前提として、それにそつてどう改善すべきかを考えるべきであろう。しかし、インド方式による工業化というもの、インド側自体、まだ十分研究されていないのではなからうか。欧米と大変な日本方式によって工業化を行った日本側が、第三のインド方式の工業化に寄与できるようになったとき、日印の協力は本当に成果をもたらすことができるものと私は考える。



A POINT OF VIEW

---

# 時間

---

須田一政



## 戦争体験から 文化交流を志す

村上 わたしは自分の仕事を、いわば、日本文化のセールスマンだと思ってやっています。それは三〇〇年、四〇〇年と世界を支配してきた欧米文化のなかの人たちが日本文化をもっと知るってということが、世界の平和につながるし、また人生を豊かに

した。

村上 どの辺ですか。

佐藤 お城のすぐそばだったんです。

村上 じゃ、ほんとに爆心から、いくらも離れていない。

佐藤 跡形もないという言葉そのまま、お城の石垣が真っ白だったですものね。

村上 いまでも色が違ってますね。

佐藤 広島ではないけれども、焼夷弾で焼かれて逃げた一人のお母さんが、ひよつと気がついたら背負っていた子供

アメリカの悪口いってたのに、きょうからアメリカの民主主義とかなんとかいつて髪をのばしだす。非常に疑問を感じましたね。

上から押えられた一方通行的な文化の理解ではなしに、国民同士の理解が大切なんじゃないか。何か子供心にそのことを強く感じさせられました。ですから将来はそういうふうなことをしたいと思ってこの仕事に入ったといういきさつがあるんです。

村上 小さいときから古典的なことを？

佐藤 勉強してましたけれども、古くさいという気持ちもあって西洋的なモダンアートやバレエに進んだんです。しかし、またここで疑問を感じましてね。というのは、こんなことしても結局はマネて終わるんじゃないか。むしろ本格的に日本人であるべきだという気持ちが強くなって、また伝統文化の勉強を始めるようになった。当時は、若い美術の学生で、しかも男で、遊びじゃなしに日本の古典を勉強してやろうという人がいましてした。ですから稀少価値的に優遇され、家元の身近にいながら家元制のいいも悪いも含めて古典芸術の真髄を勉強させてもらう機会があったわけです。

学校を卒業してから、同級生にもきてもらって「龍生美術院」とかなんとか大きな名前をつけて、鎌倉に塾を開きました。

村上 それは、主に絵のほうですか。

佐藤 お花、お茶、日本舞踊、墨絵、お

# 青い眼に映った日本文化の「形と心」

その理解を促すもの阻むもの

する、という考えです。

佐藤さんはアメリカで日本の文化を直接に教えておられるわけだけでも、そもそも何かきっかけがあったのですか。

佐藤 やはり戦中戦後の幼年期に感じたことが、ぼくの現在に影響を与えています。集団疎開で行った先々で爆撃や機銃掃射にあつたし、ことに父親の出身地が広島だったものですから、戦後すぐに広島市で父の実家の家族を探すために、あのどまんなかをひと月ぐらいうろつきま

がない。泣き狂って、燃えてる町のなかに飛びこもうとしてる母親をみんなが押えているのを子供心に見ていて、非常にむなしなことと思いました。

また、鎖で数珠つなぎにされたアメリカ兵の捕虜を目撃したとき、ぼくら一般大衆は彼らに敵愾心は感じなかった。かえって、かわいそうにという言葉が口から出るんです。そういう経験があつて、ま、日本が敗けたとなると、ぼくの小学校の先生なんかきのうまで坊主刈りてア

習字というようにみんなやっていたんです。そのうち横須賀の基地が近いものですから、アメリカ軍の将校が出入りし始めて、その将校たちに日本文化を紹介するクラスを持つようになり、そこに奥さんとか家族がくるようになった。ですから、ぼくは若いうちから日本美術と西洋美術を両方勉強できたし、ことに日本の美術、文化を西洋人の美観とか立場から見ていく感覚ができたことは、非常にありがたいことだと思っています。

## なぜお茶のコースがポピュラーなのか

村上 なるほど。七、八年そういうお仕事をされて、イリノイに行かれたのが一九六四年と聞きましたが、きっかけはやはり塾ですか。

佐藤 ええ。イリノイ大学の舞踊科の主任教授が、日本のトータルアート、つまりそれぞれのジャンルに分化しているんじゃないなくて、横に繋がっている日本の芸術に興味を持って見学にこられた。非常におもしろい、うちの大学で教える気はないか、ということと呼ばれました。ですから、イリノイに行くときにはお茶の道具、お花の道具、踊りの衣裳から小道具など合わせて五トンの荷物といっしょに貨物船でした(笑い)。その最初の目的を一五年かけて進めてきたわけです。

村上 初めから複数の講座でしたか。  
佐藤 初めは日本芸術講習と

いう名前で芸術学部の美術科にクラスが設けられました。一学期一六週間、約三〇回の講義です。それを一〇回ずつに分けて、まず習字、墨絵、つまり二次元空間と線の感覚といった日本の美術の基本的なことを最初に紹介する。次に三次元の生花にいくんですが、それもただお花を生けるんじゃないに、生花の背後にある自然の法則、あるいは風情のような日本独特の感覚を伝えていく。そして日本の美術、文化全般にある禅的なもの考え方を実践美学的にわからせるために、終りにお茶を取り上げたわけです。

しかし一六週間でこれだけやろうと思うと表面的に終わってしまう。そこで一つずつ分離し、今度は習字と墨絵で一学期間やることになり、あとお花とお茶という三コースに分離しました。そのなかでお茶のコースが一番ポピュラーというんですか……。

村上 その辺わたしも興味を持つところで、一般的な感覚でいえば、おそらくお花が一番ポピュラーでしょう。盆栽がブームになっていくように形がすぐわかっておもしろいと思うけれども、なぜお茶なんでしょうか。

佐藤 まずその雰囲気ですね。心が落ち着くやわらかな日本室のなかで行われる授業、そこに興味を起こすことが一つ。

それと、お茶のクラスの講義のときに、昔ぼくらが修身の時間に習った儒教的なもの考え方、禅的なもの、それを「一期一会」とか「和敬静寂」といった一行

ものの掛軸をとおして話をするんです。それは、彼らのいままでの経験にないことなんです。教会ではイエス様のありがたい話を聞くかもしれないけれども、神様の名前を全然使わずに、人間の基本的な道徳性といったものを訴えて彼らにわからせるには、お茶というものは非常にありがたい。

何か、親父やおふくろから聞きたいんだけど、家ではそんなことは全く聞いてくれない。話をしてくれる人がいない。だからお茶のクラスに出ると、自分の心の蓄えになるんだという意味でポピュラーになってくる。

## 日本式「朝礼」とアメリカ人従業員

村上 そこがおもしろい。全く話が違ってたけど、いまTBSで夜の十一時半からやっているアメリカ現地のインタビュ―番組で、きのうちようど京都セラミックの工場が出ていました。

佐藤 ええ、サンデイエゴの――。

村上 日本と同じように朝礼をやっているアメリカ人の従業員が映っていました。喜々として……。ひよつとすると、ああいうことは彼らにとって新鮮で、働きがいを感じさせるひとつかもしれない。日本人はヘンに勘ぐって、強制はいやだろう、迷惑だろう、というけれども、彼らとしては素直に楽しく、こういうシステムは受け取っている。お茶と直接、関係は

ないにしても、日本人はあまりにも、彼らにはわからんだろうというすぎる傾向があるんじゃないですか。

**佐藤** ぼくはよく、それは明治時代の延長だというんですよ。日本の官公庁の方針にしても、いまだに西洋文化に迎合するという明治以来の風潮が強すぎる。この辺で日本人が日本のよさをまず自覚して、それをいい点、美点として向こうに持っていく。そうすると向こうは喜ぶと思うんですね。

いま日本は物質的で、エコノミックアニマルとかなんとか悪口いわれてますけど、その反面、精神文化の豊かさがあるので、これまで極端に敵対視されずにきているんじゃないですか。あるいは、日本に一目置くというか、それを逆に持ち出していけば向こうは日本をもっと理解して、喜んで交わってくれると思います。

**村上** それは、わたしも同感です。

**佐藤** その意味で、ぼくの大学の副学長が「佐藤教授はわれわれが大学教育のなかで一番推し進めたくて出来ないでいる道徳的なことをやってくれている」というんです。「われわれがそういうことをいうと、まず学生たちは反発して聞こうともしない。が、君はエキゾチックな日本のお茶なり禅なりのデコレーションを使って、人間性の基本的なことを教えてくれている」と。そこにぼくのコミュニティサービスの意義もあると思うんですが、それだけにまたむずかしい。普段もお坊さんのように生活していませんと、あんな偉

そうなこといつてくるくせにあそこで飲んでた、なんていうことになる困るんです(笑)。

**村上** それはパイオニアの苦勞ですね。カメラのオリンパス・ペンに勤めているわたしの友人がヨーロッパ・オリンパスの社長を八年やっただんですが、初めドイツ人を使うのにたいへん苦勞して、日本からくる社員にたいして細かな生活規則を作った。アウトバーンは一〇〇キロ以上とばすな、恋愛はご法度、……反発はあったけれども、しかしそれが崩れると、結局日本人にたいする信頼、心服が崩れてしまう。とにかく創業期にはそんなリゴリスティックな自制もある程度必要なんです。成功しようと思えば。

異国でいっしょに生活すれば、いろんなところで文化のパターンがく違いうし、なんだ、あれは“という日本人のやり方にたいする反発が絶えずあるわけですから、それを引っ張って、やはり偉いと思わせるには、それなりの努力が必要でしょう。

## まず日本人の特性のよさを生かすこと

**佐藤** 国民性の違い、人格の違い、そのいい面を押し出すといえますか、向こうに同化することをむしろ考えないで、日本人の特性のよさを生かすことが、ぼくはたいせつだと思う。ことに、これから国際的になっていけばますますそうでしょう。

よう。

**村上** そう。いまの話で、彼がヨーロッパ・オリンパスを始めるときに最後までドイツ人のマネジャーと意見が合わなかったのは、この会社は原則としてレイオフをしない、という点だったそうです。向こうはそんなバカな、経営はできないと最後まで抵抗したそうですが、とにかく最終的には社長方針だといって押し切った。

結局それは成功したのですが、彼が日本に戻ってから数年後、そのマネジャーに再会したとき、「あなたのいったことは正しかった」といわれて大変嬉しかった、と述懐していました。現在はアメリカの創業社長をやっていますが、いずれ日本の経営を徐々に入れるつもりだ、といっていました。

会社をはじめたときも、アメリカのボーンスはクリスマスの一週間分が常識なのを、いきなり二週間出したところ、みんな喜んで社長室に挨拶にくるといいます。

**佐藤** その点、向こうはオープンですかね。

**村上** なかには感極まって泣きだした男が三人もいたという話です。会社の経営でどこに、どれほど、日本的な要素を入れるかは問題でしょうが、日本でしか通用しないだろうという、先入観が多すぎます。

**佐藤** そのジャッジメントで問題だと思うのは、結局、日本人でありながら日本を

よく知らない。そういうなんとなくモダ  
ンに生きているつもり日本人が向こう  
へいったとき、判断のしようがないわけ  
ですね。日本式の西洋式というんですか、  
日本で考え、理解される西洋式はいっそ  
う通じない。

**村上** 日本の商社の人たちも、たとえば  
アメリカをよく知っているわけではない。  
机にどっかり腰なんかかけて、アメリカ  
式と思ってるらしいけれども、あんなも  
のは二流、三流の会社、優秀な会社の社  
員は絶対あんなことはしない、といいま  
すね。また、契約社会だから、机の上に  
私物を出しちやいけないなどということ  
から始まって、会社と社員とのあいだに  
はものすごく細かく、膨大な勤務に関す  
る協約書がある。そういうこと一つとっ  
てみても、まだ非常に誤解が多いよう  
ですね。

## 「浮き上がってしまう」 「西洋式日本人」

**佐藤** いまはいわゆる現代文化、日本  
でもなければアメリカでもなし、フランス  
でもなし、という現代文化の風潮が通用  
していますね。アメリカ人とフランス人  
イギリス人なんかの場合、基本的な生活  
様式が同じですから、それなりに通用す  
るんですが、そこに日本人が入るとその  
基本的な生活様式が違うから、どうして  
もマナーが変わってくる。そういうなか  
で「現代的な文化」だけで生きようとする

ると、日本人だけが浮き上がってしまう。  
ぼくはどうもそんな弱点が出てくると思  
います。

近ごろの日本人は背も高いし、マナー  
もずいぶんスマートになっています。し  
かし一見してわかるのは日本人の靴です。  
道を歩いている人の一〇人が一〇人、足に  
合った靴をはいていない。靴をゲタ的な  
感覚で買って、合わないのを膝まげてゾ  
ロゾロひききずつている人が大部分だと思  
うんですよ。日本人がいかに西洋化され  
た、現代化されたといっても、西洋の靴  
一つまともにはけていないという現象が  
あるのです。

**村上** 日本人は背広はきれいにしているけ  
ど、靴をちゃんと磨いている人も非常に  
少ないな。

**佐藤** ですから、ニューヨークでもシカ  
ゴでも、歩き方一つであれば日本人、中  
国人とわかる。日本人だけです、靴をゲ  
タ的にはいて歩くのは。こういう弱点は  
日本にいるとみんな同じだからわからな  
い。それで世界に出て西洋式で対等にや  
ろうとなると、どうしても弱くなってい  
く。むしろぼくは、私は日本人です、私  
はわかりません、というぐらい平気な顔  
をして日本を打ち出す精神的な余裕がほ  
しい。何もすべて西洋的に同化しようと  
懸命になる必要はないと思うんですよ。  
いまは、日本人としての意識を持って、  
日本の美点を理解し、強調することが非  
常にたいせつになってきているんじゃない  
んですか。

**村上** わたしのところでアルバイトして  
いた学生が日米の交換留学生でいって帰  
ってきたときに、きみの一番感じたこと  
を一つだけ聞きたいといったら、「いかに  
自分は日本を知らなかったか痛感しまし  
た」と答えました。わたしは「うん、き  
み優秀だ」(笑い)。じっさい、そうす  
よ。

実はわたしが七年前、この日本文化研  
究所を始めたのも、わたし自身、日本文  
化とはいったい何なのかとずっと考えて  
きたのですが、そういう研究所がまった  
くない。わたしがわかるように誰も教え  
てくれないし、適当な本もない。それじ  
や少し人にも手伝ってもらって自分で勉  
強するのも悪くない。これが一番最初の  
動機なのですがね。

これはやってもやってもわからないこ  
とでしょうけれど、しかし、外国の人た  
ちにも執筆してもらったり、本を作ると  
いう共同作業のなかからわかってくる面  
もある。こつちも理解するし、向こうも  
理解する。最初はよくアメリカの人たち  
とケンカしました。日本人はいまいいで  
すむけれども、むこうは一步も退かない  
ですからね。三時間も四時間も、ときに  
は徹夜でディスカッションしましたが、  
やはりそれは有益でした。

日本人はいろんなものを持っているけ  
れど、それをどう表現し、説明するかは  
これまでは必要がないためにやっていな  
い。何も日本文化なんて大袈裟なことを  
いわなくても、自分の気持ひとつ論理的

に相手に説明する経験がきわめて少ない  
ですからね。

**佐藤** さっきの留学生の話で思うのは、  
いま日本人がどんどん海外に出ています。  
あれはとても有意義なことだと思ってい  
ます。ところが、そういう人たちにあちこ  
ちで出会いますと、やれビルディングだ、  
やれ名所だと見て回っている観光客でし  
よう。それなら映画や絵葉書を見ている  
ほうがムダ使いしないですむ。

ですから、もう少しこう一か所なら一  
か所について、そこから日本を見直してみ  
る。向こうをただ見てくるんじゃないくて、  
向こうについて、向こうの感覚で日本を見  
るといような心構えが、もうそろそろ  
出てきていいんじゃないかと思えます。

**村上** そのお話に関連して二つ考えるこ  
とがあります。一つはムダではあるけれ  
ども、海外を歩いてくるのは非常に結構  
なこと。みやげ話一つでも次の世代に大  
きな影響力を与え得る。もう一つは、日  
本を眺めるというより、日本人である自  
分自身を見る、自分の中の日本を見つめ  
る機会をつくるのは、いいんじゃないで  
しょうか。一時はそういう学生もいたけ  
れども、このところどうもイージーにな  
りすぎたきらいがありますね。情報ばか  
り発達して、日本人がいつも歓迎され安  
く泊れるようなところばかり渡りあるく。  
日本を旅行してると全く変わらない。  
**佐藤** ぼくは向こうへいくとき相当、準  
備をしたつもりだったんですが、やはり  
日本は歴史と興行のある文化の国です

から、ぼくら若い者がちよつとばかり勉  
強したってそれでいいなんていうことは  
絶対ありえないわけです。そういう意味  
では、向こうへいってから日本のことを  
ずいぶん勉強させてもらいましたね。こ  
れもあれもと思うと、あと五〇年生きて  
も一〇〇年生きてもとても足りないし、  
また、勉強するだけの価値のある文化だ  
と思います。

**村上** ほんとうにそれはそうですね。

**佐藤** それをアメリカの学者も認めて、  
一つのまとまりとして日本ジャパニーズ・スタディ学という  
学問的分野が成立したことは、たいへん  
ユニークだと思いますよ。それだけに、  
電機製品の輸出ばかりじゃなくて精神文  
化を潤滑油として、高度な技術と高度な  
文化性をあわせて海外に広げていく。そ  
こで初めて日本が名実ともに第一等国に  
なるんじゃないですか。

## 官僚に残る明治以来の 西洋コンプレックス

**村上** 日本の経営史の専門家である南山  
大学のヒルシュマイヤー学長は「明治の  
日本のビジネスの成功は、さむらい精神  
だ」と分析されていますが、いまの佐藤  
さんがおっしゃったことと関連して「フ  
ランスはまず世界に文化で知られ、それ  
からものが続いたから信用された。日本  
の場合はものが先にあって文化は……」

**佐藤** 理解されていない、と。

**村上** そう。そこでこれからは文化を出

さなくちやいかん、といわれるわけです。  
**佐藤** ところが、外務省の海外に出てい  
るお役人は、日本の古典的なものはあま  
り表に押し出してもらおうと困るというん  
です。われわれがいかに西洋化に成功  
したかを懸命にいわんとしているのに、  
お茶だのお花だのが出てきてはかえって  
ありがた迷惑だと。そういう人たちは日  
本の基本的なものがわかっていてるのかど  
うか。わかつたうえて日本の文化の、政  
府の、国民の海外の代表として活躍して  
いるのだとすると、何か少しおかしいん  
じゃないかと思うのです。

**村上** 六、七年前、さる外務省の高官と、  
梅棹忠夫さんとわたしなんかで一緒にメ  
シを食っていた席上、その高官が、英語  
は非常に合理的な言語だが日本語はダメ  
だ、あれは言語じゃないというようなこ  
とをいった。

**佐藤** はっはっは。

**村上** 梅棹さんは専門ですからさすがに  
むつとして、言葉と文化の対応というも  
のは、これは非合理的だといえれば全て非  
合理的だ。合理的だといえれば全て合理的  
なんだ。そういつてから、「そやけど、ど  
の言語が一番上か決める基準が一つだけ  
あります。何かわかりますか」。それで梅  
棹さん、腕まくりしよって、「力ですよ」  
(笑い)。こういうコンプレックスはいま  
でもどうやら尾を引いていますね。つま  
り、ヨーロッパ、アメリカにたいして、  
日本はあなた方、偉い方たちともう変わ  
らないんですよ、といたい。情ないけ

れどね。

佐藤 さつきもいいましたが、そこもいまだに明治時代の延長なんです。明治からずいぶん時間がたって、しかも現代の時間は昔と違ってすごく回転が速いのに、明治的なものの考え方が延々と生き残っている。お役所の機構というものは何か恐しいみたい。

村上 アメリカのある都市で、文化担当領事をまじえて会食していたときのことなんですけど、領事が骨董品にちよつと興味を持っていて、どこにいったらいいかというような話になった。素人がいきなり骨董品屋にいくより、ガレージセールで掘り出しものを選んだら、と誰かがいうと「ガレージセールってなんですか」と、もう一年以上住んでいる領事が言い出して、みんなびつくりして顔を見合わせた、というような話もあります。

佐藤 でありながら、招待状にブラクタイと書いてあるのに正式な場所にラフなかつこうして出席される方もあります。さつきの話じゃないですけど、それで大きな靴をドタバタつかけてはいて歩かれると困っちゃうとか(笑い)。

村上 シカゴに若柳司友という踊りのお師匠さんがいますが、かつらから衣裳まで全て自前でね、なかなか活躍しておられます。向こうはパレードの好きな国民ですから、何かのときにいろんな民族のパレードがあって、日本人もやったほうがいいというので、費用いっさい自分持ちで参加したり、こういうとき外務省は

一銭も出さない。まあ、前例がないということで。しかしこれはお役所というより、日本のインテリ一般の性質かも知れませんが、目の青い人に対しては一〇〇万ドルのお金を出すことがあっても、目が黒かったら見向きもされない。そこはむつかしいところですね。

佐藤 イリノイ大学で歌舞伎をやっていたとして、初日には総領事などに招待状を出しても、日本人の名前だったら返事もきません。逆にシカゴ周辺のちよつとしたところでアメリカ人がちやちな「ジャパン・デー」をやりますと自動車二、三台でかけつける。よくいうんですが、日本のお役所は目が青くて金髪なら最敬礼同じ日本人なら鼻もひっかけない。

村上 おやおや、いずこも同じですか(笑い)。しかし、そういう西洋コンプレックスは、どうもインテリのものでね。日本の職人や一般大衆は、なんであんなやこしい言葉しゃべるんだぐらいにしか思っていない(笑い)。向こうのインテリにとっても、日本のそういう大衆にはるかに親しみを感じることも多いんじゃないですか、お互い人間同士として。三島由起夫の翻訳もしているギャラガーという人が、そんなことを『銀杏と爆弾』という本に釜崎の労働者と東大とを較べて書いていますけれどもね。それとも一つは、単純にいうと対外文化政策が日本にはないことでしょうね。

ま、それはそれとして「日本文化の形と心」というところに話を戻すと、わたしは

お茶、俳句、盆栽、剣道、柔道を含めて「生活芸術」といつているんです。

佐藤 生活芸術ですか。

村上 日本人は概念規定をしないから、向こうの人に説明するときに非常に困りましてね、新語を作ったわけですが、これには幾つか特徴がありますが、一番目立つのは「型の文化」であること。もう一つは「道」ということ。道とは、要するに、芸術だけれど芸術だけじゃない、もう少し宗教とかモラルとかにひっかかる何かがある。修練とか修業とかいう観念ですね。

## 「形」と「心」を「理」で結ぶために

佐藤 その型というものは、ものを習得するのに合理的だといえますね。まず、お師匠さんは型を教え、心は自分の修練で悟るものだというけじめがある。ですから、お茶でもお花でも向うの人には形で教えると、うまくやっついていけるんです。ただ、ぼくらが日本の文化、芸術の紹介で成功しているのは、それを逆さまにして使った面がある。つまりぼくは、日本では何十年もかかって会得するような心を、初めに全部出してしまおうのです。

ここにはこういう意味があり、そうするとこの形に意味があると、その精神的なものをむしろ先に出しちゃうわけです。初めは十いつて一わかればいいというところですが、今度は形を習得するに従って、だんだんと精神的な理解力が高まっ

てくる。

**村上** ははあ、それは一番大事なところですね。お茶でもお花でも西欧社会に入る可能性は充分に持っているんだけど、悲しいかな、それを教えることのできる人が少ない。

**佐藤** そういうことでしょうかね。

**村上** 日本では要するに形さえやればいいんで、それしか教えていない。

**佐藤** その先をやかましくいうと、うるさいな、自分で考えてごらんぐらいだけでも、その先生自身、果たしてわかっているのかどうか。ぼくは弟子入りするときに、芸術ってなんですか、なんて議論吹っかけて非常に理屈っぽく聞いて入ったんです。しかし、このごろ見ると「何流舞踊指導、基本から踊りの心までお教えします」とか、そういう看板が目につくようになりました。

**村上** ほう。いや、ぼくもアメリカにいて生活芸術の分野に二つのタイプがあると感じました。たとえば踊りていえば、日本のお師匠さんは、ここで首をちよつと曲げてとか教えますね。ところが向この生徒は「角度は何度、曲げるのか」(笑い)。

それで、サンフランシスコの日本人のお師匠さんは、踊りを全て写真にとつて教習本を作っています。理論までいっかどうかはともかく、ある意味で合理化しているわけです。ところが、もう一人のシアトルのお師匠さんは生徒に尋ねられると「何度かは必要なし、わたしのとお

りになさい」という。子供のとき収容所で昔流のお師匠さんから徹底的に仕込まれて、そのとおりやるのが正しいという信念があるんですね。で、どっちがインパクトがあるか。後者のほうなんです。

やはり合理的にいくと、理を習って理に負けるというか、生徒も伸びないし、いい加減のところまで止めてしまふ。日本文化の心を知りたい、というような良質の弟子は、後者から出ていますね。

**佐藤** そのお話を聞いてぼくもよくわかるんですが、いわゆるお稽古場、道場とあったスタジオでやる純日本風の方法と、マスメディア的に大学でマスメデュケーションでやる場合と少し変わってくるわけです。ぼくは大学で、お茶も踊りもその道の専門家をつくるのが目的じゃない。それを通じて日本の文化、日本の心を理解する一つの方便であるということをはっきりわからせてから始める。その代り一、二学期を取って専攻科的に上級のクラスに入ってくる生徒には、日本の古典的な教授方法にがらつと変えてしまふ。大学ではそうしないと、やはり無理ですね。

ですから大学では、理論をはっきりいう。たとえば、お茶で柄杓を構えてポーズするのは、ここに心をこらして心身の準備ができたかどうか振り返る瞬間である。その目的のためにこういう姿勢をとるんだと説明すると、生まれて初めて柄杓を持って構える姿がちゃんとその形になる。心構えがわかってますからね。

**村上** なるほど。

**佐藤** 次に偉い人にお茶を立てる。あるいは同級生にというバリエーションは、今度は亭主の心構えになるんで、それは自分で勉強なさい。上級生には、そこで心と形との線を区切るわけです。

でも、おもしろいですよ。正直なアメリカ人で、こう構えても試験やら彼女のことが気になってしょうがない。わたしはどうすればいいんですか(笑い)。それはしょうがない、それなら一つの型と考へなさい。心の迷いはある程度おいて、次はこう、その次の型はこう、などと考へているうちに、そんな迷いはどこかにいつてしまふ、と教えるんです。型というのは、ですから、日本の文化のたいせつな要点だと思えます。

ただ、ぼくはよく、日本の文化を料理にたとえて、その一見古めかしい料理をいかに現代風に調理して欧米の人たちに食べさせるか、あるいは食べたい気を起こさせるか、それが現代の日本の文化人の役目である、腕であるといっているわけです。

**村上** 確かに、欧米人を指して理屈っぽいといいますね。しかし、向こうじゃ理屈っぽいという言葉はおそらくないでしょう。理屈が勝つということはいいことだ。そういう考え方がかなり違う気がしますね。

わたしがよく挙げる例は、男と女の関係で西欧は「H」型。両側に男女がいて、お互いまんなかのバトンを持ち、「愛して

るか「愛してる」と絶えず確認しなければ人間関係が成立しない。一方、日本の場合は「人」の形になって、背中あわせにもたれあっている(笑い)。言葉を使っているわけじゃない。伝わってくるもので判断しあうという、それだけの違いがある。

日本文化を広めるときは、それだけの差をよく認識して、彼らの伝達方法も取り入れられる人じゃないと、なかなか伝わっていかない。そういうことが教えられる先生が非常に少ない。佐藤さんみたいな人がもっといてほしい、といつもぼくは思います。ところで、今度イリノイ大に日本館を建てる話があるようですね。大学側の考え方として一番大きな理由はなんですか。

## 父兄が望んでいる イリノイ大の日本館

佐藤 一つには、生徒の父兄から多くのクラスをもっとサポートしろとかなり手紙がきているらしいのです。学生は普通、無理して大学に通ってるところがあるから、家に帰ったって講義なんか話題にしませんね。ところが日本の文化をとっている学生たちは、変わった、ユニークな経験をした、こんなことを教えられた、カイセキ料理なんていう変なものを食べたとか家に帰って話すわけです。家の人たちも何かと質問するし、話が展開して、結果的に大学の存在を親に知らせる強力なベースになっている。

現在の日本館は三部屋しかないちゃちなものだけど、それで大学と家庭とを——結局、家庭というのはタックス・ペイヤーですから——州の税金を払ってる人たちがこれだけ大学を意識してくれる、大学の予算を今度は州に申請する場合に何かと好都合であるというような繋がりになってきた。

村上 大学としては、さっきのお話のように、いわばモラルに近いものを教えてくれるという気持もあるわけですね。

佐藤 そういうことです。親として、先生としてなかなか聞いて貰えないことも、ぼくが日本人の顔で、着物を着てやると、そのエキゾチックなところが一つのマジックになって聞くようになる。それに、ぼくの英語が不完全なところも一つの魅力だというんですよ。同僚たちは「お前の英語は不完全ではあるが意味はよくわかる。お前の乏しい単語を自分流に、それこそ日本的につなげて表現すると、われわれが考えもしなかった力強い表現法になってくる。だから、それ以上英語を勉強するな」なんて(笑い)。

村上 いまは三部屋だということですけど、何人ぐらい収容できるんですか。

佐藤 三五人も入ったらいっぱいですね。だから学生は申しこんでも何学期も先まで入れない。向こうは月謝払っている、税金払っていますから、大きくしろっていう文句が大学側にいくんです。しかし、州立大学ですから州の費用だけで日本館を立てるわけにはいかない事情もあります。

村上 コミュニティの関心は高まっているわけでしょう。

佐藤 日本の生活芸術に関する大きな催しは年に二回、展覧会、講習会をやるんですが、古い建物ですからね。ちよっと人が入ると床が落ちて家がひっくり返るんじゃないかという危険性が出てきた。一年に二二〇〇人から一三〇〇人ぐらいの見学客がありますから、そういう人たちにもっと安全に日本のことを勉強してもらうために、ちゃんとした日本館を建てたいと思っています。

ニューヨーク辺にはジャパン・ハウスというものができていますが、中西部、シカゴあたりには全然ない。ですから、うちのちやちや今の日本館でもシカゴ、インディアナポリス、セントルイス近くの人たちがバスで乗りつけてくるんですよ。それから婦人会、高校の先生の会の特別注文で、お茶の講義なんかもやります。

村上 なるほど、それじゃますます手狭になる一方だなあ。

佐藤 講義のほうはしようがないから、いま二五〇人ぐらい入る大講堂でマイク・ロフォン持ってやっていますが、そうなる、禅だのわび、さびだのといっても全然ピンとこなくなっちゃう。やっぱり、それらしい雰囲気は必要ですね。

村上 中西部はアメリカでも私の好きなところですが、そこに立派な日本館ができてきたと素晴らしいですね。その計画はぜひ実現させたいですね。

# 大正時代文化研究

● 第二のステップへ ●

小松左京部会



小松左京氏

## 視点を人間関係の変遷に

雑誌『諸君』にその一端を発表してきた「大正時代文化研究」は、第一の段階を終えたところである。大正期に青少年期を重ねた各界各層の方々の体験、見聞を細かく集め、その細片から大正の時代相を組み立て直して「こうという方法に一応のピリオドを打って、次にはそれぞれの「個」がタテ・ヨコにどうい

う関係を結ぼうとしたか、それが昭和期にどういう流れを形成したかを追っていく」と思っている。

最近、いろいろな意味でスポットを浴びている大正期について、その時代的な性格がはつきりしないという否定的な見方が一方にあるが、しかし大正期が、明治の国家建設期がおおよそ終わりを告げ、次の昭和期のレールを敷いた世代をはぐくんだ柔軟な、自由なクッションの役割を果たしていたことは間違いない。大正

期を中心とした人間関係の変遷が、そこでは重要なポイントになってくる。

つまり師弟関係、友人関係はどういう変化を示したのか。あるいはまた、それまでの個人商店、いわゆる「おたな」に代わって会社が台頭するのもこの時代なのだが、東京下町の間屋街で育った方に話を聞いたとき、関東大震災を境に、それまでは従業員を「何々どん」と言っていた呼び方から「何々君」と言うようになつたことを知らされた。ここにも、

新しい会社組織に即した人間関係の組み替えの兆しがある。

さらには男女の関係、夫婦の関係、そして家族関係のなかにおける兄弟姉妹、父母、祖父母の位置がどのように動きだしたのかにも、興味深い時代相が読み取れそうである。

こうしたタテ・ヨコにわたる人間関係の変遷は、もちろん大きな時代背景と無縁ではない。

## 近代組織と心情の連帯と

第一部の研究ですでに幾つかそのケースが出ていたが、一つ極端なものとして「二・二六」事件があげられる。外交官・西春彦氏のお話を通じてわかったことなのだが、大正期において初めて近代ビュロークラシーが機能しだし、テクノクライトが生まれてくる。それはまだ安定したものではないにせよ、近代的な組織をつくり、ライン・アンド・スタッフのシステムを基に問題処理に当たろうとした。

しかし一方、「二・二六」の場合に見られるように、青年将校たちはそのラインを認めようとしなない。自分たちは天皇に直接心情を訴え、天皇の命令にたいしてのみ責任をとるという形で、近代組織へのリアクションを示した。大正研究には、こういう新旧の人間関係が対立したところ、に生じたコンフリクト、フリクションを押えておく必要が出てくる。

明治期にも、組織というものは表向きとしてはあったのだが、それは心情的な連帯のなかで成員一人ひとりが我慢をし、忠誠を尽くすという形で保たれていた。それが大正期になると、近代組織というものがはっきり表面化してくる。組織の機関決定が非常に大きな意味を持つてくるといふなかで、「二・二六」に限らず幾つかの摩擦、葛藤が見られることも、大正研究の大切なポイントになる。

近代組織の誕生にともなう、もう一つ注目しなくてはならないのが政党組織である。政党はやはりそれまで一種の心情の連帯とか、郷党のつながりというも

のを上手にすくい取ってきた。一方で、ビュロークラシーから生まれた官僚政治は、合理的に整備された機関決定に基づいて政策を選択していかうとするものである。現在の政党組織の一つの底流をなしている政党政治と官僚政治との対立の一因は、ここに発しているといえるだろう。

## 幾つかの作業仮説から

従って、第二の段階に進む「大正時代文化研究」は、「二・二六」もその一つとする最低三、四の作業仮説を立て、事件ごとに人間関係がどういうように動いていくかを検証したいと思っている。

この作業がうまくいったら、またそこに大きな影響を与えたリーダーをインプットして、人間関係エレメントというベキものを探っていきたい。その両面から大正期の人間関係の変遷をせめてみようというのが、これからの私たちの課題である。(談)

# 横綱 大いに語る

## 肝炎ではやつと命をとりとめる

加藤 ぼくはね、ほんとっておすもうさんみんな好きなんですよ。もとの栃錦関みたいに見てて心臓がどきどきするよ。うな、ああいうおすもうさんは体に毒だから特別な人をつくるのをやめようと思っただけだね(笑い)。いまのおすもうさんでどきどきするのは、ご本人の前でちよつと照れくさいんだけど、三重ノ海さんなんですよ。

ロミ 私もう気違いみたいに好きなの。家じゆうで大変なんです。でも、どきどきしない。何かすごい安心して、絶対勝つような感じがする。



加藤 ぼくはどうして三重ノ海さんが好きかというと、型があるんです。とにかく立ち上がって前みつ取って突進すると「いける」と思うんだ。それと、ぼくの子供の時分、双葉山時代なんですけど、双葉山をやつつけた安芸海が好きだった。その安芸海に、顔も取り口も三重ノ海関が似てるって言われてるんです。でも、ぼくに言わせると、いまの三重ノ海関のほうが強いと思うね。

ロミ 大体が強いんですけど、何か急にもっと強くなっちゃったって感じね。

三重ノ海 自分でわからないんですが、やつぱり体の調子がよくなったんでしょ。うね。精神的なものとかね。

加藤 悪かった時は肝炎にやられたんでしょ。

三重ノ海 (五七代横綱)

加藤芳郎 (漫画家・漫画家協会理事・加藤芳郎部会)

ロミ山田 (歌手・女優・加藤芳郎部会)

天地総子 (歌手・タレント・加藤芳郎部会)

三重ノ海 肝炎になって三年ぐらい全然だめだったんです。それでよくなってまた大関に上がったんだけど、上がった場所です。首をやっちゃったんです。それで大関落ちて、一場所でもまた大関に返ったんです。その間一年ぐらいちよつとあれしてたんですけどね。それが体よくなって、精神的にもいろいろ……。

天地 その三年間というのはじーっとしてられたんですか。

三重ノ海 やつぱり体治すことだけね。

天地 入院ではなくて……。

三重ノ海 すもうやりながらだからね。

加藤 肝炎の原因はなんだったんですか。

三重ノ海 それはよく聞かなかったんで。

加藤 とにかく肝炎というのは、動いちゃいけないというんだ。飯食ったあと一

時間は静かにしてろとかいうんだから、おすもうさんがあれにかかったらもう大変ですよ。

三重ノ海 すごかったですよ、苦しんで。ちようど関脇から大関をねらつてるときだったから親方が気をつかって、場所中に疲れるといけないから疲れない注射でも打ってこいというんで、宿舍の近くの病院に行ったんですよ。けいこのあとだったんで血圧がすごく高い。それをわからなくて、下げる注射か何か打つたらしいですね。普通の人だったらころつといつちやうところでした。

ロミ うわあ、怖い。

三重ノ海 すごい注射でね、普通は打たないらしい。そしたら一晩で――朝起きたら体がだるうくて飯も食えない。場所中四日目くらいだったですけど、おかしいなあと思ったら発作が起きちゃった。あつちもこつちも痛くなって苦しんで、それで救急車で……。

加藤 普通だとそのまま、というか。

三重ノ海 いつちやう人もいるらしい。

加藤 しかも、おすもうさんとして、それで終わつちやう人もいるわけだよ。そのころは奥さんいたんですよ。

三重ノ海 いや、まだ一人者。

天地 どんなにつらかったでしょうね。

三年ものあいだ。

三重ノ海 その場所は調子よかったからね。

ロミ じゃあくやしいわね。やつぱりわかりますね、どっか痛めてる方って。

三重ノ海 気持ばっかしいつちやうって、体は全然いうことかないしね。

## すもつ部屋は 人生の学校だ

ロミ いまお幾つ？

三重ノ海 三二です。

天地 輪島関より……。

三重ノ海 いえ、一緒です。一三年生まれ。あれが一月でぼくは二月。

加藤 ほんとう言うとおれにも三三年生まれの長男がいる(笑い)。だから息子になつちやうんだよ、おすもうさんていうと。

天地 普通ばりばりできるつていうのは、やはり二〇代でしょう？

三重ノ海 まあ、最近は三〇になるともう引退と。早いですからね。

加藤 昔は……。

三重ノ海 場所も少なかったから。

加藤 二場所ですものね。あとは巡業しければよかったですけど、いまは六場所だから。

三重ノ海 だから、上がるのも早いし引退するのも早い。

ロミ 最初はお幾つて入れられたんですよ。

三重ノ海 一五歳です。

ロミ 三重県でしょう？

三重ノ海 松阪なんです。

加藤 ああ、牛肉だ(笑い)。

三重ノ海 しかしうちにいるときは、そんないい肉は食えなかった(笑い)。

加藤 そのころ、すもうつてのは好きだったんですよ。

三重ノ海 すもうは全然知らなかったですよ。中学一年のころ巡業がきて、そのとき出羽海部屋を知ってる人と銭湯で会ったんですよ。大きいからね、すもう取りになれよなんて言われてね。そのとき連れられて行ったんですよ。そしたら、体重はあつたけど背が足りなかった。で、中学卒業して背が伸びたら来てくれた。

加藤 それで、伸びたわけですか。

三重ノ海 ちようどぎりぎりぐらい。

加藤 前にぼくはある雑誌の企画で、あこがれの栃錦関の部屋に一日入門したことがあつたんですよ。そのときみんなで撮った写真があるけれども、そこから有名になつたおすもうさんがいないんだよね。だから、オタマジヤクシはわいわいいるけど、ほんとのカエルになるのはいないみたいなのがあるんですよ。

三重ノ海 入るのも多かったですね、やめるのも多かったですからね。

ロミ つらくて落後しちやう……。

加藤 それを承知で教えるんでしようけどね。地方なんか行くと、料理屋にちよつとてかい板前さんがいるでしょう。「大きいですね。あなた」「ええ、私は時津風部屋の三段目までいきました」なんて言われると尊敬しちやうんだよ。ああ、おすもうさんの部屋に行つて三段目までいったのかこの人はと、「ひとつお願いしますよ。これ、うめえ」とかね(笑い)。おすもう取りになれなくても、一種の修業



加藤 芳郎氏

場としての意味があるからね。

ロミ いまは、ほかにないから。

加藤 だから学校なんですよ、一つの。すもう学校。

天地 でも、やめようと真剣に思ったこと何度かあったんでしょね。

三重ノ海 入って三年目だったか、内出血で頭がはれちやっただすよ。病院へ行ったら、すもう取れないかもしれないと言われて、やめようかなと思っただけね。

加藤 だけど、親方の佐田ノ山さんの「三重ノ海がこんなになるとは思わなかった」という談話が、いまだにときどき出ますな。

三重ノ海 入ったときは弱かったですね。

加藤 腕の力なんて余りないとか。

三重ノ海 ないんです。だから、すもうおからというのはあるんですね。すもう取るときの体から出る力はある。

ロミ そう。全身って感じがするわね。

三重ノ海さんの取り口を見てると。

加藤 それでね、本場所に行ってみてまたファンになっちゃうというのは、三重ノ海関は色が白いから、制限時間がだんだん迫ってくると体がぼっぼっ赤くなっ

て……これです。すもうの魅力っていうのは。

天地 間際になってくると、全身こう……

三重ノ海 ただ仕切るんじやなくて、相手の目をにらみながら、やっぱり力が入ってるでしょう。だから体がぼあつとね。天地 そうすると、きょうは勝ちそうだとか負けそうだとか……。

三重ノ海 それはちよつとわからない(笑い)。やっぱり逃げちゃだめですね。

## 「人にも言えないし、自分だけですよ」

加藤 取り組みが決まって、さて作戦練ったほうがいいのか、無になってやるべきか。

三重ノ海 無になってやるんだけど、やっぱり考えるんですね。この人はこういうふうにいっただいのかとかね。でも、軍配が上がって立っちやうてしよう、もうあとは体でね。

ロミ わかんないみたいね。よくあのときはどう思いましたか。「このときは？」って聞いたって、本人、一分以内のあのときにそんなことまで考えてないと思うのね。

加藤 でも、このごろよく喋るようになってきたですな。栃赤城なんて出てきて「うん、そうそう。あのとき差そうと思って差しました(笑い)」とか言ってるけど、前はほとんどのおすもうさんが「どうですか」「いや……」最初の突っ張りが

よかったですね」「どうですか……」(笑い)。天地 おしまいには、アナウンサーが困っちゃう。

三重ノ海 アナウンサーが「頼むから喋ってくれ」って(笑い)。

加藤 横綱は、貴ノ花関や輪島関と親友でしょう？ 部屋が違うのに、わりあい一緒に多いんですね。

三重ノ海 よくマージャンしたりして遊んでたんですね。最近は何もなくなっただけ。

加藤 横綱になると、なんだかんだと制限があるでしょうな。

三重ノ海 なる一年ぐらい前からは、余りやらなかったです。

ロミ 遊ぶでしょう、そうすると、そうでなくても弱いときもあるでしょうけど、必ず「遊びすぎだから」とか言われるでしょう。

三重ノ海 そうなんです。飲んだから勝つとか負けるとかいうのはいないです。ロミ やっぱりストレスの解消は必要だと思っんです。あんなストレスのある仕事はないもの。その場で勝ち負けが決まっちゃうんだから。

三重ノ海 一瞬で終わりですからね。

加藤 小さいころは、おすもうさんって何秒かの勝負だからいい商売だと思っただけ、反対にみれば、一日の仕事が何かしかない。あとどうするのかって考えることあるんです。理事長とか理事とか、そういう人たちに付け届けしたって番付けが上がるわけじゃない。よその

世界のゴマスリとかつきあいみたいなものが、いつさいないんだから。

ロミ それで位が上がったり下がったりするから大変ね。

三重ノ海 その場で出ますからね。

天地 いつも勝ちたいと思って土俵に臨んでしようけど、それはもうしようがないですね。

三重ノ海 あそこは悪かったなんてあとで見て考えるけれども、どうしようもない。

天地 そういう日はどこか飲みに行くとか。

三重ノ海 でも、場所中は余りね。

天地 そうすると、おうちへ帰って奥様にいろいろ。

三重ノ海 いや、すもうのことはいっさい言わないですよ。だから孤独というか、人にも言えないし、自分だけですよ。

加藤 このあいだマージャンのプロの人に聞いたんだけど、負けたやつをよくよ考えてるとよくないって言ってましたな。

三重ノ海 それはあるでしょうね。負けたことをいろいろ考えてると、また次の日に尾を引いちやう。だから、からっと忘れるといいんです。



三重ノ海関

## 大関時代に

### 一度引退を考えた

て急にこうなったかと思う。二〇歳ぐらいの人が急に強くなるのはわかるけども。三重ノ海 だめだなんて自分でも思ってたくらいだからね。

ロミ そんなときあったでしょう？

三重ノ海 もう引退かなあと考えたことがあったし。

ロミ あれ何年ぐらい前でした？

三重ノ海 大関のときですね。親方にもいやな思いをさせるし、とにかく一回花を咲かせるというか、いい成績をおさめて引退しよう、というふうに関き直った。それが結局……。

ロミ それが大変なのかもね。

天地 けいこ量も人より余計に……？

三重ノ海 人よりというか、まあ自分なりに一生懸命やりましたね。

加藤 横綱がここで二丁やってやろうと、やらなきゃいけないんだというのがなかつたら、今日の三重ノ海関はないと思うんだ。それと奥さんの何かがあるな。食餌療法なんかあるんじゃないですか。

三重ノ海 そうですね。いろいろ考えてやってくれたようですよ。

ロミ 加藤先生もちやうど去年のいまごろ、ご病気だったでしょう。おわかりになるわよね、そういう気持が。治ったらやろうっていう気が。

加藤 「ありがたい。これを大事にしなければ」という部分がありますから、お酒だつて前みたいにはね。いま三重ノ海関の奥さんは、食事なんてどうということをやつてらっしゃいますか。

三重ノ海 野菜を余り食わなかったんですよ。だから、結婚してからは野菜を多くとか。それにいろいろ薬を飲みましたね。漢方薬のゲンノシヨウコを七年ぐらいずっと飲んでるんですよ。

## 誰も考えていなかった横綱昇進

ロミ とにかく磐石のごとく土俵にいるから、押したって動かないって感じがするのね。その重さでどどどと押し出していく。強いついていうのは、そのすごさなのね。



ロミ山田さん

三重ノ海 しかし、横綱になるなんて考えてもいなかったですね。もちろん周りの人もそんなことを考えてなかったと思いますけど。

加藤 そう。ほんとうにそうだなあ。

ロミ だって、年から考えてもね。

加藤 横綱問題がちよつと出てきた。いけるんじゃないかっていうふうには、みんな思い始めたのね。

三重ノ海 あのととき自分は全然そういう気持はなかったです。横綱なんて大変なあれだし、とにかく思い切って今場所い

こうかなんて思ってた。初日に負けたでしょう。あとはもう一五日たてばいいと思ってた。そしたら一四連勝しちゃった。加藤 初日は？

三重ノ海 栃赤城関です。栃赤城に負けるといんですよ。九州でも負けたらよかったです。

ロミ あれは何かおもしろい負け方ですね。

三重ノ海 土俵際まで持っていたところ、ちよつと横にすっぽけちゃった。

加藤 今度の決定戦で、ほら……。

ロミ そうそう、トーナメントで取られちゃったの。

加藤 あれで一六〇万円の損しちゃった(笑い)。おれ、計算してたんだ。一等が三三〇万円、二等が一六〇万円。

三重ノ海 あれ、ずつとよかったんですよ。第一回が三位で、その次が二位、去年が優勝。あんまりいやらしいから、別にむきになってとらないで気楽におったんです。

ロミ あそこまでいったんだから、もうじゆうぶんですね。

三重ノ海 いや、あそこまでいけばやっぱり勝ちだったけど、疲れちゃった。

ロミ うちの息子がトーナメントをすごく楽しみにしてたんだけど、二日で終わっちゃうから全体的に迫力がないっていうのよ。

加藤 だけど、そう年中、迫力ばかりやっていたら、くたびれちゃうもんね。

ロミ それでまた地方巡業でしょう。

三重ノ海 だから、東京にはほとんどい

ないですね。まあ、巡業の場合は別にこれは関係ないですからね、気楽に。

天地 でも六場所もあると、おすもうさん全体が疲れるってことありません？

三重ノ海 それはみんな疲れませぬ。

天地 めいめい体力を調整するよりしよがないですね。そうすると、遊び盛りのおすもうさんでつらいでしょうね。あの程度むちやもするでしょうし。

ロミ むちやして場所がだめで、また奮奮してつらいことかな。

加藤 横綱はたばこ吸わないんですか。三重ノ海 吸わないです。

加藤 ところで、横綱は踊りがうまいって聞いたんですけど。

天地 ええつ、ほんとう？

三重ノ海 いや、踊りは踊ったことない。酔っ払ったら歌を歌ったりするけどね。

加藤 おすもうさんは、みんなうまいんじゃないですか。平尾昌晃に言わせると、腹式呼吸ができるからうまいんだって。低音ですね。

天地 前におけいご場を拝見したときに、わあってチャンコ鍋食べてからは、皆さんフリーの時間でしょう。そうすると寝どころがって「歌謡曲全集」なんか見て、あーあーっていろんな歌を歌ってらっしゃるのね。とつてもほほえましかったです。三重ノ海 もう昼からは何もすることがないですからね。

加藤 だけど、いま横綱は、おれはすもう取りになってよかったです。

三重ノ海 いや、大関に上がったときに、

やっばりよかったなと思っただす。とて  
もじやないけど、部屋の人だつて十両に  
も上がれるとは思ってなかつたからね。

加藤 あとから振り返って、それはどう  
いうところだと思えますか。

三重ノ海 負けん気というか、そういう  
ものはあつたですからね。

ロミ でも、一見おとなしい風で。  
三重ノ海 いやあ、喧嘩はつかしてまし  
た。

加藤 やっばり、きかん気だろうなあ。  
天地 しんは強いからね。

三重ノ海 負けるということは余り好き  
じやない。かつかつするほうですからね。

表情は出さないけど、もう、かつかつか



天地総子さん

……(笑い)。

ロミ 表情に出ないほうが根性は強い  
よ。だから横綱まできたのよ。

加藤 お父さんを早く亡くされたとか。  
三重ノ海 そう、中学一年だつただす。

ロミ じゃあ、おすもうさんになる直前  
ね。

三重ノ海 おやじは、すもう好きだつた  
んですよね。おれがすもう取りになるの

を知らないで死んじゃつたから……。  
ロミ 残念ねえ。いまいらしたらどんな

だつたでしょう。いま横綱よ。——それ  
で、ご兄弟は?

三重ノ海 四人です。ぼくは末っ子。  
加藤 五郎っていうんですね。うちのネ

コがゴローっていうんです(笑い)。  
天地 あやかつたわけですか。

加藤 いやいや、うちは野口五郎のほう  
でね(笑い)。

## 「下の子供が

## 輪島が好きで……」

天地 横綱は、お子さんは?

三重ノ海 男二人です。

天地 じゃあ、やっばり憧れて……。

三重ノ海 まだ四歳と二歳で、小さいで  
すからね。

ロミ まだよくわからないかしら。

三重ノ海 上のほうは大体わかつてきた  
けど、下がまたものすごくすもう好きな

んですよ。輪島が好きなんです。

ロミ じゃ、お父さんと輪島が組んだと  
きは、どっち応援するのかしら。

加藤 子供が貴ノ花を応援してたなんて  
ことあるんじゃない(笑い)。

三重ノ海 何かあると土俵入りやっちゃ  
うんですよね。

ロミ かわいいなあ。

三重ノ海 しょうがないから、二人に化  
粧まわしを作ってやって、写真だけ撮つ

てあるんですよ。ぼくもちゃんと締めて、  
子供、一人と二緒に。

天地 お子さんがもしおすもうになりた

いと言つたら、やらせます?

三重ノ海 どうですかねえ。そのときに  
なつてみないとわからないですけど、自

分としてはやらせたくないですね。大変  
だからね。技なしで強くなれるというな

らしいですけど、ないですものね。

天地 奥様はなんておっしゃつてるんで  
すか。

三重ノ海 まだそこまで考えてないでし  
よう。

ロミ 四歳じゃ、まだね。

天地 でも、いいじゃない。そのころから  
うんと食べさせて、けいこさせて(笑い)。

加藤 それがかまくら増位山、三保  
ヶ関さんの部屋は人もうらやむみたい

な感じだな。親子で絵をかくて二科には入  
選するし、歌を歌えばヒットするし、大

関になつてるんだから部屋も継ぐてしよ  
うな。

ロミ お父さん、嬉しいでしょうね。

加藤 お父さんが嬉しいですよな。

ロミ 横綱のお子さんが四つと二つじゃ、  
一番かわいい盛り。お子さんと遊んで

るのが一番楽しいんじゃないかな。せいぜ  
い、いまのうちに遊んどいて下さい。そ

のうち、だめになつてくるんですからつ  
て、みんなをおどかすの。天地さんのお

宅は、お幾つ?

天地 三歳になりました。でもすごい  
すよ。きのうも主人と話し合っていたの

が、ちよつとこれから喧嘩になりそう  
だ

なつていう雰囲気のために、ぱつと顔色  
みてね。パパとママつて仲がいいわね。

どうしてこんなに仲がいいのかしら」なんて言うのよ。びっくりしちゃってね。もう喧嘩できなくなっちゃった(笑い)。実によく見えますよ。

ロミ 女の子は早いから。——三重ノ海さんも女の子がほしいですね。

三重ノ海 そうですね。男だともう大変だからだめらしい(笑い)。

ロミ みんなそうなっちゃやうの、奥さんが。男二人生んじやうと、もう怖いのよ。

三人男を育てるっていうの、いま大変だから。

加藤 それにしても、おすもうさんで偉くなってお嫁さん貰うとみんな美人ね。

天地 そうなんですすよね。

ロミ 美人でわりと小柄な方なのね。

天地 大きい女性って、お嫌い？

三重ノ海 いや、そんなことない(笑い)。

天地 奥さまは？

三重ノ海 うちは大きいですよ。

ロミ 大きいといっても、おすもうさんの隣りに立つと小柄になっちゃやう(笑い)。

加藤 しかし、本場所の一五日間というのは長いもんでしようね。

三重ノ海 長いですねえ。夜も眠れないです。

## 夜も眠れない 本場所一五日間

ね。

加藤 たまにそういう人もいますか。

三重ノ海 余り聞いたことないですね。

ロミ 「時間です」って言って、館内がわあっと湧く。あのとときの気持ちっていうの考えると、どんなだろうと思うの。毎日、いやだろうと思うわ。

加藤 そのとき三重ノ海さんは、ばあつと赤くなるわけよ(笑い)。

ロミ 私は自分の性格から言って、とてもあんな緊張を強いられる商売できない。自律神経失調症で死んじやうわ。

天地 絶対そう。死なないまでも頭おかしくなっちゃやうわ。連想ゲームの一分ゲームでも大変だったから。

加藤 あの一分で、いやだね。

天地 うん。よく先生お元気に……。でも、見ちゃいけませんね、あれ。

加藤 おれ、あれ見たから失敗しちやうたよ。全然進まなくなった。

ロミ おすもうさんで出た方あって？

加藤 親方は田子の浦さんとかだいたいぶいたけど、現役だと玉ノ海さんね。田子の浦さんに「たまにはまわし締めてやるんですか」って言ったら、「いや、あんな野蛮なものいやだ」って(笑い)。おっかない、なんて言ってた。

ロミ いったん引退しちやうとためてしようね。怖さが先に立つちやう。でも、うちの主人が、土俵の上でがっぷり組んじやうって動かないときに、見る人はただ組んでるようにしか見えないだろうけど、あれは両方が満身の力をこめてやっ

てるんだって言うの。自然に組んでるよに見えよ。だから水入りになっちゃやうのね。あときは、力というのは、引っぱってらっしゃるの、それとも押してらっしゃるわけですか。

三重ノ海 やっぱり前へ出ようというわけだから、お互いに出る力が……。

ロミ 一分以上そういう状態ってありえませんか。

三重ノ海 手なんか動かないですものね。加藤 おすもうさんの世界に入ったのは昭和何年でしたっけ。

三重ノ海 ぼくは三八年です。

加藤 北ノ富士とか……。

三重ノ海 いや、それはもつとあとです。大鵬、柏戸です。

加藤 で、十両にはどのぐらいいて？

三重ノ海 五年半ぐらいです。

加藤 それは早いほうですか。

三重ノ海 まあまあです。

加藤 さつき大関になったときによかったと思うとされたけど、十両になるとまず嬉しいでしょうね。

三重ノ海 嬉しいですね。待遇が全然違つちやうでしょう。いままでも世話してたのが、世話して貰うほうになる。それで給料は入るし。

加藤 どっかに行くんだって、荷物なんか持たないでしょう。

三重ノ海 はい。

ロミ 結局、実力の世界ね。年上を従え

ることだつてあるわけですからね。会社の年功序列と違いますね。

三重ノ海 落ちちやえばまた……。

ロミ 逆になるわけですものね。まさに実力。だから私、外人さんがおすもうを好きになるのわかるの。

天地 外人客は年々ふえてますね。

三重ノ海 みんな詳しいですよ。

加藤 だけど、横綱に上がっちゃったんだからね。

ロミ これからは大変よ。

加藤 地位の維持だね。

三重ノ海 もうちょっと調子伸びても、あとは引退ですからね。

加藤 しかし、三重ノ海さんのすもうを見てると、まだまだこれからという……。

ロミ ちょっとしたところでささっと引退しないで、何言われても粘り強く横綱の席にいてほしいわ。

加藤 前みつ取って早いすもうで(笑い)。

天地 そうすると、気力と体力もいつも最上のコンディションにもっていくというか。気力っていうのが……。

三重ノ海 それが一番大切ですね。

加藤 心電図とか血圧とか、ときどきやってみるんですか。

三重ノ海 血だけとって肝臓とかそういうのは調べてます。なんでもないということですけどね。

加藤 嬉しいねえ。

天地 でも、なんとなく体調でわかりますでしょ、ご自分で。

三重ノ海 やはり体はね。

加藤 体調がいいと背中の肉がわりあい盛り上がりてくるでしょう。

天地 悪いときじゃないんですか。

加藤 そうじゃないんだ。おすもうさんが強いとき見ると、みんな背中のあたりが盛り上がりてくる。普通おれたちだったら肩こりだよな。特に筋肉質の人だね。あれ、けいこしてらうちに盛り上がりてくるんでしょな。

しかし、おすもうっていいなあ。

ロミ 国技ですものね。この前、皇太子いらしたんですか。

三重ノ海 はい。

ロミ 珍しいでしょう、いつも天皇陛下だから。

## 大観衆なんて 見えなくなる

加藤 ぼくが一番最近で本場所に行ったのは、三重ノ海関が大関のときでね、嬉しかったねえ、あのときは。輪島に勝ったんです。それからいまの若乃花が北の湖に勝ったすもう、それに行ったの。嬉しかったあ。

ロミ 私は二年前ぐらいかな、最後に行ったのは。せっかく子供を連れて行ったんだけど、まだそのときはうちで私たちが見てるのをちらっと見るぐらいでね。

喜ぶかと思ったら土俵におしり向けて物ばかり食べてるの(笑い)。がっかりきちゃった。そしたら、去年から無我夢中になりました。

加藤 お客が向こうのほうで食べたりにてるの見えますか。

三重ノ海 あんなのは見えないですね。

加藤 食べるっていえば、チャンコはあんまり偉くなると食べられないでしょう。三重ノ海 いや、そんなことはないですよ。ロミ あれ、毎日食べてるわけじゃないでしょう？

三重ノ海 鍋は毎日つくります。

ロミ 場所がないときも？

三重ノ海 部屋でけいこするときは、朝というか、昼ですけどね、部屋で食べるからどうしても鍋になる。

加藤 夕食はどうするんですか、若い人なんか。

三重ノ海 若い人はみんな部屋で鍋をやります。

ロミ 大勢のつくるのが一番楽は楽ね。

三重ノ海 それに、よく煮るから安全でしょう。夏もやっぱり鍋だから、すごいですよ、汗かいて。

加藤 地方巡業に行くとき、九州場所なら、ああフグだなとか、あるでしょうな。あれがうらやましい(笑い)。

天地 でも、フグなんて何人前、召し上がったら気がすむのかしら。

三重ノ海 箸でちゅつとやっちゃうとね。でも白子酒っておいしいですよ。

加藤 ああ、あれはうまいな。でも、ぼくは三重ノ海さんがこんなに喋ってくれとは思わなかった。

三重ノ海 最初にちゅつと飲んだからね、きょうは(笑い)。

# 二十一世紀フォーラム・部会メンバー

## 発起人

内田忠夫  
東京大学教養学部教授。

加藤秀俊  
学習院大学法学部教授。

加藤芳郎  
漫画家。漫画家協会理事。

茅誠司  
東京大学名誉教授。日本学士院会員。

小松左京  
作家。学習院東洋文化研究所客員研究員。

東畑精一  
東京大学名誉教授。政策科学研究所理事。

中山伊知郎  
一橋大学名誉教授。日本労働協会会長。

松本重治  
国際文化会館理事長。

向坊隆  
東京大学総長。国連・開発の科学技術適用諮問委員会(ACAST)委員。

加藤秀俊部会

加藤秀俊  
(発起人の欄に同じ)

宮本常一  
日本常民文化研究所理事。武蔵野美術大学教授。

米山俊直  
京都大学教養部助教授。

加藤芳郎部会

加藤芳郎  
(発起人の欄に同じ)

青空うれし  
漫才。

青空はるお  
テレビタレント。

天地総子  
歌手。タレント。

大山のぶ代  
俳優。

大和田獏  
俳優。

岡江久美子  
俳優。

加治章  
NHKアナウンサー。

川野一宇  
NHKアナウンサー。

小島功  
漫画家。

砂川啓介  
俳優。

鈴木義司  
漫画家。漫画集団所属。

田崎潤  
俳優。

檀ふみ  
俳優。

坪内ミキ子  
俳優。

富田純孝  
NHKディレクター。

中田喜子  
俳優。

暮目良  
俳優。

水沢アキ  
俳優。

三橋達也  
俳優。

ロミ山田  
歌手。俳優。

渡辺文雄  
俳優。

茅誠司部会

有澤廣巳  
東京大学名誉教授。日本原子力産業会議会長。

生田豊朗  
日本エネルギー経済研究所所長。

稲葉秀三  
産業研究所理事。

内田忠夫  
(発起人の欄に同じ)

大島恵一  
東京大学教授。

岡村和夫  
NHK解説委員。

尾関通允  
日本経済新聞記事審査委員。

金森久雄  
日本経済研究センター理事長。

木元教子  
放送キャスター。

五代利矢子  
評論家。

齊藤志郎  
日本経済新聞アジア総局長。

三枝佐枝子  
評論家。商品科学研究所所長。

高原須美子  
評論家。

富舘孝夫  
日本エネルギー経済研究所研究部長。

中村貢  
朝日イブニングニュース社代表取締役社長。

永井陽之助  
東京工業大学教授。

橋口収  
公正取引委員会委員長。

深海博明  
慶応義塾大学経済学部教授。

伏見康治  
名古屋大学、大阪大学名誉教授。日本学術会議会長。

松根宗一  
大同特殊鋼相談役。経済団体連合会常任理事。

村田浩  
日本原子力研究所理事。

小松左京部会

小松左京  
(発起人の欄に同じ)

河合秀和  
学習院大学法学部教授。

中村隆英  
東京大学教養学部教授。

中山伊知郎部会

中山伊知郎  
(発起人の欄に同じ)

江藤淳  
評論家。東京工業大学工学部教授。

大来佐武郎  
外務大臣。日本経済研究センター会長。

篠原三代平  
成蹊大学経済学部教授。アジアクラブ理事長。

滝田実  
アジア社会問題研究所理事。

堤清二  
西武百貨店会長。西友ストア社長。

中根千枝  
東京大学教授。国際人類学民族学会副会長。

林雄二郎  
未来工学研究所副理事長。

松山幸雄  
朝日新聞論説委員兼編集委員。

ロベール・J・パロン  
上智大学経済学部教授。

松本重治部会

松本重治  
(発起人の欄に同じ)

川喜田二郎  
筑波大学教授。

永井道雄  
朝日新聞客員論説委員。

中村元  
東方学院院长。東京大学名誉教授。

本間長世  
東京大学教養学部教授。

前田陽一  
国際文化会館専務理事。東京大学名誉教授。

榎文彦  
東京大学工学部教授。

武者小路公秀  
国連大学プログラム担当副学長。

村上兵衛  
日本文化研究所専務理事。

柳瀬睦男  
上智学院理事長。

## 事務局

笠井章弘  
政策科学研究所理事。

生田豊朗  
(茅誠司部会の欄に同じ)

依田直  
東京電力企画室副室長。

山田嗣  
政策科学研究所主任研究員。

浜田崇  
政策科学研究所研究員。

二十一世紀フォーラム会報 第四号

発行

一九八〇年三月二〇日

発行人

笠井章弘

発行所

二十一世紀フォーラム事務局  
東京都千代田区水田町二の四  
の十一 フレンドビル3F

(財)政策科学研究所内  
電話〇三・五八一・二二四一

編集

二十一世紀フォーラム事務局

印刷

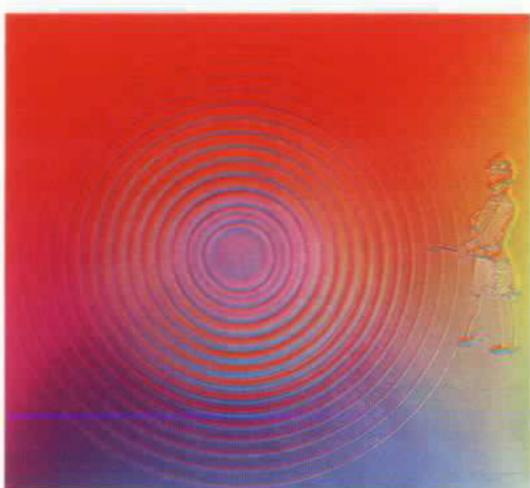
(株)東京印書館



A POINT OF VIEW

# 時間

深瀬昌久 ● お昼寝。



〈表紙のことば〉

永井一正

80年代の鼓動を告げるイメージ。音の波動は無限に拡大していきます。現実の世界は、色彩の多いリアルなものです。白のレリーフに還元することによって、通常の時間性を剥奪させ、永遠の時間を定着させてみました。私の〈白のレリーフ〉作品のひとつです。